



蒙疆政権の軍隊の形成過程に関する研究- 徳王の民族運動と関東軍

白, 那日蘇

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2024-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8226号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008226>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

蒙疆政権の軍隊の形成過程に関する研究

-徳王の民族運動と関東軍

令和4年1月

神戸大学大学院国際文化学研究科

[白 那日蘇]

蒙疆政権の軍隊の形成過程に関する研究

—徳王の民族運動と関東軍

所属専攻・コース名： 文化相関・アジア太平洋文化論
氏 名： 白 那日蘇
指導教員氏名： 萩原 守

[要旨]

日本の傀儡政権という形で日中戦争期の西部内モンゴルに存在していた蒙疆政権は、内モンゴルの自治独立運動を率いる徳王（ドムチョクドンロブ郡王）が関東軍と協力する形で作った政権であった。この蒙疆政権を支えていた軍隊は、もともと1936年の蒙古軍政府成立時に編成された所謂“蒙古軍”である。蒙古軍は1936年の創設当初から1940年までは、李守信の率いる部隊が大多数を占め、その内部構造としては、モンゴル人部隊の蒙師と漢人部隊の漢師という二系統があった。蒙疆政権内の日本側の組織としては、駐蒙軍、蒙古軍軍事顧問、蒙古軍軍事輔導官等があり、蒙古軍の支配権も1930年代末からは駐蒙軍によって握られることとなった。蒙疆政権下の軍事組織であるにもかかわらず漢人からなる部隊が含まれていることが、蒙古軍の最大の特徴であった。

1936年4月から8月の間、関東軍の板垣征四郎参謀副長の主導によって当時の満州国領内の熱河省（清代のジョソト盟、ジョーウダ盟、ジリム盟）を中心にしてモンゴル人兵士を集め、蒙古軍政府の正規軍として編成するという募兵工作が実施された。徳王は1934年から満州国領内でモンゴル人兵士を募兵していて、さらに関東軍にも募兵の要請を出していた。関東軍側は、板垣征四郎参謀副長が煙草谷平太郎を蒙古軍主席顧問に任命して、ドロン（多倫）で蒙古軍部隊を編制することを命じた。煙草谷顧問は、蒙古軍政府の宝貴廷少将とともに4月に承德特務機関の一室に募兵司令部を置いて、熱河省と興安西省の各盟旗で募兵を実施した。この新たに募兵された兵士の大多数が蒙古軍の第二軍として活躍することになる。本研究の第二章では主として、徳王や李守信の回想、煙草谷や板垣の回想を利用してこの募兵工作について詳しく検討した。

募兵工作の計画から実施、そして結果という流れを分析してみると、募兵を主張した徳王、募兵の命令をした関東軍参謀部の板垣征四郎、募兵の実施者煙草谷平太郎、募兵の参与者であるモンゴル側の宝貴廷、烏雲飛、包悦卿等が募兵工作に貢献したほかに、李守信の影響力や熱河省長張海鵬の協力も間接的に貢献したことが明らかになった。煙草谷はモ

ンゴル人のナショナリズムに訴えるなどの方法で募兵に成功し、募兵地から目的地までの行軍ルートでも熱河省省長の張海鵬の協力を得て、兵士を運ぶことができたのであった。

次に、本研究の第三章ではまず、漢人部隊に直接関係があった李守信とその部隊の由来を検討した。李守信が軍閥「毅軍」に身を投じてから、いかにして部隊を集め、当時の中華民国軍や軍閥が入り乱れていた時期にいかにして生き残り、そしていかにして漢人部隊とモンゴル人部隊を有する小軍閥になったかということを論じた。続いて、李守信が関東軍との対立から協力へと転じて、自ら関東軍の内蒙工作と深く関わり、自分の全部隊を蒙古軍政府の編制下に入れた際の経緯を論じた。第二章の主目的は、先行研究が未だ触れていない蒙疆政権の軍事組織研究の一環として、外務省外交史料館と防衛省防衛研究所所蔵の史料を利用して、1940年に日本の軍事顧問部と徳王自身の指導下で全漢人部隊が「治安警備軍」へと移管、改編された問題を検討することである。まず、漢人部隊のトップである三個師団の各師長をいかにして免職したかを検討した。次に、漢人部隊に対する移管政策、すなわち漢人部隊の有していた武器、装備、馬匹などの処理・回収の問題を解明した。最後に、蒙疆政権周辺の中華民国軍や軍閥の駐屯地、蒙古軍漢人部隊と彼らの交流、蒙古軍と共同作戦を取っていた小軍閥王英の反乱等を詳細に検証することによって、漢人部隊移管の原因を検討した。第三章の結論は以下の通り。

漢人部隊三個師団の内、第一師の師長劉継広は軍事顧問部と徳王によって包頭市の市長に任命された。第二師師長陳景春は、関東軍や徳王によって国民党軍との関係を疑われ、1939年に自ら下野した。第三師師長王振華は、部下の連隊長慕新亜が傅作義軍の馬占山に投降した責任を取らされて、駐蒙軍によって免職された。結局、漢人部隊の兵士の大部分を占める2874名が移管され、防寒帽、外套、靴等を除いて、兵器、馬匹、器材など全てを没収されたと思われる。移管された漢人の兵士たちは漢人が居住する地域の警備に当てられた。移管の原因としては、蒙疆政権の周囲にいくつかの反日・反モンゴルの漢人軍閥の政権が存在したため、日本の軍事顧問と徳王とが、蒙古軍漢人部隊の裏切りを恐れていたためと思われる。

第四章では蒙疆政権の軍事教育機構について検討した。近代内モンゴルにおけるモンゴル人向けの軍官学校としては、満州国の興安軍官学校と、蒙疆政権の幼年学校・蒙古軍総軍軍官学校とが挙げられる。徳王は1936年に最初の「軍官学校」を創設したが、1939年にはそれに代わって日本式の蒙古軍幼年学校を創設した。1943年にはそれに加えて総軍軍官学校を設立する。満州国と蒙疆政権におけるこれら二系統の軍官学校は、いずれもモン

ゴル人軍人を育成するための日本式の軍官学校であった。独力で軍事教育を施すことが難しかった蒙疆政権はやむを得ず日本と協力し、上記三校の設立によってモンゴル人の軍人や教官を自主的に育てることができるようになったのである。

上記三校設立の詳細を解明することによって、蒙疆政権の軍事政策やこれらの軍官学校が政権のモンゴル人部隊に与えた影響を解明した。モンゴル人の政権下で設立された蒙疆政権の蒙古軍幼年学校や総軍軍官学校の生徒たちは、実際に満州国の幼年学校や興安軍官学校の生徒たちよりもモンゴル民族としてのナショナリズムの意識が高かった。本章では当事者たちの回想録や日本側が残した当時の記録を直接利用した。結論としては、これらの軍官学校の設立時に最も重要な役割を果たしたのが日本側の軍人ではなく徳王その人であったという事実を得た。

目次.....	4
序章 蒙疆政権軍事史研究の意義と課題.....	8
第一節 本研究の背景.....	8
第二節 本研究の目的.....	10
第三節 先行研究の整理.....	12
第四節 本研究で使用する史料.....	16
第一章 蒙疆政権設立前の歴史的情勢.....	21
第一節 蒙疆政権設立前の東部内モンゴル.....	21
第二節 徳王の自治独立運動.....	22
第一項 徳王の自治独立運動の始まり.....	22
第二項 中華民国政府との初期の関わり.....	22
第三項 百霊廟蒙政会の成立.....	24
1、第一回百霊廟会議.....	24
2、第二回百霊廟会議.....	24
3、百霊廟蒙政会の成立.....	25
第三節 関東軍の初期の内蒙工作.....	25
小結.....	27
第二章 蒙古軍政府成立（1936年5月）前後における蒙政会と関東軍による募兵工作.....	28
第一節 募兵工作実施前の状況.....	28
第一項 煙草谷平太郎の描く当時の国際状況.....	28
第二項 募兵工作に至るまでの煙草谷平太郎の動き.....	29
第三項 土肥原泰徳純協定との関連.....	30
第四項 募兵工作の辞令受領.....	33
第五項 煙草谷平太郎と李守信軍との関わり.....	35
第二節 募兵工作.....	36
第一項 徳王による1934年の募兵.....	36
第二項 募兵前の熱河省の状況.....	37
第三項 募兵の困難さと募兵方法.....	39
第四項 募兵の経過.....	42
1、各地からの報告と徳王等モンゴル人の関与.....	42

2、活仏の還俗と師長任命.....	44
第五項 部隊の集結と輸送問題	45
1、部隊の集結	45
2、輸送問題	46
第三節 募兵工作の成果.....	48
第一項 新たな蒙古軍の編成.....	48
第二項 蒙古軍の閲兵式.....	50
第三項 煙草谷にとっての募兵工作.....	53
第四項 募兵工作後の煙草谷平太郎.....	54
小結.....	57
第三章 蒙疆政権下の蒙古軍における「漢人部隊」改編問題.....	59
第一節 蒙古軍李守信部の由来.....	59
第一項 北洋政府時代の李守信部.....	59
第二項 関東軍によって改編された李守信部.....	60
第三項 関東軍内蒙工作とのつながり.....	61
第二節 「漢人部隊」改編の具体像.....	62
第一項 「漢人部隊」の師長.....	62
第二項 改編された漢師の駐屯地と総兵力.....	64
第三項 「漢人部隊」の武器.....	67
第三節 「漢人部隊」を改編した理由.....	69
第一項 蒙疆周辺の軍隊.....	69
第二項 漢人部隊の叛逃.....	70
第三項 大漢義軍によるシラムレン廟兵変.....	71
第四項 漢人部隊に関する徳王の思惑.....	74
小結.....	76
第四章 蒙疆政権下の軍事人材育成機構について.....	77
第一節 徳王による最初の軍官学校の設立.....	77
第一項 徳王が最初の軍官学校を設立した経緯.....	77
1、軍官学校の前身―「蒙古幹部学生隊」.....	77
2、最初の軍官学校.....	78

第二項 最初の軍官学校を設立した理由.....	80
第二節 徳王による軍官学校の拡充.....	81
第一項 徳王による軍官学校設置の提案.....	81
第二項 幼年学校設立の理由.....	84
第三節 蒙古軍の幼年学校.....	85
第一項 幼年学校の生徒.....	85
第二項 幼年学校での教育.....	87
第三項 日本敗戦後の幼年学校生徒たち.....	90
第四節 蒙古軍の総軍軍官学校.....	90
第一項 蒙古軍総軍軍官学校の設置.....	90
第二項 総軍軍官学校の構成.....	91
第三項 生徒隊への教育、待遇及び授業科目.....	92
第四項 総軍軍官学校の卒業生.....	93
1、混乱の中の総軍軍官学校.....	93
2、共産党側への参加後の軍官学校の生徒たち.....	94
小結.....	95
終章 結論と今後の課題.....	97
第一節 結論.....	97
第二節 今後の課題.....	101
主要史料一覧.....	102
参考文献一覧.....	104
執筆者の業績.....	107
謝辞.....	108

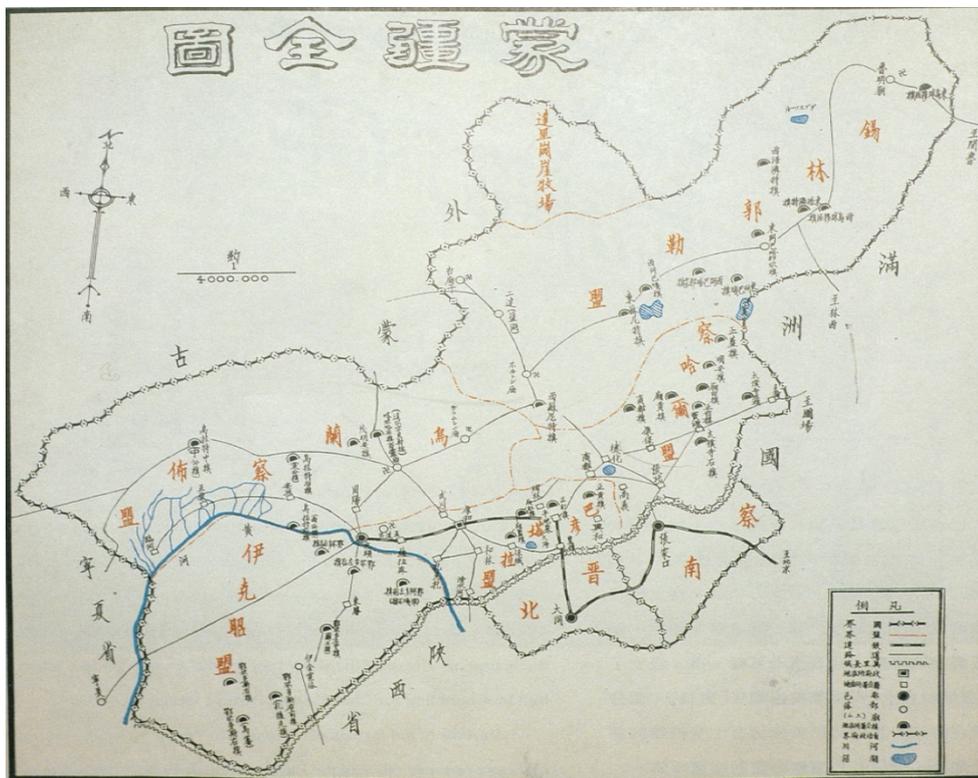


写真 1 青少年期の徳王

写真 2 青年期の徳王

『中國檔案精粹—內蒙古卷』, p.140 より

『中國檔案精粹—內蒙古卷』, p.141 より



地図 1 蒙疆全圖 『中國檔案精粹—內蒙古卷』, p.137 より

序章 蒙疆政権軍事史研究の意義と課題

第一節 本研究の背景

第一項 蒙疆政権

蒙疆政権とは、内モンゴル独立運動の中心人物であった徳王（ドムチョクドンロブ郡王）の指導下で1937年に綏遠（清代の帰化城トゥメト旗、すなわち現フフホト市とその周辺地域）において蒙古聯盟自治政府が成立してから、1945年の日本の敗戦までの間に、中華民国治下の地域（内モンゴル南西部）と満州国治下の地域（内モンゴル東部）の間に存在したモンゴル人の政権のことを指す。則ち、管轄地域としては内モンゴルのシリングル盟とウランチャブ盟、チャハル地域、綏遠等を中心とする西部内モンゴル地域である。徳王は日本と協力し、かつこの政権が日本の支配下にあったため、日本の「傀儡政権」であったとも言える。政権の名称変更や管轄地域の拡大などによって、政府名は次に述べるような3つの段階に変化するが、その全体の名称を一般に「蒙疆」あるいは「蒙疆政権」と略称して呼ぶ。

1928年、中華民国国民政府が蒙疆地域に熱河、察哈爾、綏遠の三省を設置した。これによって内モンゴルのこの地域は完全に中華民国内の省となり、事実上モンゴル人の自治権が失われる危機的な状態になった。蒙疆政権の前身である蒙政会は、こういう時代背景の下で1934年4月23日にウランチャブ盟の百霊廟で設立された。徳王がその秘書長を務めた。当時の蒙政会は中華民国内に存在した地方政権であったが、中華民国政府からの支持は得られなかった¹。1936年、関東軍の内蒙工作によって徳王と李守信が連携し、蒙古軍政府が成立した。この時期に初めて“蒙古軍”が編成される。日系顧問22名が政府を内面指導した²。蒙古軍政府はその後日本軍と共同作戦をとりつつ南下し、綏遠、包頭などの地域を占領していくつかの盟旗を有する事になる。1937年には“モンゴル各盟旗の団結”という徳王の主張に基づいて、蒙



地図 2 楊海英 2018, p18. より

¹ ガンバガナ 2016, p. 34 参照。

² 森 1992, p. 99 参照。

古聯盟自治政府が成立した³。1939年には日本側の主導のもとで、3自治政府（蒙古聯盟、察南、晋北）が統合されて、より規模の大きな蒙古聯合自治政府が樹立され、初代の主席に徳王が就任した。

1941年6月、徳王はかねてよりの願望通り日本の駐蒙軍に対して、厚和（フフホト）に「蒙古自治邦」を樹立したいと要求した。それに対して1941年8月4日に、駐蒙軍が、蒙古聯合自治政府を対内的に蒙古自治邦政府と呼ぶことを正式に承認したため、蒙古自治邦が成立したのである⁴。

第二項 蒙疆政権における軍事組織と募兵

蒙古軍政府が成立した時に編成された軍事組織が、所謂“蒙古軍”である。そのうち李守信の率いる部隊が当初大多数を占めていた。蒙古軍の中にもモンゴル人部隊の蒙師と中国人（漢人）部隊の漢師という二系統があった。日本側の組織としては蒙古軍軍事顧問部、蒙古軍軍事輔導官などの組織があつて、日本の特務機関、駐蒙軍等も蒙古軍に関与することがあつた。

蒙疆政権はモンゴル民族の政権であり、蒙古軍も本来ならば「モンゴル軍」と呼ぶべきかもしれないが、この名称自体が歴史上の用語であるため、呼び名を改変することによる不都合も生じる可能性がある。したがって、本稿では蒙古軍の名称をそのまま用いることとしたい。

1932年、中華民国東北部に日本の傀儡政権である満州国が成立し、内モンゴルのフルンボイル地方、ジリム盟などの地域もこの国に包含されることになる。翌1933年には関東軍の熱河作戦によって熱河省が同国に併合され、内モンゴルのジョスト盟、ジョーウダ盟も共に満州国治下となる。さらに、1936年4月から8月の間、関東軍の板垣征四郎参謀長⁵の主導によって、満州国領内の熱河省（清代のジョスト盟、ジョーウダ盟、ジリム盟）からモンゴル人兵士を募集して後述する蒙古軍政府の正規軍として編成するための募兵工作が実施された。板垣征四郎は煙草谷平太郎（たばこやへいたろう）を蒙古軍主席顧問に任命してドロン（多倫）で蒙古軍部隊の編成を命じた。同年4月、煙草谷顧問は募兵のため

³ 森（編）1994参照。

⁴ 森（編）1994, p. 274。

⁵ 板垣征四郎は、1934年12月から1936年3月まで関東軍参謀副長、同月から1937年3月まで同参謀長であった。

に蒙古軍政府の宝貴廷少将とともに承德特務機関の一室に募兵司令部を置き、熱河省と興安西省の各盟旗で募兵を実施した⁶。

第三項 蒙疆政権の軍事教育機構

近代内モンゴルにおいて代表的な軍事教育機構としては、満州国の興安軍官学校と蒙疆政権の幼年学校、蒙古軍総軍軍官学校が挙げられる。興安軍官学校は、日本の陸軍士官学校出身のジョンジョールジャブ⁷の提案によって満州国内の純粋なモンゴル人軍人を育て訓練する目的で、1932年に鄭家屯に創設された。1939年に陸軍軍官学校と名称が変更される。この興安軍官学校の卒業生が蒙疆政権の軍にも将校として数多く配属されていた。一方、西部内モンゴルでは1936年の蒙古軍政府成立後、徳王がシリングル盟スニト右旗で最初の「軍官学校」を創設した。この学校は1939年に日本の軍事顧問の指示で幼年学校へと改編された。その後1943年に総軍軍官学校が追加設立される。満州国と蒙疆政権とのこの二系統の軍官学校は、軍事強国日本に学んでモンゴル人の軍人を育てようとする軍官学校であった。当時の内モンゴルではモンゴル人だけで自主的に軍事教育を実施することが難しかったが、日本の影響下に入った蒙疆政権においては、最初の軍官学校、幼年学校、総軍軍官学校の相次ぐ設立によってモンゴル人軍人や教官を自主的に育てることができるようになったのである。

第二節 本研究の目的

西部内モンゴルのシリングル盟スニト右（西スニト）旗旗長であって1924年にシリングル盟副盟長を兼務することになった徳王（ドムチョクドンロブ郡王）がモンゴル民族の自治独立を呼びかけ始めると、モンゴル人の間で強い影響力を持つようになる。徳王による民族自決運動は1934年の百靈廟蒙政会から始まって、蒙古軍政府（1936年）、蒙古連盟自治政府（1937年）、蒙古聯合自治政府（1939年）、蒙古自治邦（1941年）という一連の政権の変転の下で行われるが、各政府の軍隊の編成は必ずしも政府の成立と同時に完成したものではない。例えば、蒙古軍政府治下の蒙古軍第一軍と言われる李守信軍は蒙政会とは殆ど関係がなく、もともと熱河省あたりに存在していた軍閥風の漢人部隊であった。徳

⁶ 森2000, p. 132等を参照。

⁷ ジョンジョールジャブ（1906年—1967年）。満州国軍人、モンゴル人。いわゆる「第2次満蒙独立運動」を起こしたバボージャブの三男。日本の陸軍士官学校を卒業してから蒙古独立軍を組織し、その後は満州国興安軍管区参謀所長に任命される。

王と李守信の連携によって蒙古軍第一軍の編成下に入ったのである。また、蒙古軍第二軍は前記の大規模な募兵工作によって新たに編成され、蒙古軍政府成立（1936年5月12日）後の1936年8月頃に正式に蒙古軍政府の部隊となる⁸。

この募兵工作は近代内モンゴルの歴史上においても徳王らモンゴル人支配者層と日本の関東軍とをむすびつける役割を果たす重要な出来事であった。しかし、募兵工作に関わったモンゴル人関係者の史料の欠如などの原因によっていまだ詳しく研究されていない。そこで本研究の第二章では、この募兵工作を直接担当していた煙草谷平太郎の残した貴重な史料を重点的に分析し、この募兵工作の持つ意義を検討したい。蒙疆政権下における軍事組織の研究としては、募兵工作と蒙古軍第二軍との繋がりを初めて解明することにもなり得るであろう。

続いて1940年に軍内部に大きな変化が起こった、それは蒙古軍第一軍の漢師を「治安警備軍」へと移管・改編したことである。治安警備軍とは、軍隊というよりも警察に近いものであり、この移管に伴って武器も大量に回収されるなど、大きな改編であった。そこで、本研究の第三章ではなぜ漢人部隊を治安警備軍へと移管したのかという問題について論じてみたい。それによってまず、徳王と日本の軍事顧問とが漢人部隊に関してどのような意識を持っていて、蒙古軍をどのような軍隊にしたいと考えていたのかという問題を解明することができるであろう。また、「漢人部隊移管」に関して徳王と日本側軍事顧問との両者の意見が一致した原因を探ることもできるであろう。

第三番目の視点として、軍事教育についていうと、徳王は西部内モンゴルにおいて複数の学校教育機関を設置した。この中から軍官学校を取りあげて、徳王が蒙疆政権の軍事力を強化するための手段として検討すれば、彼が軍事面でどのような思想を持っていたかを解明できるであろう。また、蒙疆政権の蒙古軍からみて軍官学校がいかなる意義を持っていたか、モンゴル人部隊に何をもたらしたのかを明らかにすることができる。

軍官学校は蒙古軍の軍事組織の研究において欠かせない部分である。本研究では、徳王が1936年に設立した最初の軍官学校、1939年に設立した幼年学校、1943年にフフホトで設立した蒙古軍総軍軍官学校など一連の軍事教育機関が設立された理由と意義をそれぞれ明らかにすることによって、蒙疆政権が軍事教育の面で日本といかなる関連を持っていたのかを解明したい。蒙疆政権の幼年学校と軍官学校には興安軍官学校出身のモンゴル人が

⁸ その概要は森 2000, p. 128, 135 等でも述べられている。

教官として勤める傾向があった。そこで、満州国のモンゴル人軍人が蒙疆政権にいかに関わっていたのかということも明らかにしたい。

蒙疆政権の幼年学校と総軍軍官学校は日本の軍事教育制度をそのまま引き継いで、日本の教官が指導していたので、現在の中国国内では、モンゴル人青年たちに対して傀儡教育或いは同化教育を行っていたかのような評価が盛んになっている。そのためか、徳王自身がいかに軍官学校に力を入れていたかという問題はあまり評価されていない。そこで本研究では、最初の軍官学校から幼年学校、総軍軍官学校へと続く学校の設立が徳王自身と直接関連していることを、モンゴル側と日本側双方の史料を照らし合わせて検証してみたい。蒙疆政権は確かに日本の傀儡政権ではあったのだが、日本の支配下で作られた幼年学校及び総軍軍官学校の生徒達が本当に日本の傀儡教育を受けていたのかどうかをも明らかにしたい。

第三節 先行研究の整理

本研究の先行研究として存在するのは、主として徳王と李守信に関する研究のみである。例えば、徳王に関する代表的な研究である森 2000 が、蒙疆政権の軍事組織などの問題も研究している。森 2000 の第一部第三章第三節「関東軍の内蒙工作」では、関東軍がいかにして熱河作戦を進め、李守信の部隊をいかにして蒙古軍政府の部隊へと編成したかということが書かれている。また、李守信に関する研究である楊 2018 は、文史資料である『徳穆楚克棟魯普自述』、『李守信自述』、『偽蒙古軍史料』（後述する史料④）などを詳細に利用して書かれている。しかし、上記のいずれも、人物研究中心であるため、募兵工作については、蒙古軍を編成するために東部内モンゴルから募兵したことなどが簡略に書かれているのみであって、詳細な研究はまだなされていない。

蒙疆政権に関する代表的な研究である森 2000 は、徳王、満州国興安省、蒙疆政権、関東軍に関する諸史料と『徳王自伝』に基づいてまとめられている。森氏は十数年間、毎年内蒙古各地へ実地調査に行った。当時内モンゴルに住んでいた徳王の三男オチルバトとも深い関係を持ち、重要な史料を入手することができた。森 2000 の第二部は、森氏の希望に応じてオチルバト自身が執筆した。

次に、楊 2018 が蒙疆政権の軍事組織などの内容も深く研究している。楊 2018 は、李守信の人物像を、徳王に忠誠を尽くし勅諭を遵守するカリスマ的な將軍として描いている。徳王は民族の復興を実現させる為に貢献し、勲一等瑞宝章を授けられて日本帝国の運営に

も貢献した日本帝国の将軍であったと述べている。李守信が関東軍の熱河政策によってドロロン（現多倫県）占領に成功し、徳王と初めて会見した時から徳王のために一個師団の部隊を組織したことや、蒙古軍が成立した際には徳王と連携し、自分の率いる全部隊を蒙古軍政府の直属部隊として編成したことも述べている。蒙疆政権が崩壊して徳王がモンゴル人民共和国へ亡命した後も、李守信は台湾へ逃亡することをやめて、最後に逮捕されるまで徳王と行動をともにし、1966年5月23日に徳王が他界した時は、李守信が、葬儀に駆けつけたというような詳細な事情を明らかにしている。李守信は1970年に他界したが、楊2018では主に李守信個人の軍人としての生涯を描写し、その政治行動に注目している。

また楊2018では『李守信自述』に基づいて、李守信の率いる第一軍が彼の親衛隊のような存在であったと書かれている。この第一軍は、軍長の李守信がモンゴル人であった以外は、将校と兵士の約一割だけがモンゴル人であったに過ぎない。総司令部の中では烏古廷が参謀長、劉正中が副参謀長を担当し、郭光挙が参謀処長、張啓祥（アルビジホ）が副処長であった。紀樹勳が軍械処長で、陳康烈が軍法処長で、丁其昌が砲兵隊長だった。この中では烏古廷、張啓祥（アルビジホ）だけがモンゴル人であった。楊2018では1940年に蒙古軍の漢師を治安警備隊へと編成換えしたことについて、日本側はモンゴル軍の勢力増大が脅威になり得るので、それ以上の増強と武装強化は必要でないと判断したと理解している。また漢師を改編したことは李守信にとって右腕を失ったのも同然であったと書かれている⁹。

蒙疆政権の軍事教育機構に関しては専門書や学術論文はいまだ出ていないが、楊2015の第5章で少し述べられている。楊2015は、内モンゴルの近代化における日本の影響を強調し、特に軍事面では興安軍官学校と蒙疆政権の幼年学校及び総軍軍官学校において日本のおかげで軍隊の近代的教育が進んだと強調している。満州国の興安軍官学校は大日本帝国が外地で作った唯一の、特定の民族のための学校である。蒙古軍幼年学校も同様であった¹⁰。そして、楊2015は、日本の陸軍士官学校、満州国の興安軍官学校、蒙疆政権の幼年学校で学んだモンゴル人青年軍人たちの一部が内モンゴル自治区各界の知的エリートと

⁹ 楊2018, p. 192。

¹⁰ 楊2015, p. 12。

なり、中華人民共和国成立後の1950年代においても結果的にモンゴル人が中国国内で最も学歴の高い民族となったことを明らかにしている¹¹。

一方、楊2015では「日本は先の大戦の経験があつてか、軍隊や軍人について触れることを敬遠する傾向がつよい」と批判的に述べている。ただ楊2015では幼年学校初代の校長博彦們都（ボインメンド）の回想録（後述する史料④）が使われているものの、より早い時期に完成している日本側の史料を利用していない。例えば、幼年学校の主任教官であった井上辰雄、教官の遠藤延平などの回想録が利用されていない。蒙古軍軍事顧問部の史料も使われていない。また、内モンゴル自治区の中共呼和浩特市委党史資料征集办公室の編集した『呼和浩特史料』の中の、綏遠を占領してからの徳王の行動や軍官学校についての内容にも触れていない。

また楊2015は当時のモンゴル人が日本人及び日本の軍人を守ろうとした行為を強調し、総軍軍官学校の生徒による終戦時の民族主義的な反乱行為に対してさらなる分析をしていない。興安軍官学校と蒙疆政権の幼年学校、総軍軍官学校との間でなされた人事異動を初めとするモンゴル人教官たちの問題にも触れていない。以上のように、楊2015は興安軍官学校を重点的に紹介し、日本の強い影響の下で誕生したモンゴルの軍官学校と近代騎兵を正当に評価している点では価値が高いと思われる。蒙疆政権に関しては一つの章でしか述べておらず、利用する史料にも限界があつて不足点もあるが、先行研究として扱う価値は高い。

一方、最新の研究である及川（2019）によって日本の大陸政策及び満州国軍の全体像について、より詳細な研究が進んでいる。及川（2019）は、東三省に存在していた奉天軍との関係から説き起こして満州国軍の発展と崩壊を論じ、1940年に満州国で公布された「国兵法」を取り上げることによって、同法が満州国軍にとってどのような意義を有していたかという新たな問題を提出した。この研究は満州国軍の研究ではあるが、本稿から見ても先行研究としての価値が非常に高い。特にその第二章で満州国軍においてモンゴル人に対する期待が大きかったという問題を取り上げている点が重要である。日露戦時の特別任務班でモンゴル人を利用したという経験から日本側がモンゴル人の戦闘力、体力などの詳細な調査も行っていたという事例を取り上げ、「尚武の民族」であったモンゴル人に期待していたことを明らかにした。また、満州国の「建国」はソ連及び中国によって分断状態に

¹¹ 楊2015, p. 12が最もよく知られた研究である。

あったモンゴル人の統一、民族自決を支援するという論理のもとに進められたと述べ、その延長線上に立って兵力源としてのモンゴル人に期待したと論じている。満州国の「国兵法」もモンゴル人が主たる対象であって、人口比率で見るとモンゴル人の徴兵負担が漢人よりはるかに重かったと述べている。そして、兵役負担が社会的影響力の高いラマ僧にまで及んでいたことも指摘した。本研究で論じる蒙疆政権の募兵工作も関東軍参謀部が考え出した政策であるため、及川（2019）は先行研究として参照する価値が高い。ただし、さすがにモンゴル人の民族自決へのナショナリズムを日本側が利用した実例を検証するまでには至っていない。したがって本稿での検証は、及川（2019）で示された日本側によるこのナショナリズムの利用例を実証するという意義も有することになるであろう。

募兵工作については、森（2000）が関東軍の内蒙工作の展開の一環として簡略に述べている。徳王の募兵に関して、西部内モンゴルのシリングル・チャハル両盟が人口希薄で、比較的人口の多いウジュムチン旗でさえ兵士の徴収にあまり熱意がなかったため、満州国の東部内蒙古で兵員を募集することになったと述べている。「徳王自述」の通りに、募兵のため宝貴廷と烏雲飛をジョソト・ジョウウダ両盟へ派遣し、包悦卿をジリム盟へ派遣して募兵したとも述べている。煙草谷平太郎が熱河省、興安西省で募兵を開始し、5000人の兵士を集めることができたとも述べている。森（2000）は広く関東軍の内蒙工作に関する重要な先行研究として、関東軍と徳王の政府との関係を検討し、細かい点で言うと、蒙古軍のモンゴル人部隊形成についても徳王及び煙草谷の記述に基づいて短く言及している。本研究では、森（2000）が触れていない募兵工作の詳細な経過、及び募兵ルート、募兵工作前の歴史事情等を初めて解明することによって募兵工作のもつ意義も再検討したい。

日本の対満州政策に関しては鈴木（2012）が研究しており、東部内モンゴルについても、満州国建国前からのモンゴル人に対する理解、およびそれに踏まえた統治政策をも検討している。具体的には、モンゴル人居住地での興安局の創設や興安省の設立、モンゴル人の求める自治の問題なども研究されている。

日本軍の陸軍幼年学校に関しては野邑（2016）が陸軍幼年学校体制の歴史的な位置付け、幼年学校と陸軍での昇進問題との関係等を検討し、1896年の幼年学校の大改革やその後の制度について検討している。蒙古軍幼年学校の模範となる日本の陸軍幼年学校について研究した重要な先行研究である。伊藤・季武（2005）も、関東軍関係の軍人や政治家についての史料や情報の検索に極めて重要な参考となる。

第四節 本研究で使用する史料

本研究では、主に以下の12種類の史料を利用する。

史料① 春日行雄（かすがゆきお）編纂（2004）『蒙古軍史稿』の中に収録された煙草谷平太郎自身による手書きの回想録「関東軍内蒙工作」。この『蒙古軍史稿』全体がゼロックスコピーによる複写本であり、「関東軍内蒙工作」の部分は下記史料②の後半部分を煙草谷自身が改めて書き直した上で編纂者春日に提出したものと思われる。史料②を訂正したと見られる部分もあるため、こちらの方が史料的価値はやや高いと思われる。この史料『蒙古軍史稿』は、昭和15（1940）年8月～20（1945）年8月15日において、当時の内モンゴルの官衙、部隊、学校などに務めていた日本人の記憶をもとにまとめた蒙古軍に関する回顧録である。未出版史料であるが、筆者の調べたところでは、東京外国語大学図書館に所蔵されている。この「関東軍内蒙工作」の中に1936年4月から6月下旬まで満州国の熱河省方面で実施された募兵工作のことも記録されている。蒙古軍政府成立前後の募兵工作について現存するほぼ唯一の史料である。本回想を煙草谷平太郎は、「その儘の事実をそのままの気持ちで書きました」と自ら記述している。当事者の残した回想録であるから、批判的に扱う必要があることはもちろんであるが、その一方で当事者にしか知り得ない事実も大量に含まれている。例えば、当時の内外モンゴル、日本、中国、ソ連などに関して煙草谷等日本側の関係者がいか様に理解していて、募兵工作がいかなる時代背景のもとで行われ、さらに、煙草谷等の実施者がいかなる意義を持つと考えていたのかが詳しく書かれている。募兵工作は全て秘密裏に行われたため、その関連史料は現地においても発見し難い。それゆえに、煙草谷平太郎のこの回想は、非常に価値が高い。募兵における煙草谷の役割は大変大きかったが、彼の一番の功績は貴重な回想史料を記録し保存したことにあるとも言えよう。この「関東軍内蒙工作」は全て手書きであるが、縦書きで清書された前半部分と横書きで原稿用紙に記された下書き風の後半部分からなる。ただし前半と後半の内容は別々であるため、両方とも価値が高い。前半は各頁の右上に3～32というページ番号が手書きで記され、かつ、偶数頁の左下に84～98というページ番号が印字されている。本稿ではこの印字された番号で出典箇所を示す。一方、後半は、各頁の右上のみに1～22というページ番号が手書きで記されている。

蒙古軍幼年学校に関しては、蒙古軍幼年学校の日系教官であった遠藤延平が春日に送った手書きの資料を利用する。

春日は、蒙疆政権下で活躍した軍医であり、外モンゴルでの抑留から帰国した後、松崎陽、柳下良二（後述）ら蒙疆政権下で活躍した親モンゴル派の人々とともに、日本とモンゴル民族との友好関係の樹立をめざす「日本モンゴル協会」を設立した人物である。1997年には、モンゴル国のストリート・チルドレンのために自分の年金を使って「テムジンの友塾」という学校をウランバートルで開塾して、衣食住の面で彼らを養っていた。結局、春日は終生モンゴルと関連する事業に携わっていたわけである。彼は、戦中期の自分たちの行為を反省するような意味も込めて、蒙疆政権を単なる帝国主義国の傀儡国家ではなく、日本側にはモンゴル民族を支援する意図があったとして、自分たちのモンゴルへの深い思い入れをこの史料に残したのである。

史料② 防衛省防衛研究所所蔵史料 文庫-依託-325「熱河作戦以後の満軍指導と蒙古工作（綏東事件）一元満軍指揮官 煙草谷平太郎」。この史料は煙草谷平太郎が自分自身の経歴を記録した回想史料である。この史料に書き加えられた後述する説明によると、香川県高松市の出身であった煙草谷平太郎は陸軍士官学校 29 期生であり、軍縮の時¹²に現役をやめて満州国に入り、満州国軍の張海鵬¹³の第三支隊の軍事指導を担当したという。後述するように、煙草谷は熱河占領作戦で活躍して、日本と中華民国との間で土肥原・秦徳純協定¹⁴が結ばれた時にも功績があった。そして昭和 10（1935）年 8 月から板垣参謀副長の懇望によって、新しい蒙古軍の募兵と編成、綏遠事件に於ける戦闘指導にあたったという。

本史料全体が万年筆で書かれており、前半の「満州国の部分」と後半の「蒙古の部分」という二つに分割されている。「満州国の部分」は、満州国軍の第三支隊を率いて通遼から進軍し、関東軍第六師団とともに熱河作戦に参加したことから始まり、1935 年 6 月 27 日の土肥原・秦徳純協定が結ばれるまでの記録である。第三支隊による隆化城の占領、匪賊王二虎の部隊との戦闘、豊寧城攻略戦、承德入城などの軍事行動や途中での出来事を記述している。「蒙古の部分」は史料①の「関東軍内蒙工作」とほぼ同じく募兵工作から蒙古軍の編成、綏東作戦、綏遠事件までのことを記している。内容は史料①とほぼ同じであ

¹² 陸軍で実施された 1925 年の「宇垣軍縮」のことかと思われる。

¹³ 張海鵬。もと中華民国軍人。漢人。北京政府の奉天派に属し、1931 年の満州事変後に関東軍へ投降して満州国に参加。

¹⁴ 土肥原・秦徳純協定とは張北での日本と中華民国国民革命軍第 29 軍との衝突をめぐる日中両国間の協定である。1935 年 6 月 27 日に結ばれた。察哈爾省北部における日本の軍事行動を尊重するなどの条項も含まれている。日本側と中華民国側の代表者の名が協定名となった。

るが、文章は異なっている事が多い。史料②には史料①に書かれていないことが書かれている場合もあるため、両方参照する必要がある。

史料③ 香川県立図書館所蔵の煙草谷平太郎自身による手書き自叙伝『一生浪人の一生』1—7巻¹⁵。この内の内蒙古に関する部分は、史料①、史料②で煙草谷平太郎が記述した部分とほぼ同じ内容であるが、その前後の部分には、ここからしか知り得ない情報が多く含まれている。

史料④ 『内蒙古文史資料』シリーズの『徳穆楚克棟魯普自述』（第3輯、第6輯、第13輯）、『李守信自述』（第20輯）、『内蒙古文史資料』（（第29輯）博彦們都（ポインメント）の回想録が含まれている。）、『偽蒙古軍史料』（第38輯）等総数50輯。内蒙古人民出版社1979年。ただし徳王や李守信がこれらの回想の中で事実や自らの心境をありのままに記録できたとは限らないため、使用に当たっては注意が必要である。

史料⑤ ジャクチト・スチン著1985『我所知道的徳王和當時的内蒙古』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。シリンドル盟政務院に務めていた札奇斯欽（ジャクチト・スチン）の回想録。

史料⑥ 中共呼和浩特市委党史資料徴集事務室編集『呼和浩特史料』第六集1985年、第七集1986年（出版社名の記載なし）。

史料⑦ 蒙疆新聞社が昭和十九1944年に発行した『蒙疆年鑑』。

史料⑧ 松井忠雄1966『内蒙三国志』原書房。関東軍の熱河作戦に参加したドロロンと徳化の元特務機関補佐官による回想。

史料⑨ 板垣征四郎刊行会編1972『秘録 板垣征四郎』芙蓉書房。この史料には関東軍参謀時代から1945年の東京裁判によって死刑になるまでの板垣征四郎の生涯が描かれており、関東軍内部の同僚による回想や板垣征四郎本人の手記、日記、遺言も収録されている。戦史編纂官稲葉正夫の板垣征四郎についての記述や徳化特務機関長であった田中隆吉の発言なども含まれている。

史料⑩ 小林龍夫・島田俊彦編1964『現代史史料』7、島田俊彦・稲葉正夫編1964『現代史史料』8、角田順編1964『現代史史料』10。みすず書房。

史料⑪ 「アジア歴史資料センター」の史料。ウェブページにて閲覧可能な日本の防衛省防衛史料館所蔵史料：昭和戦前期（A B C E F G H I M N Z）門（すでにデータベース

¹⁵ 長志珠絵先生（神戸大学）の御教示によってこの史料の存在を知った。謝意を表したい。

化されてインターネット上で公開されている)。「満州-満蒙-69」、「満州-満蒙-106」、「漢人部隊移管計画」C13021510600。日本陸軍第七師団が1934年に作成した記録である『熱河常報』の17号「朝陽県ニ於ケル蒙旗ノ県治ニ服セサル件」、37号「朝陽県下ニ於ケル蒙古保安隊存続ニ関スル満蒙両当局ノ意見ニ就テ」等。防衛省防衛研究所所蔵。

<https://www.jacar.go.jp>

史料⑫ 日本の防衛省防衛研究所所蔵史料（ウェブ上での公開がなされていない史料）陸軍一般資料 「満洲-満蒙 54 蒙古軍軍事顧問部」、『熱河常報』の36号「熱河宋哲元軍配置概見図」。

史料①、史料②、史料③の煙草谷平太郎の史料、特に「内蒙工作」に関しては、自分自身を主人公とする立場で書かれていて、募兵工作の業績を一人で完成させたかのように記述されている。本研究では必要な部分を利用し、彼自身の行為に対して擁護しているような部分を批判的に扱う必要がある。史料①の遠藤延平の資料に関しては、終戦後数十年をへて回想した物であるため、全てが正確な情報だとは判断できかねる。すなわち2004年頃に、書かれた可能性もあって、蒙疆政権当時作成された資料ではない。自己弁護的に日本側よりの姿勢で書可能性にも注意する必要がある。

内モンゴル側の史料である内蒙古文史史料も、その作成された背景を充分理解した上で利用すべきである。『徳穆楚克棟魯普自述』『内蒙古自治運動始末』でいうと、中国共産党党委員の命令によって作成されたので、蒙疆政権の性質については、日本に侵略された傀儡政権であることを前提に、日本と協力した罪に関して懺悔しているように書かれている。当時の蒙疆政権のモンゴル人たちが近代化を進めるために自ら日本へ接近して、特に軍事面で積極的に日本の軍事教育を受けていたという事実を避けて記述されている。したがって、他の史料と照合して見る必要がある。

幼年学校や軍官学校の設置に関する徳王の行動は、『李守信自述』や史料⑥にも記録されている。幼年学校の日本人教官が当時残した資料も利用価値が高い。内モンゴルの中華民国時代の檔案は現在閲覧不可能な状態であるため、内モンゴル側の史料があるかどうかはなお不明であり、今の所文史資料の回想録を利用するしか方法はない。

史料⑤に関しては当事者たちの回想録と同様に利用することができるが、何しろ第二次世界大戦終了後、ほぼ40年も過ぎた後の回想なので著者の思想やイデオロギーもある程度変化しているはずである。一般に日本が侵略したことを強調し、徳王や親日派のモンゴル人が積極的に日本の軍事教育を受け入れようとした行動を軽視する傾向にある。

史料⑩の蒙古軍幼年学校教官だった青木主任教官の「蒙古軍幼年学校創開計畫私案」は1939年8月17日に作成された当時の資料なので、利用価値が高い、しかし、蒙古軍の教官という地位から判断しても、日本軍側の立場を弁護するような書き方になっている可能性があり、注意が必要である。当時の状況を見つけ出すには注意する必要がある。

第一章 蒙疆政権設立前の歴史的情勢

第一節 蒙疆政権設立前の東部内モンゴル

二十世紀初頭の内モンゴル東部全域では、入植してくる漢人農耕民に反対する反開墾闘争が起こり、それに呼応する形で1911年12月1日に外モンゴルが独立を宣言すると、フルンボイル地域やジリム盟でも大規模な独立運動が起こった。その後、国内外で学んだ若いモンゴル人の中にも中国国民党や中国共産党に参加する人々が現れ、1925年には外モンゴルのモンゴル人民革命党をまねた内モンゴル人民革命党が結成された¹⁶。

一方、1931年9月18日に満州事変が勃発し、日本の関東軍によって満州全土が占領されて、1932年3月1日には満州国の「建国」に至った。この時点で内モンゴルのジリム盟、フルンボイル、ブトハ地域は既に満洲国領内に入っていた。さらに1933年5月31日に関東軍の熱河作戦によって熱河省が満州国に併合されると、東部内モンゴル地域のジョスト盟とジョーオダ盟も新たに満州国の支配下に入る。当時のいわゆる東部内モンゴルの範囲全体としては、ジリム盟、ジョスト盟、ジョーオダ盟、フルンボイル、ブトハ地域が含まれていた¹⁷。

これら内モンゴル東部のモンゴル人たちは、満州事変や満州国建国を契機に民族独立運動をさらに活発化させた。例えばバボージャブの遺児ガンジュールジャブ・ジョンジュールジャブ兄弟が国内外のモンゴル人青年に結集を呼びかけ、東北蒙旗師範学校の教師や生徒、満州国各地や北京、南京のモンゴル人学生、日本留学経験者などを集めて、蒙古独立軍の編成を計画した。彼らは関東軍から武器弾薬の供与などの支援を受け、1931年9月28日に「蒙古独立軍」が結成された。この軍は後に「内蒙古自治軍」に改組され、部隊も第一軍、第二軍、第三軍、砲兵隊に編成された。関東軍にとって、この内蒙古自治軍は謀略部隊としての利用価値があり、この「満蒙独立運動」を利用して、内モンゴル東部から張学良政権の影響力を排除しようとしていた¹⁸。

一方、1932年3月1日の満州国建国によって、内モンゴル東部とフルンボイルに特別行政区域として「興安省」が設けられた。3月9日には、興安省に北・東・南の三分省を設けることに決定し、5月10日には興安西分省が新設された。4月の満州国軍軍管区制の実

¹⁶ 鈴木2012, p. 216。

¹⁷ 鈴木2012, p. 111-112。

¹⁸ 佐々木2013, p. 30。

施に伴って、内蒙古自治軍は興安南分省警備軍（司令官はバドマラプタン、参謀長はガンジュルジャブ）に改編された¹⁹。

満州国の建国と東部内モンゴルの併合によって、関東軍側はより簡単に西部内モンゴルへの軍事的、政治的工作を展開できるようになったのである。

第二節 徳王の自治独立運動

第一項 徳王の自治独立運動の始まり

徳王は清末民国初期に起きた内モンゴルでの重要な事件について注意深く研究していた。モンゴル各旗はそれまで基本的に開墾に反対してきた。例えば、綏遠城將軍貽穀による清末期の強制開墾政策に対抗して、ゴルロス前旗のトクトホが清朝による開墾に反対し、中華民国期にホルチン左翼中旗のガーダーメイリンが奉天軍閥による武力を用いた開墾に反対した。また、外モンゴルに呼応して行われたフンボイルでの独立運動、バボージャブの独立運動等も起きた。これらの運動がことごとく失敗した原因は分旗支配が行なわれていて、それぞれ勝手に行動したためであると徳王は考えた。開墾への反対、民族の独立運動を成功させるにはこの分旗支配を打破し、それぞれ勝手に行動してばらばらであった状態を打破すべきだということである。各盟旗が団結して統一した政治組織を持ち、統一指揮をおこなう指導者がおれば良い。そうすれば初めて、意志を統一して力を集中し、運動を成功に導くことができる徳王は考えたのである。

徳王によると当時、モンゴル人王公の中には、老いぼれて現状に甘んじ進歩を求めない者、腐敗、墮落して享楽を求める者などがいた。また、年なお幼く、自立できないものもあり、いずれも有為とするに足りなかったという。モンゴル人王公の中でモンゴルの自治独立獲得事業を担う者は徳王自身を措いてほかにいないと彼は考えていた。

徳王は、北京で中華民国の政府と接触するのみならず、北京にいるモンゴル人知識青年たちとも頻繁に連絡をとっていた。北京居留蒙古同郷会でもモンゴル知識青年たちの支持を受けて応援されていた²⁰。

第二項 中華民国政府との初期の関わり

¹⁹ 佐々木, p. 32

²⁰ 森 1994, pp. 4-7

徳王は、1924年にシリングル盟副盟長になってから、自ら中華民国政府と政治的に接触し、また、中華民国側にも影響を与えていた。

徳王は北京で段祺瑞(中華民国臨時執政大総統)が1925年に開いた善後会議²¹にも参加し、出席した会員たちと広く会談していた。段祺瑞は第二次奉直戦争の後、臨時的に執政していて、中華民国自体も政権がまだ安定していない時期であった。このように中華民国側にも影響を与えていて重要な会議などに招かれていた。

1928年に北伐によって中国を統一した蒋介石は、1931年の満州事変後に対日関係の処理に忙殺されるとともに、共産党の革命根拠地への討伐作戦を指揮していた。徳王と蒋介石は、1932年末頃に武漢と南京で2回に渡って面会した。いずれも軍事上の問題について蒋介石が指示するような形であった²²。1930年頃、閻錫山と馮玉祥が蒋介石を打倒しようと計画していた。閻錫山はそれに失敗してからモンゴル人民共和国とこっそり連絡をとっていた。閻錫山の特派した2人の部下が徳王の西スニト旗を通してモンゴル人民共和国へ行こうとしたところで徳王の警備隊の検問に遭って勾留された。徳王が尋問すると、閻錫山からの一通の手紙と宝石、玉器などの贈り物を持っていた。徳王はこの事件を察哈爾省主席劉翼飛に知らせ、張学良或いは蒋介石に報告されたのであった²³。これ以後、蒋介石は徳王への強い印象を持つようになり、味方につけて国民政府の北方を安定させようとした。さらに、徳王の支配地は外モンゴルに通じる要衝の地であったので、「防共」に徹することを進めたのである。

蒋介石はまず部下の桂永清を直接西スニト旗へ状況視察に特派して、蒙古騎兵師を設立するように徳王に勧めた。次いで、南京で会った時に黄埔軍官学校張北分校設立の計画を持ち出して、軍幹部養成を要請した。蒋介石が徳王の軍備を強化しようとしたのは、「防共」の目的以外に、中華民国北部の安定化及び、満州国を建国させた日本に対抗するためでもあったと考えられる。

徳王は、蒋介石のみならず当時の中華民国の政治家たちと幅広く連絡を取っていた。例えば、1932年11月頃に初めて蒋介石と武漢で面会する時に、北京を通過した際も張学良²⁴

²¹ 1925年2月中華民国国民政府臨時大総統段祺瑞が臨時執政を務めていた時に政権をさらに強化するために開いた会議。

²² 森 2000, p. 25

²³ 森 1994, p. 17

²⁴ 中華民国奉天派東北軍軍閥の統帥。1931年満州事変以後に東北軍と共に北京へ撤退する。

を訪問したのである。張学良は、鉄路局に指示して徳王一行に専用列車を用意するとともに、憲兵を派遣して徳王を武漢まで護送したのであった²⁵。

第三項 百靈廟蒙政会の成立

徳王は内モンゴルの自治独立を目指して中華民国政府や蒋介石と連絡は取ってはいたが、武器弾薬や資金の面では脆弱な援助しかもらえず、政権を維持できるような援助はもらえなかった。しかし、内モンゴルが自治独立を獲得するには中華民国による認定が必要であった。そこで、蒙政会を設立するためにウランチャブ盟百靈廟において重要な会議を開いた。

1、第一回百靈廟会議

1933年7月に開かれた第一回百靈廟会議では、シリングル盟、ウランチャブ盟、イェケジョー盟の盟旗の名義で、内蒙高度自治の承認と内蒙自治政府設立の許可を求める自治通電を中華民国中央に打電すると同時に、第二回百靈廟会議を開く通知を発することを決めた。中央政府への自治通電は徳王自身が起草したのである。徳王はモンゴル人知識青年と共に検討して、さらに「高度」の二文字を付け加え、1933年8月14日に中華民国中央政府の各関係部局宛で内蒙高度自治を求める第一回自治通電を発した²⁶。

2、第二回百靈廟会議

第二回百靈廟会議は1933年9月28日に開催される予定であったが、参加者の到着が遅れて1933年10月9日に延期された。会議の主席として雲王が選ばれ、合計5回の会議が開かれていた。参加者数は87名に達した。5回の中の第一回会議で、「内蒙各盟部旗長官自治会議組織大綱」を採択した。第二回会議（10月15日）では徳王が提案した「内蒙自治政府組織法案」を修正・採択し、即日中央に上申して受理を求める決議を採択した。第三回会議（10月19日）では、内蒙自治政府の所在地・官衙・警備隊・経費を定めた。第四回会議（10月22日）は、内蒙自治政府の人選を行い、ウランチャブ盟盟長雲王を内蒙自治政府の委員長に、シリングル盟盟長索王・イェケジョー盟盟長沙王を副委員長に推挙

²⁵ 森 1994, p. 8

²⁶ 森 2009, p. 75-76。

した。第五回会議（10月24日）では、内モン自治交渉のために中央から百霊廟に派遣される中華民国政府高官の歓迎方法について検討した。

会議期間中、徳王は南京国民政府に第二回目の自治通電を發した。同通電は、対外的危機の活路を自決・自治による蒙旗の統一に求め、蒙古存亡の危機にあつて、各盟旗が連合しなければ、蒙古の滅亡を阻止できないと述べている。そこで、「政府は国内の弱小民族を扶植して自決・自治させる」という孫文の遺訓、および訓政期²⁷の約法が定める「蒙古の地方制度は地方の状況に基づいて弁理し得る」という規定を援用して、内モン自治政府の組織と高度自治の実行を要求している²⁸。

3、百霊廟蒙政会の成立

1934年4月23日、百霊廟で蒙古地方自治政務委員会の成立式典が挙行された。会場には国民党と国民政府の旗、孫文とジンギスカンの肖像が揚げられ、孫文の遺訓の朗読後、蒙古地方自治指導長官何応欽の代理何競武が中央政府の祝辞を述べた。山西省主席閻錫山、綏遠省主席傅作義、察哈爾省主席宋哲元などは、代理人を送って祝賀の意を表明した。委員長は雲王、副委員長は索王、沙王で、式典参加者は三百名余に達した。雲王、徳王、郭王、白雲梯ら蒙政会委員12名が出席して達王²⁹、凶王³⁰、索王³¹、ヤンサン（不明）などの6名は代表を送り、残る6名は欠席した³²。

第三節 関東軍の初期の内モン工作

日本陸軍の最大の関心事は、日本の国防体制を万全にすることにあつた。ソ連と戦争が発生した場合、中国が背後を衝くという懸念があつた。1923年の「帝国国防方針」は仮想敵国を露・米・中に変更し、同時に複数の国と戦う作戦を想定している。もともと中国の軍事力を軽視していた日本陸軍には、中国がソ連に加担する前に中国を一撃するという「対支一撃論」が台頭していた。さらに満州事変前から中国の排日運動の高揚もあつて、満蒙地域の確保が日本の国防にとって不可欠だという認識があつた。そこで、関東軍の内モン工作の目的は、外蒙・ソ連方面からの赤化勢力の浸透を防止して外蒙を懐柔する根拠地

²⁷ 訓政とは軍事的統一から憲政実施に至る過渡的な段階として孫文により提示された統治形態である。

²⁸ 森 2009, p. 77-78。

²⁹ 蒙古名ダリジャヤ。アラシャ旗旗長。

³⁰ 蒙古名トブシンバヤル。オジナ旗旗長。

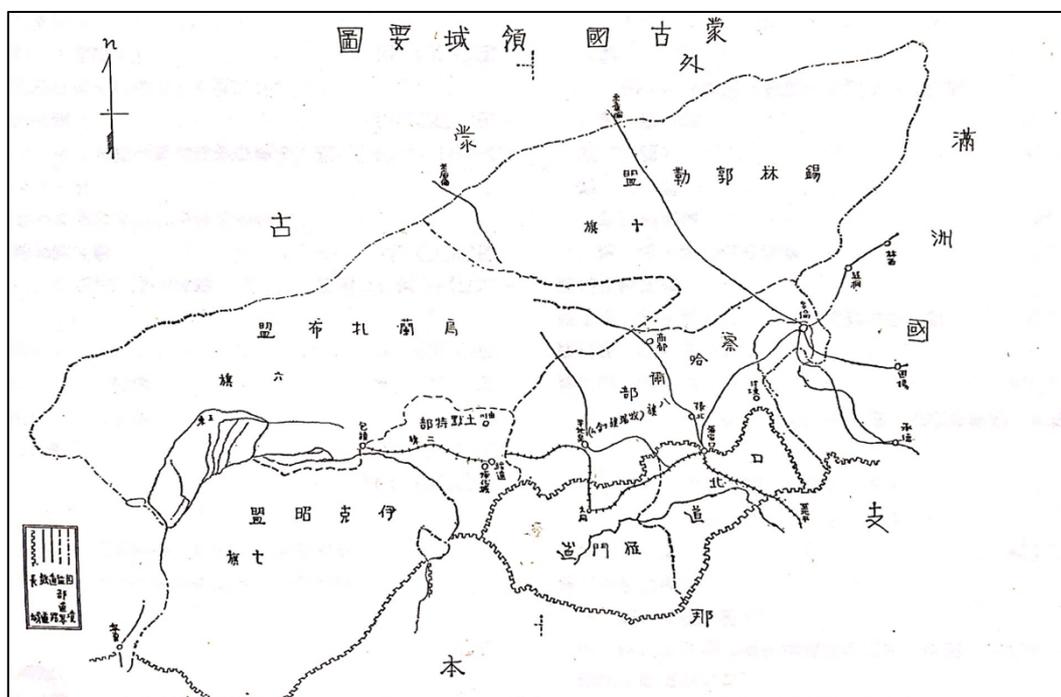
³¹ 蒙古名ソトナムラプタン。シリソグール盟盟長。西ウジュムチン旗旗長。

³² 森 2009, p. 85-86。

にし、新疆方面からのソ連の侵入も防ぐことであった。そのため、満州国樹立後、モンゴル人居住地域を「特殊行政地域」として「興安省」を設けた³³。

西部内モンゴルに関する初期の工作としては、承德特務機関長松室孝良の「蒙古国建設に関する意見」などの建国案が出されていた。初期の工作では索王を中心人物の候補としていたが、百靈廟会議で内蒙古自治独立運動を実際に指導していた徳王へと徐々に関心を強めるようになる。徳王は最初に百靈廟会議の主権に専念しており、関東軍が1933年10月にドロンまで浸透して、蒙旗長官会議を開いていたことに関心を持っていなかった。

以上に述べた以外にも笹目恒雄という蒙古浪人が徳王に接近し、郭道甫というモンゴル人知識青年の協力を得て百靈廟に潜入していた。笹目は蒙古留学生事業を通じてモンゴル人の信頼を得ていた³⁴。1935年4月、徳王の許可を得て宋浦直徳が西スニト旗特務機関を設置し、「善隣協会」の名目で活動をしていた。そして、第四章でも検討するように、徳王の部下が中華民国の憲兵隊によって殺された韓風林暗殺事件などの原因で、徳王は日本側と協力し始める。徳王は、1935年9月18日に関東軍参謀副長板垣征四郎が西ウジュムチン旗を訪問した際に「東西蒙古を合併して、蒙古の独立と建国を達成できるよう希望します」と述べた³⁵。この時から、関東軍と蒙政会の協力活動が頻繁となったのである。



地図 3 史料⑥ (現代史資料) , p. 464

³³ 佐々木, p. 27-28.

³⁴ 森 2009, p. 93.

³⁵ 森 1994, p. 105-106

小結

二十世紀初頭の内モンゴル東部全域では、フルンボイル地域やジリム盟でも入植してくる漢人農耕民に反対する大規模な反開墾闘争が起こった。これら内モンゴル東部のモンゴル人たちは、満州事変や満州国建国を契機に民族独立運動をさらに活発化させた。徳王は清末民国初期に起きた内モンゴルでの重要な事件について注意深く研究していた。そして、各盟旗が団結して統一した政治組織を持ち、統一指揮をおこなう指導者になるよう努力し始めた。徳王は内モンゴルの自治独立を目指して中華民国政府や蒋介石と連絡は取ってはいたが、武器弾薬や資金の面では脆弱な援助しかもらえず、政権を維持できるような援助はもらえなかった。しかし、内モンゴルが自治独立を獲得するには中華民国による認定が必要であった。そこで、蒙政会を設立するためにウランチャブ盟百靈廟において重要な会議を開いて「内蒙自治政府組織法案」を中央に上申して受理を求める決議を採択した。

一方、関東軍の初期の内蒙工作は徳王の「蒙政会」の支配地域を中心に満州国のように、西部内モンゴルにおいて「蒙古国」を建国する提案から始まった。当時、徳王にとっては中華民国と比べて関東軍の方が協力する価値が高かった。

第二章 蒙古軍政府成立（1936年5月）前後における蒙政会と関東軍による募兵工作

第一節 募兵工作実施前の状況

第一項 煙草谷平太郎の描く当時の国際状況

募兵工作は関東軍の内蒙工作の一環であったため、それに直接関わる日本側の要人が考えていた当時の時代背景にも当然注目すべきであろう。以下は煙草谷の回想である。

「 」, (), 句読点等の記号は史料にもとからあったものであり, [] 内のみ引用者が補ったものである。以下同様。

一、昭和十一〔1936〕年六月までに於ける内外蒙古の状況

満州国の建国に伴い「ソビエツト」は東支鉄道を放棄し西に去った形を示したが一方外蒙に勢力を潜有し之を據点として日滿に対抗することに努め既に外蒙と共同防衛の名に於て庫倫—ウランウデ（旧ウエルフネウジンスク）に新兵器装備の優勢なる赤軍を集中して居た、関東軍は満州国建国に伴い其領土を確保し且其勢力を外蒙に伸展し、要すれば之を手に入れることによって遠くシベリヤ鉄道を監視、脅威する手段として先づ内蒙古の再建を企圖したのである、此の計画は時の副参謀長板垣征四郎少将の主宰によって行はるることになった³⁶

上記の煙草谷の史料①での記述は、この募兵工作がどのような時代背景のもとで行われたかを紹介している。満州国の建国後、ソ連は東支鉄道を満州国に売却し、満州国における勢力を失った。しかしソ連は外モンゴル領内に軍隊を集結して、日本・満州国と軍事的に対立している状態であった。このようなソ連・外モンゴルと日本・満州国との対立状態は、関東軍が西部内モンゴルの軍事政権のために軍隊を募集して、内モンゴルの軍事力を日滿勢力に加えるという募兵工作の重要な要因となったと煙草谷は述べている。

関東軍の対内モンゴル政策としては、以下のようなモンゴル人を募兵して軍事を強化するという要領（方針）が含まれていた。次の史料は島田・稲葉 1964, p. 540（史料⑩）の『対蒙（西北）施策要領』（昭和十一年一月 関東軍参謀部）と島田・稲葉 1964, p. 551（史料⑩）『内蒙工作の現状に就いて』（昭和十一年四月二十八日関東軍参謀部）である。

³⁶ 春日 2004, p. 84（史料①）。

これらの史料によると、関東軍参謀部は西部内モンゴルで軍隊を強化するという政策を募兵工作の直前に計画していたことがわかる。

『対蒙（西北）施策要領』（昭和十一〔1936〕年一月 関東軍参謀部）

八、軍事指導の工作は左の諸項に拠る

(イ) 当初先づ騎兵四ヶ師の編成を整へ之が練成に努む³⁷...

『内蒙工作の現状に就いて』（昭和十一〔1936〕年四月二十八日 関東軍参謀部）...

第四、軍備充実の現状

一、内蒙施策要領に基く蒙古軍二個の充実に関しては三月中旬満洲国軍政部及当軍司令部間に於いて協議の結果四月上旬より充実に着手することになり三月下旬より募兵に着手し六月下旬迄には二ヶ軍約一万保安隊（各盟旗約二千）四個約八千（阿拉善額濟納及土默特は当分の内旗自体に於いて所要の数を充実し将来盟政革新に際し軍政府の統制下に置く予定）とする筈³⁸...

第二項 募兵工作に至るまでの煙草谷平太郎の動き

史料②の表紙に書かれている住所から推測すれば、煙草谷は、戦後、高松市の自宅から東京の防衛庁防衛研究所戦史室へ手書きのこの原稿（史料②）を送ったようである。戦史編纂官稲葉正夫³⁹は史料②の説明部分で以下のように述べている。

筆者〔煙草谷のこと〕は〔陸士〕29期生であるが、軍縮のとき現役を去り、満洲事変に浪人として渡満、爾来満洲国につくす。特に熱河作戦以来満軍の指導官として作戦および西境の治安工作の第一線で活躍、土肥原・秦徳純協定成立に功績があった。昭和十〔1935〕年八月板垣参謀副長の懇望に依り蒙古入りし、徳王工作にあたる。特に新軍編成、綏遠事件に於ける戦闘指導にあたった殆ど残存唯一の人である。この記録は当時を活寫に妙。貴重な史料である。

³⁷ 島田・稲葉 1964, p. 540 (史料⑩)。またアジア歴史資料センター C12120032100 として web 上でも閲覧可能。

³⁸ 島田・稲葉 1964, p. 551 (史料⑩)。またアジア歴史資料センター B02030154500 として web 上でも閲覧可能。。

³⁹ 稲葉正夫（1908年5月1日～1973年10月10日）は、日本の陸軍軍人、戦史研究者であった。1957年から防衛庁防衛研究所の戦史編纂官を務めた。

史料②の前半によると、煙草谷は熱河作戦の初めの段階では関東軍第六師団に従って満州国軍の張海鵬が率いる第三支隊を指揮しており、隆化、豊寧、冀東攻略戦に成功した。指揮していた第三支隊は関東軍の第六師団に協力し、日本の熱河作戦を応援する形を取っていた。煙草谷自身は現役軍人ではなく、浪人あるいは満州国軍の軍事指導の任務を持つ顧問のような存在であったという。後述するように彼は日本の一般的な軍人にありがちな単純な国粹主義思想を持ってはいなかったようで、時に他の日本人軍官などと衝突していた。第三支隊は第六師団に追従して作戦を遂行していたが、行軍の途中で輜重隊と対立し合うこともあったようである⁴⁰。

第三項 土肥原秦徳純協定との関連

土肥原秦徳純協定以前の内蒙古を少し顧みると、当時中華民国の察哈爾省には西部内モンゴルはシリンゴル盟とチャハル盟が含まれていた。蒋介石は、国民国家建設・国家統治を強める目的で1934年11月7日に徳王、雲王、索王らモンゴル人指導者と会見した時に内モンゴルでの要塞建設を提案し、関東軍を強く刺激したのであった⁴¹。満州国と察哈爾省の国境線をめぐる領土問題も関東軍と中華民国側とが軍事的対立状態になる原因であり、さらに、1935年1月15日には、察哈爾省首席宋哲元の第29軍と日本軍とが沽東、長梁、烏泥河一帯で軍事的に対峙することになった。関東軍は1933年3月に熱河省を占領してその地を満州国領内に入れていたが、次いで1935年6月27日に土肥原・秦徳純協定が結ばれた。

この協定によって関東軍による熱河方面での内蒙工作や募兵工作が順調に進むこととなる。土肥原・秦徳純協定の中には日本から中華民国側への幾つかの要請が含まれているが、その中に内モンゴルと関連する項目も入っていた。そして日本が既に占領した熱河省と、蒙疆政権の拠点となる察哈爾省とにおいて昔から存在していたモンゴル人と漢人との対立の問題の解決が図られた。特に察哈爾省において蒙政会に軍事的圧力をかけていた宋哲元の第29軍が、本協定によって察哈爾省から撤退させられることになった。その結果、察哈爾・熱河の両省において日本が中華民国に直接軍事的圧力をかける状態となり、後の募兵工作にとって支障となる勢力がなくなった。日本側は宋哲元の第29軍撤退後、関東軍による内蒙工作が合法的な活動であることを中華民国側に承認させたのである。以

⁴⁰ 史料②，第一卷，p. 8-9。

⁴¹ 内田 2013，p. 92-93。

下の史料はこの協定の一部である。ここにも漢人移民のモンゴル地域への流入を停止することによってモンゴル人の歡心をかき、軍事的協力を得ようとした日本側の方針が読み取れるであろう。

土肥原秦徳純協定に以下のような内容が定められている。

(1)日、滿の対蒙工作を承認し特務機關の活動を援助し且移民を中止蒙古人圧迫を停止するを要す⁴²。

三、日本側ノ察哈爾省内ニ於ケル正當ナル行為ヲ尊重ス

四、昌平延慶大林堡ヲ經テ長城ニ至ル線以東ノ地域及獨石口北側ヨリ長城ニ沿ヒ張家口北側ヲ經テ張北縣ニ至ル線以北ノ地域ヨリ宋哲元軍ヲ撤退セシメ撤退後ノ治安ハ保安隊ヲシテ當ラシム

五、内蒙於ける我方徳王對する工作如き阻止セサルこと⁴³

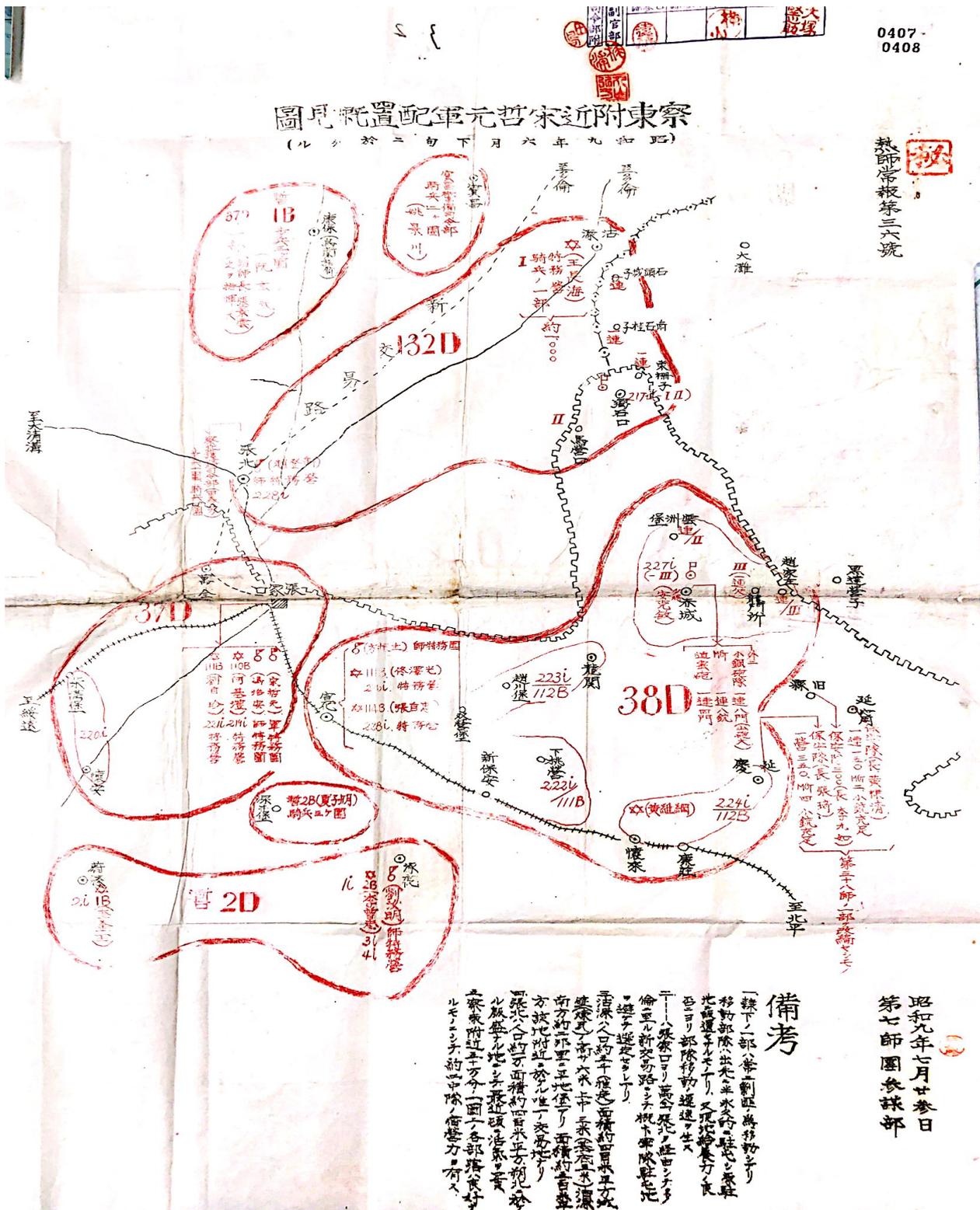
すなわち西部内蒙古を監視し、日本軍と対峙した状態であった宋哲元の第 29 軍が蒙古軍募兵ルート的重要な要衝である察哈爾省北部及び察哈爾省、熱河省の境界線から撤退することになったのである。さらに詳細に述べると、後に募兵工作のルートとなる承德から徳化の間の地域に駐屯していた宋哲元の 132 師団、38 師団が西南方面に撤退したのである（地図 4 参照）。

⁴² 小林・島田編 1964, p. 75 (史料⑩)。

⁴³ 日本外交文書昭和期Ⅱ, p. 362-363.

察東附近宋哲元軍配置概見圖

(昭和九年六月下旬)



熱河常報第三六號

昭和九年七月廿參日
第七師團參謀部

備考

一 綏下二部公署劃匪區轉移多
 移防部隊出北平水谷時駐屯察東
 北滿道子北平より又現地移防打良
 否より部隊移動速進させ
 二 八隊後より察東駐屯經由多
 倫至九新交路より概下軍隊駐屯
 地より速進せし
 三 清深入口約五千餘里面積約百餘平方
 里察東入り北平より察東入り北平
 南方約百里平地僅り面積約百餘
 方里平地約百里一交地なり
 四 察東入り約面積約百餘平方里約
 八隊後より察東入り北平より
 五 察東入り約面積約百餘平方里約
 八隊後より察東入り北平より

地図 4 『熱河常報』 三六號 (史料⑫) より

関東軍によって「察東⁴⁴警備軍」として編成された李守信の部隊が1935年冬から察東地域へ進軍し始めた。察東の6県を占領し、チャハル八旗東部も占領した。徳王は1936年1月1日に張北にて蒙政会の名義でチャハル盟公署の創設を命じた⁴⁵。土肥原秦徳純協定の締結とチャハル盟公署の創設によって、その後の募兵工作の重要なルートとなる承德から徳化までの地域に、募兵を妨害する武装勢力がなくなったのであった。つまり、この地域が完全に蒙疆政権と満州国の支配下に入ったことによって、募兵工作に有利な条件ができたのであった。

第四項 募兵工作の辞令受領

煙草谷は自分自身の経歴について史料①で「[板垣は]雲王⁴⁶を首領とする徳王一派の組織せる百靈廟の蒙政会を懐柔して我僚下にいれる工作を実施つつ、一方若くして最も勢力のある徳王と、我優秀なる浪人者と手を結ばしめ徳王を擁立して建国の工作従事せしめんとした、浪人者として選ばれたのは煙草谷一人でありました」⁴⁷というように第三者の視点で書いている。ここから、煙草谷の最初の任務が徳王を擁立して、蒙疆政権の樹立に携わることであったとわかる。

煙草谷は現役の軍人ではなかったが、上司として彼に直接命令するのは関東軍参謀副長の板垣征四郎であった。板垣と面会したことについて煙草谷は詳細に回想している。その会話の中に、最も重要なこととして内蒙工作としての募兵計画が含まれていた。以下の通りである。

〔昭和〕十〔1935〕年八月関東軍司令部に呼び出された私は板垣少将より次の如き指令を受けた…〔「貴下は今の衰滅した蒙古を昔に復活してもらふ人物として適任であると信ずる、どうかこの仕事を引受けて下さらんか」と問はれたそこで私は過分の面目と感じ、喜んでお享けする旨を答えた…板垣少将曰く、満洲建国以来外国の目が、うるさい、こともあつて蒙古工作は極秘裡にやらねばならぬ、貴下は幸、豫備役である、浪人者として徳王を援助して国を興すよう此筋道に沿ふて万事やってもらいたい、大二世沈

⁴⁴ 察東とはチャハルの東という意味である。

⁴⁵ 森1994, p. 117. 徳王の回想である。

⁴⁶ ユンタンワンチュク親王(1871—1938)。ウラーンチャブ盟盟長、ダルハン旗旗長を務めていた。1912年に北京政府によって親王と認められた。

⁴⁷ 春日2004, p. 84 (史料①)。

吉思汗〔チンギス・ハーン〕となって貴下の思ふままの仕事をしてもらいたい、其方法、手段は貴下に任する旨を強く言はれた（自分は初めて板垣さんに来て初めて其偉大さを知った、まだ日本には此程の大將軍が居らるる、君の思ふまゝの蒙古を作れ、皆てを一任する—と云ふ其度胸の程、敬服の外なしであった、）板垣さんは言葉を續けられて今蒙古兵としては李守信軍が二千いるのみだ（駐屯地は多倫）従って貴下は出来るだけ多くの兵隊を貴下の手によって募兵し自ら其長となって其兵隊を教育し、其軍を基幹として先づ察哈爾を平定し綏遠—寧夏—甘肅と逐次全蒙を包括する内蒙古を建設して頂きたい、尚貴下は豫備役であるので現役者が介入しては仕事がやりにくいと思ふので該地特務機関長（田中久）以外に將校は派遣しない。尚仕事は極秘裡に進めたいので報道陣や憲兵は入蒙させないと付け加えられた」…尚板垣副參謀長の手から私は「關東軍囑托但し無給とする」といふ辞令をもらった⁴⁸。

煙草谷が板垣征四郎の辞令を受けた時にすぐ喜んで引け受けたことから推定できるのは、彼が板垣のことを非常に尊敬していて上司としても敬意を抱いていたことである。また、徳王に協力して内モンゴルを復興させるという計画に煙草谷自身も以前から期待していて、それを担うことを一種の名誉であると感じていたと思われる。

この会話に反映されているのは、当時の日本が国際的に批判を受け、特に満州事変によって満州国を建国した後、国際的に孤立していたという事実である。そこで内蒙工作も秘密裡に行われていた。史料⑨（『秘録 板垣征四郎』）には内蒙工作について少ししか言及されていない。「内蒙政権樹立ノ目的ハ外蒙ノ勢力ノ北支進出ヲ防止セントスルニ在リ」⁴⁹というように、内モンゴルを復興させてもう一つのモンゴル（外蒙すなわち共産主義勢力）の南下を防止するためであるという目的のみが明記されている。その背後にソ連という強大な仮想敵国の存在があったからである。一方、募兵の任務を与える時の会話では同じ日本人同士である部下の煙草谷に対してモンゴルを復興させ昔のチンギス・ハーンのようなリーダーになるよう励ましている。日本人でありながらチンギス・ハーン2世となってこの任務を遂行することを板垣と煙草谷の二人が考えていたというのは不思議であるが、モンゴル人を募兵するのでモンゴルの偉大なる先祖を標榜したのであろう。

⁴⁸ 春日 2004, p. 85 (史料①)。

⁴⁹ 板垣征四郎刊行会編 1972, p. 376 史料⑨の中に収録されている田中隆吉の発言である。昆野伸幸先生（神戸大学）のご教示による。田中隆吉は1936年当時關東軍參謀長であった。

1935年9月18日、板垣征四郎、河辺虎四郎（関東軍情報課長）、田中隆吉（参謀長）がウジュムチン旗で徳王と面会し、徳王の新京訪問について打ち合わせを行った。11月、徳王は新京において関東軍司令官南次郎と面会し、漢人を含まない純粹モンゴル人部隊を編成して親衛隊として訓練してほしいという条件を出した。関東軍は徳王のこの希望を受け入れた⁵⁰。徳王が日本側と協力した理由はいくつかあり、本稿では紙幅の都合で詳しく言及できないが、関東軍自体が徳王の協力を得るための条件として純粹モンゴル人部隊の編成を徳王と会う以前から計画していたわけである。一方徳王の当面の最大の敵である綏遠省の傅作義⁵¹は圧倒的な軍事力を持っていた。徳王はそれに対抗できるモンゴル人部隊を編成する希望を最初から持っており、関東軍の援助によってその夢が叶うので、日本側と協力することにもなったのである。

第五項 煙草谷平太郎と李守信軍との関わり

煙草谷が募兵の命令を最初に受けたのは1935年8月であり、実際に募兵工作を実施したのは1936年4月から8月の間であった。この実施前8ヶ月の間に、以下のように多倫（ドロン）に駐屯して、張北、徳化を占領したことを回想している。

三、多倫駐屯（昭和十〔1935〕年九月）

多倫に於て寶貴廷中校の率する旧李守信軍二百名を私の指揮下に配属せられ、私は多倫の防城司令官に任せられた（当時の多倫特務機関長は同期の浅見喜久雄少佐で、既に私が多倫に到着前に私の宿舎を街を離れた甘珠爾耳廟の一室を改造修理して準備して居て呉れた、同期の人情に感謝した。〔〕）

四、張北占領と徳化入城（昭和十〔1935〕年十月）

田中久特務機関長の編成した寶貴廷中校を長とする二百の兵を率いて自動車輸送により先づ張北に突入、之を占領し次で宋哲元軍を駆逸して徳化に入場、宋哲元の残し去った兵舎、病院を宿舎とし謀略の根拠地とし、日系政事班の一人を擇び徳化に県政を敷くこととなった時は十月初旬であった、此より先き李守信軍を以て多倫を基地として張家口—張北を連ぬる線以東の地区に対しては爆撃機によって攻略を進めていた、我部隊の徳

⁵⁰ 板垣征四郎刊行会編1972, p. 546（史料⑨）に収録されている稲葉正夫の記述。

⁵¹ 中華民国軍人。政治家、軍閥、綏遠省省長。中華民国時代は北京政府、国民政府の山西派に属していた。

化入城をきっかけとして沽源一商都地区も蒙軍に降り張家口を除く察哈爾省全体は平定せられ、一方政事工作も之に伴って進められた⁵²。

煙草谷は、募兵工作の直前には李守信の察東警備軍というモンゴル人と漢人の混成部隊の軍事顧問を担当していた。当時の特務機関員であった浅見喜久雄が後方勤務をしていた。李守信とその部隊は関東軍内蒙工作の一環として結果的に蒙疆政権の第一軍へ組み込まれることになるので、結局、煙草谷は最初から内蒙工作に関与していた重要人物であったということができらるであろう。

第二節 募兵工作

募兵工作に関するモンゴル人の資料が見当たらない状況で徳王の自伝と煙草谷の回想録を合わせて検討することによって、徳王と日本側の協力関係の実態がわかる。「尚武の民族」という前評判に反して、モンゴル地域において募兵を実施することは実際には容易でなかった。特に西部内モンゴルの遊牧地域のモンゴル人には、近代的軍隊に服役しようとする熱意があまりなかったと言われる。それでは、煙草谷平太郎はいかなる方法で募兵工作に成功していったのか。本節ではそれについて回想史料を読み解きながら検討していきたい。

第一項 徳王による 1934 年の募兵

もともと徳王は 1934 年にも満州国領内での募兵を計画していた。韓風林暗殺事件⁵³が起きて、徳王は国民党を信頼しなくなり、日本の力を利用しようと考え始めていた。当時は土肥原・秦徳純協定が結ばれる前で、かつ李守信が察哈爾を占領する前であって、募兵工作はこれも秘密裏に行われていた。煙草谷平太郎による 1936 年の募兵工作に参加することとなる宝貴廷、烏雲飛らも 1934 年の募兵に参加していた。特にこの 2 人はモンゴル人との交流や通訳の面で 1936 年の時にかなりの程度役割を果たしたと考えられる。モンゴル人による軍事力の強化を以前から計画していた徳王は、漢人部隊が多い李守信部隊にモ

⁵² 春日 2004, p. 85 (史料①)。

⁵³ 徳王側近の韓風林が日本の特務という疑いで、国民党憲兵第三団によって 1934 年 9 月 5 日に逮捕され、殺害された事件。

ンゴル人の兵士を集めようとしていた。徳王は 1934 年の募兵について以下のように回想している

〔森（1994）による日本語訳〕

私は、宝貴廷を密かに満州国に派遣して兵隊を募集することにした。……一九三四年冬、宝貴廷は、満州国察東警備軍司令官李守信と多倫特務機関長植山宛の私の手紙を持って、ひそかに多倫に赴き、植山と李守信の協力の下で東部の各盟旗で兵隊を募集して馬を購入し、ひそかに兵士の訓練をおこなった。募集した兵士の一部で李守信管轄下に一個師団を設立し、宝貴廷を団長に任命した。のち、烏雲飛（トブゴルロ）・任殿都・雲麟・バト等を派遣して中隊長・小隊長に充てるとともに、しだいに拡充しようとして計画した⁵⁴。

このように、徳王の周辺でモンゴル人を最初に募兵していたのは徳王本人であった。日本側の植山機関長や李守信に協力させて募兵計画を実施していた。そして、宝貴廷、烏雲飛などのモンゴル人も煙草谷平太郎の募兵工作以前の段階で既に東部内モンゴルでの募兵工作の経験を持っていたのである。ただし、この 1934 年当時の募兵は小規模な募兵にすぎなかった。

第二項 募兵前の熱河省の状況

日本側によって「従来熱河ハ察哈爾綏遠ト共ニ三特別区域ノ一ニシテ蒋介石ノ北伐完成ニ伴ヒ省政ヲ布カレタルカ之カ為漢人ノ進出益々活発トナルニ及ビ蒙古人ノ受ケル壓迫愈々大至レリ」⁵⁵と報じられているように、1928 年の省設置以来、熱河省方面では漢人の進出によって日々モンゴル人が圧迫されるようになっていた。それだけに留まらず、「旗、盟及蒙旗ノ結束ニ就テ……旗ハ一独立国家ヲ意味シ旗ノ長タル王爺ハ旗ノ全権ヲ統ウ盟ハ旗ノ聯合ヲ意味シ一族ノ王爺ニヨリ形成サル……大勢ハ次第ニ蒙旗結束ノ機運ニ向ヒアルモノト云フヲ得ヘシ」⁵⁶と報じられているように、清朝時代からの旧盟旗制度の存続そのものも深い影響を受け始めていた。

⁵⁴ 森 1994, p. 97-98. 徳王の回想である。

⁵⁵ 史料⑩, p. 0062.

⁵⁶ 史料⑩, p. 0431.

このような中華民国による政策上の問題もあって、熱河省方面ではさらに漢人とモンゴル人との大きな軋轢が起きていた。特に寧城県や平泉県でその軋轢が著しく、そのうち平泉県の状態は以下のように記録されている。

平泉縣ノ大部ハ従来蒙古王領ニ屬セシカ漸次漢人ノ侵蝕ヲ受ケ現在殆ンド其ノ勢力凋落スルニ至レリ然ルニ北隣寧城県ニ於テハ喀喇沁右旗及喀喇沁中旗ヲ據点トシテ終始漢人ニ對抗シ其ノ勢力ノ發展ヲ拒守スヘク両者ノ確執甚タシキモノアリ⁵⁷……

募兵工作の直前に満州国の配下に入っていた熱河省の蒙旗の状況については、この関東軍第七師団参謀部の史料が極めて重要な参考となる。この史料⑩を見ればわかるように、清朝、中華民国、満州国と政権が交代していく中でも旧盟旗はなお自らの保安隊を作り、徴税さえもしていた。旧盟旗の行政権は満州国熱河省の内政にも影響を与えていた。

縣内ニ於ケル土默特旗ハ新タニ保安隊ヲ編成シ擅ニ地租ヲ徴集シ其他行政上越權ノ行為多ク依然縣、旗、對立ノ状況ヲ續ケアリ、之ニ關シ省長ハ蒙旗ニ關スル一切ハ當分熱河事變以前ノ原狀ニ依リテ處理スヘキ方針ノ下ニ夫々旨令ヲ發シ擅ニ權限ヲ擴張シテ紛擾ヲ來タスヲ許ササル旨通告スルト共ニ縣長ニ對シ之カ取締竝ニ宣撫ヲ命令ス⁵⁸

土默特旗が保安隊を作って徴税をしていたのに対して、省長らは熱河事変以前の中華民国時代の通りに処理しようとしていた。中華民国による省の設置以来存在していた旗と県との対立は解決されず、旗の行為を越権行為だと省長らが認識していたことがわかる。

史料⑩『熱師常報』にはハラチン旗、トゥメト旗等の例があげられているが、当時の熱河省には14の旗が存在し、これらの蒙旗に関しても概ね「立法司法ノ見ル可キモノナク依然トシテ清朝舊旗制ヲ採用シ以テ畸形的行政ヲ保守シアルニ過キス」⁵⁹と記述されている。一般のモンゴル人に関しても「一般蒙古民ハ之等旗長並王公ニ對シテハ絶對服從ヲ守リ毫モ反抗スルコトナシ」⁶⁰と記述されている。熱河省14旗の蒙旗の状況として参考になるであろう。

⁵⁷ 史料⑩, p. 0061.

⁵⁸ 史料⑩, p. 0282.

⁵⁹ 史料⑩, p. 0089.

⁶⁰ 史料⑩, p. 0089.

保安隊に関しては、さらに以下のように記述されている。

（県公署からの布告）擴大セル保安隊及準備中ノモノハ即時解散シテ各々其郷里ニ帰還セシメ各處ニ分駐シテ政治ノ進行ヲ妨害スルヲ許サス……以上ハ省公署ヨリノ指令ニ基キ布告スルモノニシテ公布ノ當日ヨリ一切ノ政務ハ縣公署ノ處理ニ属スヘク旗公署ノ干渉ヲ許サス⁶¹

蒙旗の保安隊は省公署の支持を得ることができず、強い反対を受けていた。旧盟旗のもとで軍事力を集めることが難しくなっていたのである。募兵工作直前の熱河省の蒙旗では中華民国や満州国の配下に入ってから清朝以来の盟旗制度によって行政を行なっていたため、県と旗が対立し、役所が重複する二重行政となっていた。そして旗の保安隊は省の承認を得ることが難しかったため、各旗のモンゴル人武装勢力の行き場がない状態であった。これも熱河省から多くのモンゴル人が募兵に応募したことの原因の一つであったかもしれない。

第三項 募兵の困難さと募兵方法

煙草谷は1936年の時の募兵の方法について、以下のように書き記している。

五、募兵工作（昭和十一〔1936〕年四月より八月までの間）

蒙古民族は元來牧畜種屬であつて、兵隊になることは死よりも嫌いな種族である、従つて此等を徵募することは難事中之難事である、従つて最も巧な宣撫工作と方法を考へなければならぬ、で私は先づ王族、豪族を口解き次で人民を理解せしめて建国の夢を喜ばせなければならぬと考へ優良なる人物を撰んで之を各地に派遣し自らも先頭に立つて人民を口解くことにした⁶²、…

…幸い⁶³蒙古人の間には、昔から軍人になることを恐れる習慣があり、募兵は至極困難であつた。すると承德特務機関の松井源之助中佐は僕をひやかし「煙草谷、一体幾人集める気か」と問われる。「まず2000人」と答えると、「僕でさえ、多額の金を使って、3

⁶¹ 史料①, p. 0414.

⁶² 春日 2004, p. 86 (史料①)。

⁶³ 煙草谷の書き誤りかもしれない。

年かかって、やっと、ただ 100 人集めたただけだ。君がもし 1 年間で 100 人募兵したら、奉天で一杯おごってやる」という⁶⁴。…

もう一人の機関長であった太木機関長は「300 名以上は絶対集まらない」と予言していた⁶⁵。

以上のような煙草谷周辺の日本人たちの所感は、募兵工作に対してネガティブなものであった。中華民国時代には東部内モンゴルも軍閥の内戦に巻き込まれ、そもそもモンゴル人の政権自体が存在しなかった。すなわち、当時の募兵は常に他民族のために戦う兵士になることを意味したために、軍人になることを嫌う傾向があったのではないだろうか。また、清代に平和が長く続いたことも関係するかも知れない。いずれにしても松井源之助中佐は、資金があつたにもかかわらず 3 年間でモンゴル人兵士を 100 人しか集められなかったというのである。

その一方で、当時の東部内モンゴルにおいては、モンゴル人兵士を有する勢力といえは、満州国興安省のモンゴル人軍隊や関東軍によって改編された李守信の漢人部隊に混じる少数のモンゴル人部隊などが存在していた。農地化の進んだ東部内モンゴルの方が遊牧中心に西部内モンゴルよりも、もともとモンゴル人兵士の数が多かったことは特に注目すべきであろう。これには入植漢人との民族対立・民族紛争から来るナショナリズムの問題が関係しているかもしれない。募兵対象地域が東部内モンゴルに設定される傾向が強かったことも、この問題と直接かかわっているはずである。

しかし、回想によると、当時煙草屋らがモンゴル人を募兵することは東部内モンゴルでも通常の方法では困難であつたらしい。煙草谷は資金もないため、他に良い方法を考え出す必要があつた。煙草谷の思い付いた独特の方法については、回想録に以下のように記述されている。

対蒙人共の口解き方の一例

私は一部落の民衆集合の前に立って叫んだ、「〔〕諸君はまさか沈吉思汗〔チンギス・ハーン〕を忘れやしまいね」又「〔〕其当時の蒙古人即ち諸君の先祖がいかにして国を護り、いかにして世界に誇るべき武力を輝やかしたか、の氣憶はあるだろうね」と聞いて

⁶⁴ 春日 2004, p. 3-4 (史料①後半部)。

⁶⁵ 春日 2004, p. 87 (史料①)。

みた。すると民衆はどよめき、「[] おー、沈吉思汗は我々の先祖であり大偉人であった」と、「[] うん然るに今の諸君はどうであるか、切角諸君の大先祖が造って呉れた蒙古は今や漢人種のために其土地は奪われ、家畜は取られ、住む家さえも持たぬ人々の多きことを、今や最も良き例として満州国が出来たではないか、満州国は満州人の手によって造られたのだ、満州国にならって蒙古人も今を機会に蒙古を昔の強い蒙古にしようではないか。それには兵隊が必要だ、私は関東軍の指令によって諸君の後援に来たのだ、蒙古は蒙古人の手によって復興すべきである」と叫んだ、大衆の間に「沈吉思汗の再現だ万歳」と叫ぶものあり

そこで私は語調を更めて、国を作る基礎は兵士だ、十八歳以上四十歳以下の男子は皆兵隊になって呉れぬかと誘った、其時四十歳ぐらいの男が出て、此子供二人とも一しょう⁶⁶に兵隊にして呉れるならば三人そろって兵隊になると申出た。(二人の子供は十五才と十三才とであった)

私は其申出を見て嬉しくて泣けた。民衆も興奮してはやしたてた彼等三人を其場で兵士の中に加えた。山を越え、谷を渡り、自動車の後押しをくりかえしながら晝夜兼更、食糧にもあぶれながら末梢の地まで駆け廻った⁶⁷。

板垣が煙草谷を呼び出した時に「貴下は今の衰滅した蒙古を昔に復活してもらふ人物として適任である」と説得したように、煙草谷はモンゴル人の民衆に対して明らかにモンゴル民族のナショナリズムを煽ることを重視したのである。上記の史料に見えるように、主に以下のような三つのステップで軍隊に誘ったことがわかる。

まずチンギス・ハーンという偉大な先祖をほめたたえ、そしてその時代のモンゴル帝国がいかに偉大であったかという点をアピールする。次に、内モンゴル人の現状としては漢人によって土地を奪われ、自らの国を持たない苦境に墜ちていることを語る。そして最終的に、関東軍の援助によって満州人は満州国を建国して成功したという事例を挙げ、これに習ってモンゴル人も軍隊に入って自分たちの国を成立させるべきだということを主張した。煙草屋のこの方法はすぐに役立ち、その場で兵隊に応募するモンゴル人が現れていたことがわかる。もちろん、満州人が満州国を建国して成功したなどというのは、日本側か

⁶⁶ 「一しょ」の書き誤りと思われる。

⁶⁷ 春日 2004, p. 86 (史料①)。

らみた詭弁に近い単なる言い訳であるが、少なくとも当時の内モンゴルの人々がおかれていた状況に関しては十分な説得力を有していたと思われる。

第四項 募兵の経過

1. 各地からの報告と徳王等モンゴル人の関与

最初の頃の募兵班と各地からの報告について、煙草谷は以下のように回想している。

六、募兵の経過

隊長の實貴廷中校を少将に昇進せしめ、満州国日系軍官である佐藤、岡、両中尉と服部教官と私の蒙古人養子である二少年（玉藻少年十六才、屋島少年十五才）及衛隊十数名を以て募兵司令部を組織し、熱河特務機関に本部を置き、北は南興安省から南は熱河のはてまで募兵班を派遣した、五月中は募兵に関する報なし六月初旬も空しく過ぎた私は熱河承德特務機関長太木中佐の予言（蒙軍の募兵は不可熊⁶⁸也）想い浮かべて、たまらなく悲痛を感じたが、何糞もう暫くの辛棒だ。と自己の心に鞭打ちながら、應募兵の報を俟った、〔1936年〕六月十三日夕刻に至り初めて承徳の東南方に在る青龍縣から十六名の兵員を獲得したことを知らせて来た恰も雨乞中の最初の一滴を得たことに雀躍した。其夜軍神を祭る関帝廟に参拝して御礼を申上げた其夜は憂樂、心を往来して眠れなかった翌早朝起きて、承徳の川に沿って散歩してみた、朝食もそこそこにすまして、一ぷくする、本日は天氣晴朗の朝だ、何か良い象がなかろうかと又一ぷくしている折も折である、募兵班からの連絡員が私を訪れた。阜新県の依紹先⁶⁹からの報告である、保証人付きの三三九名募兵したとある。私は三三九名とは三三九度の盃に通ずる縁起の良い数だ、遅まきながら太木機関長の言った、三百名以上は絶対集まらぬといふ予言を覆した、僕の勝利だ⁷⁰

⁶⁸ 「不可能」を煙草谷が書き誤ったものと思われる。

⁶⁹ 後に第7師長となる人物。詳しくは後述する。

⁷⁰ 春日 2004, p. 87 (史料①)。



内蒙古兵募兵司令部（於平泉・向って右より佐藤中尉，煙草谷司令，寶貴廷少將）

写真 3 募兵司令部、前列右より佐藤中尉、煙草谷平太郎、寶貴廷。他の 4 名は不明であるが、徳王側の人物かもしれない。春日 2004, p. 49 (史料①)

この回想で記述されているように、募兵の司令部に日本側からは煙草谷、佐藤中尉、岡中尉、服部教官などの軍人が参加していた。煙草谷は募兵司令部の総司令となる。また後に第七師師長となる依紹先が阜新県あたりの募兵を担当したことがわかる。募兵に協力したモンゴル人について徳王は以下のように回想している。

为蒙古军总司令部成立后，首要的工作是招募士兵・扩编军队，除派宝贵廷，乌云飞赴卓，昭两盟继续找兵外，并派包悦卿赴哲盟招兵⁷¹。

[森（1994）による日本語訳]

蒙古軍総司令部の設立後、兵士の募集と軍隊の拡大がその主な仕事となり、宝貴廷と烏雲飛をジョソト・ジョウウダ両盟へ派遣して兵士の募集をおこなったほか、包悦卿をジルム盟に派遣して兵士を募集した⁷²。

徳王のこの回想によると、募兵に関わったモンゴル側の人物として宝貴廷、烏雲飛、包悦卿が入っていた。徳王は煙草谷の募兵工作に協力させるためにこの 3 人を派遣したのである。そしてこの 3 人も募兵工作に大きな役割を果たした。史料①に掲載された募兵司令部の写真で宝貴廷が確認できることからそれがわかる。すなわち、募兵工作は日本側と徳王側の協力によって行われていたのである。

煙草谷の回想で示された募兵の範囲である「南興安省から熱河省のはてまでの地域」とは、すなわち、興安南省、興安西省、熱河省、錦州省辺りで、徳王の回想にも出てくるよ

⁷¹ 『徳穆楚克棟魯普自述』第 6 輯:153 (史料④)。

⁷² 森 1994, p. 127。徳王の回想である。

うに、旧モンゴル盟旗でいうジリム盟の西部、ジョーウダ盟、ジョスト盟を含めた地域である。承徳の青龍県とは熱河省東南部（現在は遼寧省の満州族自治州。少数のモンゴル人も居住している）で、阜新は旧ジョスト盟トゥメト左旗の地域である。

2. 活仏の還俗と師長任命

煙草谷は、チベット仏教の活仏を利用して募兵工作を行なったことについても、以下のように記録している。

七、活仏の還俗と師長任命

募兵の条件としては四十名集めた者は排長（小隊長）百名は連長（中隊長）三百名は團長（連隊長）に千名集むれば師長（師團長）に任命することに定めておいた、熱河省の土黙特左旗で活仏だった阜新の王（旗長とも稱す）沁王爺の兄で年は四十三歳だった、此活仏に会った時私は次の如く説得した即ち、「〔〕活仏として佛に仕え人を救ふのは法の道であり、長い間しいたげられた今の蒙古人民を昔の形に復活せしめて安樂の道と與えて、やるのも法の道である。ただ前者は靜であり後者は動である、秋⁷³によって此両者を巧みに使い分けるのが聖者であるのでなかろうか、幸、貴下には今こそ後者を撰ぶ機が到来したと私は考える」と説教すれば、流石は伶俐な活佛は膝を叩いて あゝ、そうだ私は佛門を去り兵を募って従軍することを契った⁷⁴。

ここでは煙草谷が阜新のトゥメト左旗旗長（煙草谷の誤り。実は右翼旗）の兄である活仏（後に第六師の師長になる宝恩普）を説得したことを記している。史料①の回想にその写真もある。宝恩普は自ら従軍することを決心しただけでなく、自らも募兵に協力したというのである。すなわち第六師の兵士を募って、第六師師長となったのである。旗長の兄であり、かつ活仏だったので、ある程度以上の人望があったはずであ

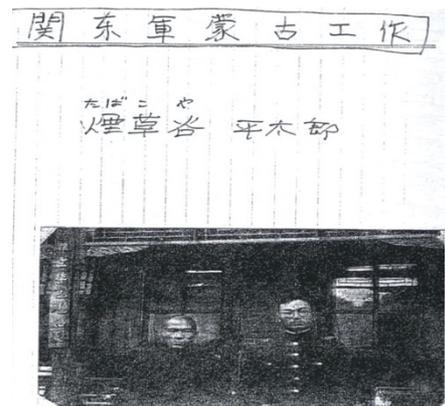


写真 4 煙草谷平太郎と活仏 右が煙草谷 春日 2004, p. 83 (史料①) より

⁷³ 煙草谷の何らかの書き誤りかもしれない。

⁷⁴ 春日 2004, pp. 87-88 (史料①)。

る。これも煙草谷の募兵工作のもう一つの手段であったことがわかる。説得する際にはやはり民族のナショナリズムに訴えている。

前述した煙草谷の発言にある「蒙古は今や漢人種のために其土地は奪われ、家畜は取られ、住む家さえも持たぬ」という状態は、清末から多くの漢人農民が内モンゴル東部・南部の「解放蒙地」へ入植し、モンゴル人の生活を脅かしつつある当時の現実そのものであった⁷⁵。

第五項 部隊の集結と輸送問題

1. 部隊の集結

煙草谷は、新たに募兵された部隊をまず平泉（現在の河北省承德市平泉県）に一時的に集結させて、そこから蒙古軍政府の首都徳化へと移動させることを考えた。5000人に達してからは関東軍が奉天に設置した被服廠から軍服を調達して新兵に着せた。募兵工作は秘密裏に行われていたが、いきなり大勢の兵隊が漢人、モンゴル人、満洲人の雑居地である承德市に溢れることにならざるを得ない。日本の行動は国際的に批判を受けていたが、史料①の煙草谷の回想からは承德の市民には歓迎されていたことがわかる。

部隊に詳しい李守信の回想によると、集まった兵士たちは蒙古軍の第四師、第五師、第六師（実際には第四～九師）に編成されたというが、彼らの中には元来、李守信の以前の部下であった人々や、李守信を頼って身を寄せてきた人々が多かった。その大部分がジョスト盟トゥメト左右両旗出身のモンゴル人であった⁷⁶。蒙古軍政府が成立した際には李守信の部隊である察東警備軍を蒙古軍の第一師、第二師、第三師として編成した。この部隊のほとんどが漢人兵士であったため「漢師」とも呼ばれていた。これに続いてモンゴル人ばかりの第四～九師が編成されたのである。

李守信は募兵された新兵について以下のように回想している。

他们大多是土默特左右两旗的蒙古“小队”……还有“毅君”的少数旧部，……他们听到我在察北由“察东警备军”司令官而组织起“蒙古军”，认为跟上我能有出路，所以宝贵廷不到两个月便把六千人给带来了⁷⁷。

⁷⁵ 江夏（2005:60）参照。

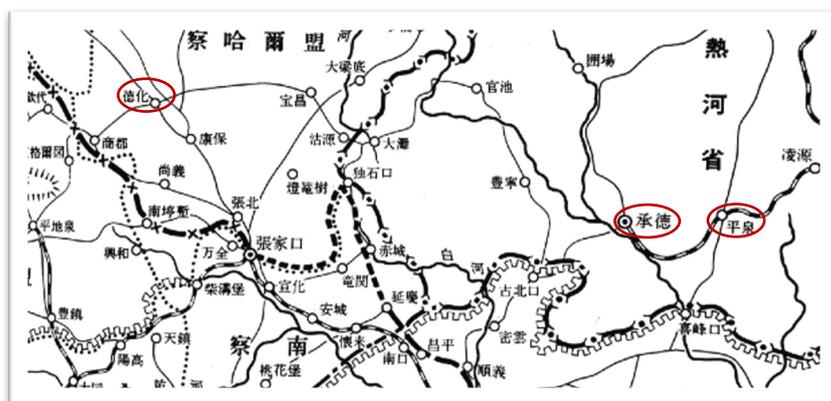
⁷⁶ 『李守信自述』（史料④），p. 238。

⁷⁷ 『李守信自述』（史料④），p. 238。

[引用者による日本語訳]

彼らの大部分はトゥメト左右両旗のモンゴル「小隊」であり……また「毅軍」⁷⁸の少数の旧部もあり、……彼らは私が張北で「察東警備軍」司令官となって「蒙古軍」を組織したという噂を聞き、私についていけば道が開けると思っていた。だから宝貴廷は二ヶ月も経たないうちに六千人もの人を連れてきたのである。

西部内モンゴルに比して、東南部のジョスト盟（トゥメト両旗等）やその周辺地域からたくさん兵が集まったのは歴史上の原因も考えられる。例えば 1891 年冬に白蓮教に属する仏教教団、金丹道の漢人農民が地主層であるモンゴル人に対して反乱を起こし、内モンゴル東部のジョスト盟やジョーウダ盟の各地で大量虐殺を働いた。殺害されたモンゴル人の数は数万、数十万に達するとの説がある。また、これにともなって故郷を失った数万人のモンゴル人たちがさらに北へと移っていった⁷⁹。この事件を典型例とする入植漢人による土地の略奪に危機感を感じたこの地域のモンゴル人の中で漢人に対する抵抗が激しくなっていたのである。例えば 1912 年 8 月 28 日に蜂起したジョスト盟トゥメト左旗出身のバボージャブの対中華民国の抵抗運動、ハラチン旗で起きた漢人移入者とモンゴル人との間の武力闘争及びモンゴル側の指導者であったジョスト盟ハラチン右旗出身のハイサン等の動き等々があげられる⁸⁰。こういった入植漢人農民による強い圧迫を受けた地域のモンゴル人が煙草谷の募兵工作に熱心に応募したものと考えられる。ただしこの因果関係を実証することはさほど容易ではないため、ここでは将来の課題として残しておきたい。



地図 5 ○ は平泉—承德—徳化を示す

2. 輸送問題

当時の煙草谷にとってその次に重要なことは、集まった新兵をいかにして承德から蒙古軍政府の首都徳化まで運ぶかとい

⁷⁸ 毅軍とは 1912 年、北洋政府の臨時大総統袁世凱が熱河の地方軍隊をまとめて作った軍隊のことである。

⁷⁹ プレンサイン 2003, pp. 188-190 参照。

⁸⁰ 中見 1976, p. 127 参照。

う問題であった。そのルートは募集地平泉から集結地承德へ、そして徳化へ（地図5参照）という順番になる。平泉—承德の間が87km、承德から徳化の間はなんと420kmもの距離があった。徒歩だと1ヶ月もかかる長い行軍になるので、大量の物質補給が必要となる。関東軍参謀部の田中隆吉が日本の管理する満鉄などの機関で若干の資金を得たようであるが、大部分の資金は煙草谷自身が満州国軍第五軍管区司令官の張海鵬将軍との個人的関係を使って解決した。後述する煙草谷の回想にあるように、煙草谷と張海鵬は熱河作戦のとき一緒に戦っていた仲間同士であった。熱河省長でもあった張海鵬は熱河省の各県において県の商会から部隊に物資を無償給付するよう布告したのである。これによって、兵隊の徳化までの行軍途中での補給問題が解決した。募兵した兵士の数について煙草谷は、承德の町に一万人が溢れていると記述している。また、全ての部隊を17梯団に分けて1梯団あたり600人を徳化へ出発させたということから推定すると、募兵工作全体で10200人程度は集めることができたと考えられる。行軍途中でアヘン常習者150名が死亡したという数を除いても10000人ぐらいは集まった。

移送の問題について煙草谷は以下のように記述している。下線は引用者が引いたものである。

八、集まったりな⁸¹一万の蒙古兵熱河承德の町に溢れる

七月の初に至って六百名也、五百名也、千二百名也各地から報告が届く現地では、もはや収容し切れなくなったので平泉に中間集結地を作り、先づ茲で勢揃をしてから承德に輸送することとした、應募人員既に五千を超えた頃私は奉天に飛んで同地の被服廠から軍服五千着を調達し平泉に送り届けて之を支給した、元来蒙古人は山羊や豚と同居して居て穢れ着物に身を包み顔も手も足も垢の鱗が出来ている、所が入浴させてタワシで磨いてみると皮膚は滑らかで白くて之にカーキ色の軍服を着せると少年倶楽部の口繪のように可愛い、兵隊さんになる、承德の住民などは初めは彼等を穢い乞食の集まりだとののしっていたが、新しい着装によって装備された後は、ああ可愛い蒙古の兵隊さんだ若い坊ちゃん兵隊だと家へ連れ帰って、お菓子を與える、カフェーの女給さんも藝妓さんも店に招じてビールの振舞をして呉れるようになった。

⁸¹ 煙草谷の書き誤りかもしれない。

関東軍が主宰する蒙古建設だったが軍資金には常に事欠いた⁸²田中隆吉参謀が満鉄や所々を駆けずり廻って若干の資金は得られたようだったが、今後承德—徳化間の輸送を思ふと、ぞっとした、何か金のかからぬ方法はないかを熟考のあげく、熱河省長であり、第五軍管区司令官の張海鵬將軍に会って輸送のことなど聴問することにした。張海鵬も緑林出身⁸³である無銭旅行位はよく知って居ることでもある。我々蒙古軍は唯今巢立ちしたばかりだ、餌を與えなければ餓死してしまふ、これから徒歩行軍三十日行程の広漠地帯での給與する方法を教えて頂けんかといふ交渉であり、懇請でもあった。將軍は熱河作戦満州國部隊の司令であり当時私は第三支隊の指導官として四千八百騎を連れて張海鵬の麾下にあつて共に苦勞した仲であり俱に肝膽相照す仲でもあった、彼は夜間は讀経するのが常で讀経の間は誰にも面会しなかつたが、私だけには常に会つて呉れた。彼は日本人の満州國軍指導方法に就いても赤裸々な意見を私だけには漏していた一人である、彼は私が蒙古に這つたことを非常に喜んで呉れて居た一人でもあった。

彼は省長の布告として、蒙古軍行軍沿線の各県に対し、県商務会に於て無償給與を擔任せしめた、お陰で一万の兵力の輸送間は資金は不應であつた。省長も元はといえば緑林出身であるが、成功するに従つて信仰の道に入り今は世界紅文字会⁸⁴の会長でもあり慈悲心も深く私を親友として此の方法を採つて呉れた多謝多謝である。輸送は六百名を一單位とし一梯團に教官を一名入れて梯團長として輸送に任じた、行軍は皆て徒歩で行軍日程は天候の差もあつたが早いもの二十三日間、遅いもので三十日を要した、應募兵中、阿片常習者は殆ど死亡した其數百五十六名に達した。毎日一梯團を出発せしめ皆て十七梯團を輸送した、もとより教官の数が少いので教官は徳化から北京經由で帰り帰つては次の梯團を送るといふ目まぐるしい活躍をされた⁸⁵

第三節 募兵の成果

第一項 新たな蒙古軍の編成

募兵工作で集まつた全ての兵士1万人を六個師團に編成し、蒙古軍は一気に合計九個師團にまで拡大することができた。これによつて蒙古軍政府はその最大の敵綏遠省の傳作義軍に何とか対抗できるような軍事力を持つようになったと思われる。

⁸² 「た」の書き誤りかもしれない。

⁸³ 緑林とは、中国古代王莽の新代における民間武装勢力のこと。後世には盜賊や山賊と同義の語として用いられた。

⁸⁴ 紅卍字会の書き誤りかもしれない。

⁸⁵ 春日 2004, pp. 88-89 (史料①)。

募兵された新兵は蒙古軍の第二軍（第四師～第九師）として編成された，後に徳王自らが第二軍の軍長になるが，煙草谷平太郎が集まったばかりの軍隊の最初の軍長となった。第一軍に漢人部隊が多数いたのに対して，第二軍はほとんどモンゴル人ばかりであった。下記の一覧表は煙草谷の作成した名簿である。

第二軍の編成表

第二軍長 中将 煙草谷平太郎

第四師長少将 寶貴廷

第五師長少将 包悦郷

第六師長全 寶恩普（四活佛）

第七師長全 依紹先

第八師長全 梨副師長

第九師長全 穆總監

各師團司令部には教官（中校）を配屬指導せしむ⁸⁶

上記の師長の内，寶貴廷（モンゴル名ウネンバヤル）はジョスト盟トゥメト右旗出身の軍人で，蒙政会保安隊隊長であった。李守信の遠い親戚である。包悦郷（モンゴル名サインバヤル）はジリム盟ホルチン右翼前旗出身。蒙政会委員で，後に蒙疆銀行総裁となる，1937年ドロンで病死した。寶恩普はトゥメト左旗旗長の兄で，前述したもと活仏。依紹先は別名依恒額（イヘンゲー）。トゥメト左旗出身で，李守信と義兄弟であった。日本の敗戦後李守信の人民自衛隊で支隊長となる。梨副師長のモンゴル名は扎青扎布（ジャーチンジャブ）。トゥメト左旗の扎蘭章京の息子で，李守信の義兄弟であった。八師のみ副師長名が書かれている理由は不明。穆（ムグデンポー）總監がなぜ「総監」と呼ばれていたのかについては，煙草谷はよく知らなかったようである。

以上の師長に関しては，煙草谷が名前を取り間違えた可能性もある。穆克登宝師長の息子（哈日怒德苏德那木达尔扎）の回想によると第四師から第九師の師長はそれぞれ、第四師師長寶貴廷、第五師師長依恒額（依紹光）、第六師師長寶彦図、第七師師長穆克登宝、第八師師長包悦卿、第九師師長包海明であったと言う⁸⁷。穆克登宝（ムグデンポー）はも

⁸⁶ 春日 2004, p. 91 (史料①)。

⁸⁷ 『内蒙古文史史料』51輯（史料④），p. 87。

ともとチャハル鑲黃旗総管であったため、チャハル 12 旗の地理的範囲内で第七師のモンゴル人を徴兵したとも述べている⁸⁸。「総監」ではなく、もと総管であったためにそう呼ばれていたようである。

第六師師長寶恩普は、宝彦図が正しいという説もあるが、さらに宝彦烏力吉という説もある。ジョスト盟トゥメト右旗の棍布札布（棍王）の四男で、幼少年から活佛と称されていたため「四佛爺」とも呼ばれていたらしい⁸⁹。

募兵が行われる前は、1936 年 5 月 12 日に成立した蒙古軍政府の蒙古軍の主な構成員としては、徳王の率いる蒙政会保安隊と李守信の率いる察東警備軍のみであった。そのうち、李守信の察東警備軍は三個師団の兵力を持ちながらも、漢人部隊がほとんどであった、後に漢師とも呼ばれることになる。この李守信の部隊が蒙古軍の第一軍として編成された。蒙政会の保安隊は徳王自身によって統率される武装組織である「烏滂守備隊」である。徳王は滂江から外モンゴル国境までの交通の安全をはかるためにこの部隊を擁していた。守備隊の兵士たちはほぼ全員スニト右旗をはじめとするシリングル盟出身のモンゴル人で、徳王を支える武力となった。ただし部隊の数は数百人ほどであった⁹⁰。すなわち、蒙古軍政府が成立した時には李守信の部隊以外にほとんど兵力を持たなかったに等しい。しかも李の部隊は漢人が多数いて、蒙古軍政府という概念から大きく乖離していた。募兵工作以前の蒙古軍の兵力は以上のようなものであって、政権を維持するためにもさらなる兵力が必要であった。募兵工作によって集まった兵士を蒙古軍の主力部隊第二軍の第四師～第九師に編成することで蒙古軍の兵力が一気に倍増し、政権を維持するための軍隊が初めて形成されたのである。

第二項 蒙古軍の閲兵式

募兵完成の象徴として 1936 年 8 月に壮大な閲兵式が行われた。煙草谷の以下の回想にあるように、蒙古軍政府の首席徳王と関東軍の板垣征四郎が第二軍の新兵を閲兵した。

九、徳化原頭板垣副参謀長の閲兵式

⁸⁸ 『内蒙古文史史料』51 輯（史料④），pp. 75-107。

⁸⁹ 史料⑤, p. 17。ジャクチド・スチンのこの回想（史料⑤）では宝彦烏力吉と記述されている。しかし、煙草谷の回想では寶恩普と記述され、史料④の穆克登宝師長の息子の回想では宝彦図と記述されている。

⁹⁰ 森 1994, p. 54。徳王の自伝に基づく。

劉曉たる喇叭の音は平地に連る徳化大草原を逢って⁹¹は遠く地平線上に棚曳く薄雲の中に溶け込んで行く、私の指揮する一万の軍勢は既に整列を終り国旗は林の如く草原に翻っている、部隊は閲兵検閲官、坂垣少将の到着を待つのみとなっていた、暫くすると合圖の狼火は擧げられた、検閲官を乗せた自動車は閲兵場に到着し、閲兵官に対する敬禮三十六挺の喇叭、「海ゆかば」三回吹奏の間は実に壯嚴といふか、寂として、身のあることを忘れた感に打たれた。「三十六挺の喇叭は私が奉天から買って来た、日本軍用喇叭で募兵間承德駐屯中の私の同期の石川栄次郎中隊長に願って教育してもらったものである。其他毎日数十名の蒙兵の訓練をお願いして優秀な兵は上等兵の階級までもいただいた」閲兵官は編列を検閲する、部隊は分列隊形に移行する、分列行進開始一踏歩の地響は眠れる蒙古をゆり起すが如く、一万の軍勢で、蹴りひしがれた生草は鼻つく程の香を発散する其香りは、草原をかすめて通る柔い風に溶け込んで行く味はいは現地の住民のみが満喫し得る清浄さでもあろう、草で生き、草と埋もれて行く蒙古人にとって草は生命であり神でもあろう、此初めて産れた軍勢こそが七百年この方眠って来た蒙古を復活せしむる原動力であり、蒙古救済の軍神でもある斯くして建國の第一歩は茲に印されたのである⁹²

新編蒙古軍の閲兵、編成が終了した後、坂垣征四郎、徳王、李守信、田中隆吉参謀、田中久機関長、煙草谷平太郎の計6人が徳化の徳王王府に集まって会議をした時、坂垣征四郎は以下のように煙草谷の募兵工作の成果を高く評価したという。

坂垣少将は立上がると忝々しくと云ってもよい態度で僕の手を握られた、坂垣さんの掌は熱く而も痙攣を感じさせられた。私は少将の顔を仰いだ。彼は眼に一ぱい涙さえ浮べておらるるではないか、僕は緊張した手を固く握ったまゝ彼は「どうも有難煙草谷君。どくしき⁹³金費もやらず手傳いも出来なかったのに、短日時の間に斯くも大軍を作って頂いたことは坂垣は終世忘れん、関東軍司令官に代って深く感謝する、誠に御苦勞さまでした。今後は貴下の思ふまゝに兵を訓練して大蒙古を作って下さい「私は貴下を

⁹¹ 「縫って」の書き誤りかもしれない。

⁹² 春日 2004, pp. 89-90 (史料①)。

⁹³ 「ろくしき」の書き誤りかもしれない。

沈吉思汗二世と仰ぎ募兵の神様として尊敬します」と私を賛えて下さった。語る人も聞かされる私も只感激無量といふ光景だった⁹⁴

徳王も、蒙古軍政府にモンゴル人部隊ができた事を非常に喜んでいて。そして特に募兵工作に貢献した煙草谷に感激していた。煙草谷の回想によると、徳王は1936年9月13日の建国宣言の時にも以下のようにまず煙草谷及び彼の募兵工作の成果に対して感謝の意を表した。

徳王の建国宣言

「本日茲に沈吉思汗紀元七百三十一年⁹⁵を迎え、新に内蒙古の建国を宣言する（爾余は除く）此日出度い日を迎え得たことは関東軍の援助の賜であり又直接之に參與され御奮闘下さった煙草谷先生始め日系教官各位に對して深く感謝するものであり且つ此事は蒙古人民として永久に忘れてはならぬものである」⁹⁶

徳王の回想録にも、募兵の成果に対して非常に喜んだという閱兵式の時のことが書かれている。

我検閲部隊后，賞給士兵每人銀元一元，以資鼓勵。并專派兵打来黄羊多只，就地野餐表示慰勞。參加閱兵典禮后……回想这是平日本的力量，居然能够握有两军人吗，万余骑兵，如在扩而充之，虽然不敢妄想成吉思汗伟业，也妄想把“蒙古民族复兴起来”踞于国际强盛民族的行列，我自己也作一个“民族英雄”。幻想及此，真是自鸣得意，喜形于色，有些飘飘然了⁹⁷。

[森 1994 による日本語訳]

部隊の閱兵後、私は兵士を鼓舞するため、兵士一人当たり銀貨一元を与えた。またあらかじめ兵隊に多数の黄羊を捕獲させておき、その場で食事をしてみなをねぎらった。閱兵式に出席してのち……今や日本の力を借りて、既に二個軍、一万余騎兵を擁

⁹⁴ 春日 2004, p. 90 (史料①)。

⁹⁵ 沈（成）吉思汗紀元とはチンギス・ハーンの即位した1206年を元年とする紀元である。モンゴル人のナショナリズムに訴えかけるべく蒙疆政権下で使用された。沈吉思汗紀元七三十一年は、1936年のことである。

⁹⁶ 春日 2004, p. 90 (史料①)。

⁹⁷ 『德穆楚克棟魯普自述』(史料④) 第6輯, pp. 162-163。

しており、それを拡充していけば、ジンギスカンの偉業の回復とまではいかなくても、「蒙古民族を復興」させ、国際的に強大な民族になって、私自身も「民族英雄」になれると妄想した。このように空想すると、本当にいい気になって、喜色が顔に表われ、幾分一人よがりになっていた⁹⁸。

徳王のこの回想は、亡命先であったモンゴル人民共和国から中華人民共和国内へもどされた後に書いた「反省文」に近い回想なので、その状況を加味して理解する必要があるが、宿願の第一歩を踏み出したという大きな喜びは十分に伝わってくるであろう。煙草谷自身も建国の祝辞で以下のように語っている。

煙草谷の祝辞

我等は諸君の同志として本日までやって参った、此建国の第一聲を深く心に刻み我々は全民衆の協力によって平和な蒙古を作らねばならぬと思ふ百年の大木一日にして長ぜず、今正に芽を萌いたばかりの所である、此を蒙古国民諸君は熱情を以て育てあげることが諸君の任務であると思ふ私は命のある限り諸君を援助申す覚悟です⁹⁹

第三項 煙草谷にとっての募兵工作

煙草谷平太郎の主な経歴をあげると、大正3（1914）年に士官候補生として習志野の陸軍騎兵学校に入り、大正6（1917）年に陸軍士官学校を第29期生として卒業した。大正7（1918年）年7月から大正8（1919）年9月の間にシベリア出兵に従軍した¹⁰⁰。1933年に関東軍の熱河作戦に参加し、1936年に募兵工作を行った。煙草谷は回想録では自分の行動を擁護しているかもしれないし、募兵工作に関する人物や師長などにも取り違えがある。また徳王の回想に出てくるモンゴル人参加者の役割も強調していない。煙草谷の回想通りに理解すると、募兵工作が彼一人の成果であったかのようにになってしまう恐れがある。しかしそれでも、募兵工作の詳細な資料を提供したただ一人の人物であったことは間違いない。煙草谷の功績は、日本側の参加者、あるいは関東軍の募兵計画の実施者としての功績

⁹⁸ 森 1994, p. 140。徳王の回想である。

⁹⁹ 春日 2004, p. 90（史料①）。

¹⁰⁰ 史料③「ソ連抑留中の懐古」の部分から引用。

であろう。熱河省長をうまく利用して行軍を成功させた点でも彼個人の能力を評価すべきである。

次に、煙草谷自身にとって募兵工作がどれほどの意義を有したのかという問題も研究の余地がある。煙草谷平太郎は熱河作戦以来、継続して内蒙工作に従事しており、モンゴル人と付き合ううちにモンゴル人に対して特別に強い親近感を抱くようになっていたようである。それは少し前の所で回想を引用したように、2人のモンゴル人少年をもらい受けて養子として育てていたことからわかる。この2人の子供を屋島、玉藻と名づけて、募兵工作に参加させていたのである¹⁰¹。ちなみに「屋島」とは高松市の東部にある有名な観光地の名であり、「玉藻」とは高松城一帯を指す地名である。いずれも煙草谷が故郷にちなんで名付けたものと思われる。

第四項 募兵工作後の煙草谷平太郎

募兵工作が終わってから、煙草谷平太郎は関東軍に休暇届を出して一時帰国することになる。その日時は書かれていないが、以下のように回想している。

おどろいた。僕は蒙古をさるつもりはなかった。ただ爾後の蒙古工作について、司令部と意見に食い違いがあり、田中久機関長は満洲国の軍政部に転勤、後任に田中隆吉参謀が座ったからである¹⁰²。

ただし、妻と白湯温泉に滞在していた時に司令部から電報があつて、彼は再び内モンゴルへ戻ることになる。最高軍事顧問である田中隆吉との意見の食い違いがあつても、再び内モンゴルへ戻ることにした理由としては、煙草谷の自ら集めたモンゴル人兵士や師長たちが、以下の回想にあるように、煙草谷の帰日を非常に心配していたからである。

ところが、蒙古人の師長らが、心配し、僕はそのまま離蒙するのではないかと、36通も司令部に電話¹⁰³をうったらしい。そして僕のところにも師長から3通届いたので、

¹⁰¹ 史料② 第二巻, p. 129。

¹⁰² 春日 2004, p. 10 (史料①後半)。

¹⁰³ 「電報」の書き誤りかも知れない。

この「三顧の礼」をないがしろにしては、仁者でなくなると、直に、帰蒙を決意し、張北に飛び帰り、田中隆吉機関長に挨拶した¹⁰⁴。…

僕が帰って姿をあらわすと、第二軍の蒙古兵の士気は大いにあがり、「あれ、うちのモモ（お母さん）が帰った。もう大丈夫だ」とよろこんでくれた。僕を軍長と呼ばず、「ぼくらの軍を生んだ母ちゃん」と¹⁰⁵。…

母のことを東部内モンゴルの方言で「モモ」と呼ぶ。第二軍にとって煙草谷平太郎は募兵から編成まで参与した人物であって、第二軍を作った「モモ」のような存在であった。言い換えれば、煙草屋は第二軍のモンゴル兵の指揮官というだけではなく、非常に親しい関係であったことがここから実証できる。しかし結局以下のように、煙草谷はその後再び日本へ帰国することになる。辞表を提出して、彼自身の募兵した「蒙古軍」を蒙疆に残したまま帰国することになった。彼の言うように田中隆吉と見解が合わなかったためか、それとも現役軍人ではなかったために辞表を出したのか、そのあたりの原因は不明で、検証が難しい。しかし、彼の回想通りに、モンゴル人部隊と親しい関係となり、モンゴル人部隊に対して日本側の指導理念とは違う見方を持っていることも理解できる。彼の後任としては徳王が自ら第二軍の軍長になる。顧問にもなれなかった煙草谷平太郎は、おそらく当時の関東軍の内蒙工作と意見の食い違いがあったのであろう。

僕の舞台は終わった。花の舞台生活ではなかったが「勸進帳」義経と弁慶にあたる2人2役をシルクロードの入り口で、充分発揮したつもりである。もはや「蒙古」の仕事は玄人にお任せして去るべきである。昭和十二〔1937〕年七月 関東軍に辞表を提出して、帰国した¹⁰⁶。

煙草谷平太郎は地元日本の高松市へ戻った後も、1939年の徳王と李守信の訪日の際に岡山駅で彼らを出迎えたことを、以下のように自ら回想している。

¹⁰⁴ 春日 2004, p. 10 (史料①後半)。

¹⁰⁵ 春日 2004, p. 11 (史料①後半)。

¹⁰⁶ 春日 2004, pp. 21-22 (史料①後半)。

昭和十四〔1939〕年秋日本政府の招請により徳王並に李守信将軍も共に訪日の日を迎へた、我家族は岡山駅頭に彼等の通過を迎へ、娘と姪に花束を贈らせ遠来の親しき客に對し勞をねぎらつた¹⁰⁷

その後、煙草谷は1939年に北京へもどつて商売をし、1942年からシンガポールで漁業への従事を計画していた。さらにその後、詳しい事情は不明ながら、やはり結局満州方面へもどつて終戦時にソ連軍の捕虜になつたようである。そして昭和20（1945年）年8月から昭和31（1956年）年10月という11年間もの長きにわたつてシベリアに抑留され、ウラル西北方の北極圏に近いインターという炭鉱などにおいてドイツ人捕虜も含む八千人と共に強制労働に服した。日本へ帰国できたのは、1956年のことであつた¹⁰⁸。

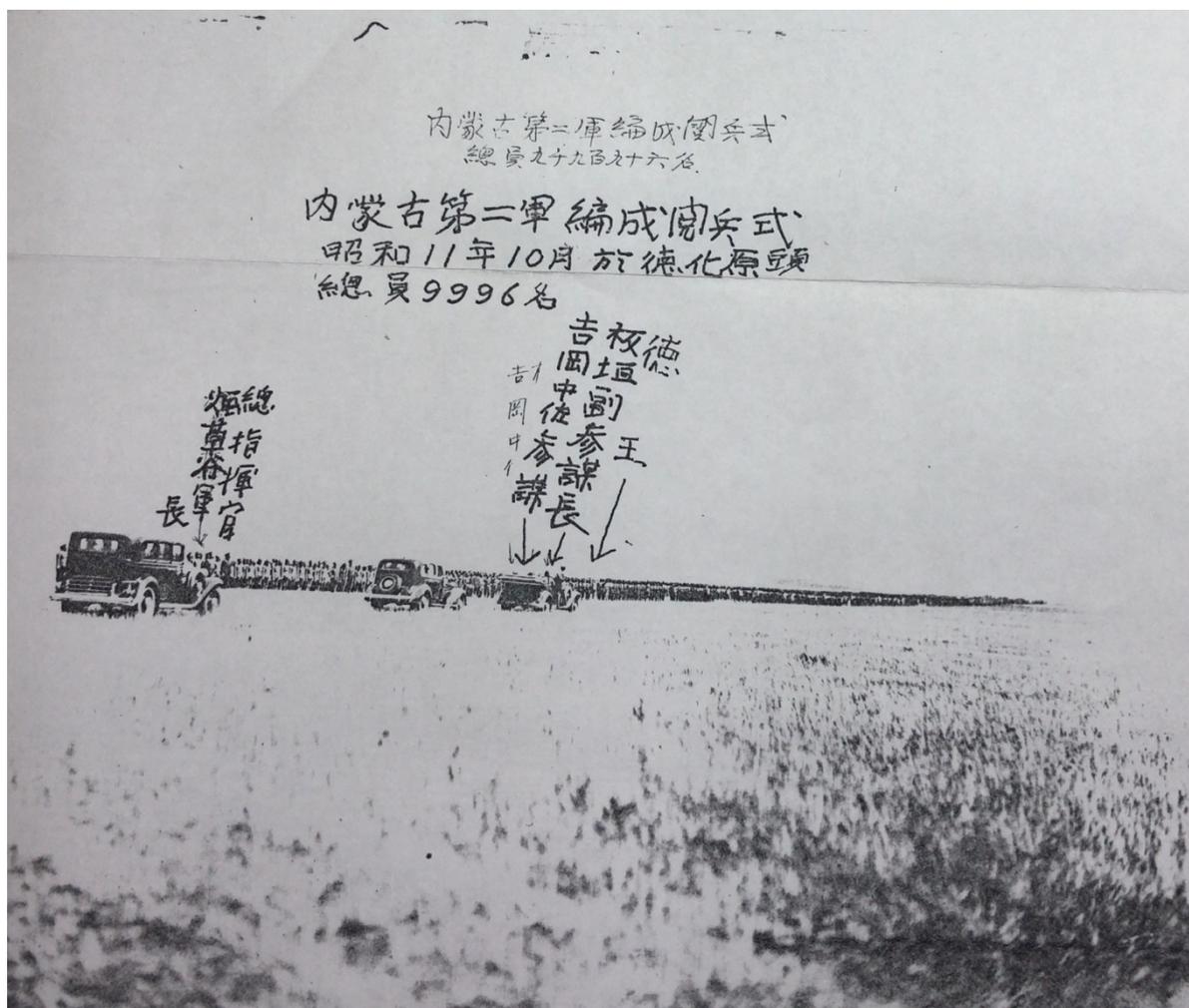


写真 5 モンゴル軍の閱兵式（史料③より）

¹⁰⁷ 史料② 第二卷, p. 64。

¹⁰⁸ 史料③ 「内蒙古の巻」による。



写真 6 徳王と李守信が岡山駅で煙草谷を出迎えた時の写真 史料③より

小結

内モンゴルの蒙古軍政府にモンゴル人自身の軍隊を作るという理念は、板垣征四郎を代表とする関東軍参謀部と大きな関連を持つ。関東軍は、1931年9月23日から、東部内モンゴル独立運動のガンジュールジャブの軍に武器、弾薬を供与していた¹⁰⁹。当時の板垣征四郎ら関東軍首脳が内モンゴルの独立運動に便乗し、それを支援・利用しようとしていたことは明らかである。本章で検討した蒙古軍政府のための募兵工作も、その始まりから終わりまで、板垣征四郎等関東軍が背後で関与していた。具体的に言うと、板垣は国際世論による批判の中で秘密裡に煙草谷を任命して募兵工作を実施し、軍事費への配慮から最後の蒙古軍成立の証となる閲兵式に至るまで自ら関与した。板垣自身は蒙疆政権のその後の歴史とは直接の関係を持たなくなるが、彼が最も重要な軍隊の編成自体に直接関わっていたということは、本研究の新たな発見である。もし、板垣征四郎らの蒙古軍募兵計画がなければ、蒙疆政権の樹立もその後の発展もなかったかもしれない。

¹⁰⁹ 小林・島田編 1964, p. 192 (史料⑩)。

募兵工作の実施者として最も代表的な日本側の人物が煙草谷平太郎であった。募兵工作に自ら携わり、現地のモンゴル人と交流もしながら、軍隊へ入隊することを勧めた。その回想録には、煙草谷自身にとっての募兵工作が、モンゴル人の国を建設し、昔のモンゴル民族のレベルにまで復活させようとする彼なりの使命のようなものであったかのように書かれている。煙草谷の回想だけを見ると全てが彼一人の業績であったかのように誤解してしまう恐れもあるが。板垣からの指令を受けて募兵工作の中心人物として、最も重要な役割を果たしたのは間違いない。

しかしその一方で、徳王自身も軍事訓練や小規模な募兵工作など、モンゴル人自身の軍備強化を1934年の蒙政会の時期から既に考えていた。徳王が関東軍に募兵の要請したことも募兵工作の原因であると考えられる。徳王の回想では少ししか言及されていないものの、募兵工作そのものも徳王自身が主導して行い、部下を派遣したというように書かれている。したがって、東部内モンゴルの出身の宝貴廷、烏雲飛ら徳王配下のモンゴル人は既に1934年の時点から満州国領内での募兵工作の経験を持っていて、1936年の募兵工作でも工作を順調に進めるのに欠かせない役割を果たしたものと考えられる。

この募兵工作は、当時の歴史的背景の下で考察する必要がある。誰か一人によってなしとげられた偉業というわけではなく、更に単一民族集団の国家樹立のためだけに寄り集まったということでもない。工作の計画から実施、そして結果という流れを分析してみると、募兵を主張する徳王、具体的に実施計画を作った関東軍参謀部、募兵の実施担当者煙草谷平太郎、募兵の参与者である徳王側のモンゴル人宝貴廷、烏雲飛、包悦卿等が募兵工作に貢献したほかに、李守信の影響や熱河省長張海鵬の協力も間接的に貢献したのであった。また、民族自決を求める徳王が関東軍に協力することになった理由の一つがこの募兵工作そのものであったという結論は、本章での検討から確認できたのではないだろうか。及川2019の指摘するモンゴルの民族自決運動を利用するという日本側の意図の実践もここで実証できたものと思う。

第三章 蒙疆政権下の蒙古軍における「漢人部隊」の改編問題

小序

蒙古軍の第二軍のほとんどが1936年の募兵工作によって集まった純モンゴル人部隊であった。それに対して、蒙古軍の第一軍は徳王と李守信の連携によって編成された元の「察東警備軍」である。第二章で述べたように、募兵工作が実施される前に李守信の部隊が察哈爾省を占領して、宋哲元の部隊を撤退させた。このように、李守信の部隊には、蒙古軍の募兵工作やチャハル盟公署の成立に功績があった。そして、徳王と李守信が連携し、1936年5月12日の蒙古軍政府成立によって蒙古軍第一軍として編成された。第二軍と違って、第一軍はほとんど漢人兵士によって編成されていたのである。本章ではこの第二軍の問題を検討する。

第一節 蒙古軍李守信部の由来

第一項 北洋政府時代の李守信部

李守信は、当初1918（民国7）年に、当時の熱河地方に存在した小軍閥としての地方部隊である「毅軍」に身を投じ、その内の張連同が率いた熱河遊撃馬隊に参加した。

毅軍とは1912年4月30日、北洋政府の臨時大総統袁世凱が統率した熱河地方の軍隊を改めた軍事組織であり、26歩兵隊、3馬隊、2砲隊からなっていた。民国初期には、毅軍は主に外モンゴルのジェブツンダンバ・ホトクト政府の率いる武装勢力である「蒙匪賊」と戦っていた。1912年には、内蒙古のジョーオダ（昭烏達）盟の北部やチャハル北部のドロソ（多倫）、張家口までの地域占拠した「蒙匪賊」の勢力と戦い、反撃して「蒙匪賊」の勢力を撃退した。その後、1916年と1918年には東部内モンゴルの馬賊のリーダーであったバボージャブの軍隊と戦い、ジョーオダ盟の林西の一带を守っていた¹¹⁰。

袁世凱の死後、熱河省は軍閥混戦¹¹¹の情勢下に入り、地方長官の都統も軍閥関係者に入れ替わった。それゆえ、北洋政府（北京政府）時代には熱河都統のほとんどが軍閥系の出身であった。

¹¹⁰ 公式サイト <http://www.omnitalk.com/miliarch/archpage.pl> : 『东坛军事文摘』 民初毅軍による。

¹¹¹ 1916年の袁世凱の死から1928年の南京政府の北伐によって全国統一がなされるまでの軍閥紛争時代。

毅軍は熱河省北部の安定を確保していたが、各軍閥の勢力に対して鼻息を窺う態度を取り、地方部隊としての勢力を確保していた。「誰が熱河の都統になれば誰を擁護し、誰が去ったら誰を討つ」という諺が熱河地域に流行っていたと言われる¹¹²。

李守信はちょうどこの民国初期、つまり熱河省の軍閥混戦時期に直隸派軍閥である毅軍の遊撃馬隊に参加し、兵士から連隊長まで昇進することが出来た。1924年の第二次奉直戦争の後、熱河遊撃馬隊が、直隸派から転じて奉天軍閥に帰服し、奉天軍閥の東北騎兵第17旅に改められた。旅長は崔興武であり、李守信は第34連隊の連隊長となった¹¹³。しかし、奉天派から兵士としての俸給を得ることはなかった。当初李守信の率いる連隊の中で、兵士のほとんどが元の毅軍の兵士や熱河の馬賊、匪賊であった。モンゴル人は少数であった。

第二項 関東軍によって改編された李守信部

1933年、関東軍は中華民国東北軍（奉天軍閥）の戦意を事前に挫いて、その勢力の瓦解を促すために、政治的な威嚇効果を狙った航空作戦を展開した。1月下旬、熱河作戦の準備命令に先立って、関東軍の爆撃機が開魯県方面に飛来して偵察・爆撃を行った。開魯は奉天軍閥の騎兵第一七旅の駐屯地であり、熱河作戦前に抗日意識の強い馮占海軍が入り込んでいた。関東軍の爆撃機は崔興武軍を避けて、馮占海軍を集中的に空爆した。3日連続で空爆したが、24日に爆撃機6機のうちの1機が地上からの銃火によって被弾して不時着し、2人の空軍の乗務員が捕虜となった¹¹⁴。当初李守信の第34連隊は開魯での警戒の任務を任せられ、部隊の200人の兵士を交代勤務で歩哨に置いており、彼らが歩兵銃で飛行機を撃ち落としたのである。崔興武は李守信に2人の捕虜と飛行機を劉継広の兵営に保管するよう命じた¹¹⁵。

李守信が日本と関わったのは上司の崔興武と関係がある。上記の事件は、崔興武と関東軍の接触の機会を提供した。崔興武は日本側の通遼特務機関と連絡を取った上で、1月27日に部下の李守信団長を通遼機関長の田中久少佐のもとに送り、2人の捕虜と引き替えに弾薬の提供を要求させた。2月1日、李守信は、田中久に付き添われて新京の関東軍司令部に出頭した際、武藤軍司令官、小磯参謀長と会見し、小磯から捕虜と弾薬の交換を快諾

¹¹² 公式サイト <http://www.omnitalk.com/miliarch/archpage.pl> 『东坛军事文摘』 民初毅軍による。

¹¹³ 『李守信自述』（史料④），p. 86。

¹¹⁴ 森 2009, p. 121。

¹¹⁵ 『李守信自述』（史料④），p. 113。

する旨の回答を得た。こうして関東軍は騎兵 17 旅を帰順部隊とみなすようになった。崔興武は満州国治下における自分の財産を確保するため、事前に投降する意向を有していた。関東軍から崔興武に対して次の決定があった。「崔興武投誠の証として草野機乗組員を護送すべし。崔興武が投誠を示すに於いて帰順を許し当分の間現在の地盤を認め生命財産を保障する」¹¹⁶。

2月7日に崔興武は李守信を第十七旅の旅長に任命して、自ら正式に下野した。これより李守信の部隊は関東軍の興安遊撃師として改編され、李守信本人が興安遊撃師司令として任命された。その後、興安遊撃師は20日余りの休養、整備を経て2000人から8000人まで拡大した。そのため、漢族出身者の多い部を第一、第二支隊（両支隊を合計して6300人余り）とし、モンゴル人の多い部を第三支隊（1700人余）として編制され、すべて李守信によって率いられることになった。その後、第一、第二支隊をチャハル省ドロン県へ進出させ、第三支隊を経棚、林西を守備させる留守部隊として残留させた。また、当時の奉天軍閥の湯玉麟の下でモンゴル人の烏古廷が率いていたモンゴル人部隊も李守信に帰服し、第四支隊と改称された¹¹⁷。

第三項 関東軍内蒙工作とのつながり

のちに、興安遊撃師は察哈爾省六県を勢力下に置いた後、関東軍の内蒙工作によって蒙古軍政府第二軍として改編された。その背景には次の要因があると指摘できる。第一に、関東軍は李守信をモンゴル人と認識し、彼が率いる部隊は蒙古軍であると認めた。

「李守信は南満の蒙古トムト（ジョスト盟の土黙特）部の出身で、王公でもない賤民でもない、平民である。その生家には亭々たる楡の大木があって家系の古さを示している。清朝の結婚政策によりモンゴルの世襲的階層は、満洲族や漢民族の上層部との結婚、また平民の階層では満洲地域に移民してきた漢人との結婚は普通であった。中流の蒙古人は族内通婚の慣習を保ってきて、典型的蒙古人といえる。よって満洲南部出身の李守信は中流であって純粋な蒙古人だ」とされている¹¹⁸。

1933年1月31日に李守信が関東軍司令部を訪れた際に、菱刈隆司令官と小磯参謀長は李守信に対して「あなたは勇敢な蒙古人であるためあなたのみと話す、蒙古民族の復興と

¹¹⁶ 現代史資料 8（史料⑩），p. 443「熱河作戦機密作戦日誌抄」による。

¹¹⁷ 森 2009, p. 123。

¹¹⁸ 松井 1966（史料⑧），p. 140。

大東亜共栄圏のために一緒に協力しましょう」と述べた¹¹⁹。菱刈隆や小磯参謀長など関東軍の要人たちは、李守信のモンゴル人という民族性に強く拘泥したが、実際には李守信の先祖も、山東省からトゥメト旗に移住してきて定住した漢人と現地モンゴル人との混血であった。即ち、当時、「随蒙」¹²⁰と呼ばれる人々の一人であって、李守信自身も「漢化」が深刻な地域で成長したため、子供の頃からモンゴル語を話す習慣がなく、中国語しか話せなかったのである。しかし、李守信は日本側から当初より完全にモンゴル人扱いをされていたため、李守信の家柄の詳しい内情はあまり知られていない可能性が高い。李守信自身も自分がモンゴル人であるというように主張してきたのである。

第二の要因として、李守信の部隊をモンゴル兵として利用しようとする関東軍の目的があげられる。李守信が熱河遊撃師連隊長になった時、多くのモンゴル人馬賊が身を寄せ、合流していた。熱河作戦の際や、抗日のために部隊を拡充した時、また最終的に興安遊撃師へ編制された時も、多くのモンゴル人馬賊や熱河地方部隊のモンゴル人兵士たちが李守信のもとに集まってきた。関東軍は李守信の部隊をモンゴル兵として利用し得る部隊だと認定したのである¹²¹。李守信の上司である崔興武は日本軍が開魯を砲撃した時からあまり戦意がなく、自分の東北地方での財産を確保するために事前に関東軍と密かに協力した。そのこともあって、その流れの中で李守信とその部下の兵士も、日本との戦いから、日本との協力へと転換するようになった。

それ以来、李は日本と関係のあった満州国においてだけではなく、日本の勢力下にあった種々の地域において、前後して熱河遊撃軍師司令、察東警備軍司令、興安西警備軍司令官代理などを歴任した。このような背景をもとにして、関東軍の内蒙工作によって1936年より自分の部隊全軍を、徳王の蒙古軍政府を支える軍事力（第一軍）として編制し、李守信自身も熱河の小軍閥から蒙古軍政府の第一軍司令官へと就任したのである。蒙疆政権が1937年に蒙古聯盟自治政府へと変わってからは、李守信はさらに蒙疆政権の軍事組織のトップである全軍の総司令官になったのである。

第二節 「漢人部隊」改編の具体像

第一項 「漢人部隊」の師長

¹¹⁹ 『李守信自述』（史料④），p. 115。

¹²⁰ 「随蒙」とは清末民国初めの時期に関内の漢人が蒙地に入り、モンゴル人と結婚して戸籍を変えることをいう。

¹²¹ 春日 2004（史料①）騎兵大佐 松室孝良執筆「蒙古国建設に関する意見」。

まず最初に、1939年軍事顧問部が李守信軍第一師の師長劉繼広を包頭市の市長に任命し、包頭市へ移動させた（後に蒙古聯合自治政府最高檢察庁の庁長に任命される）。第一師は蒙古軍の中でも最も規律が良く、戦闘力も他の師連隊に比べて最も強かったと言われる。第一師は昔の毅軍出身の兵士の比率が最も高く、全員漢民族の出身である「漢師」であった。後に砲兵隊長の丁其昌を第一師の師長に任命したが、丁も1939年蒙古聯合自治政府の時、治安部隊長に移動させられた。徳王と日本の軍事顧問部とが主導して劉、丁を相次いで転任させた原因は、もともと毅軍が北洋政府の軍隊であったため、師長を移管することによって第一師の師長と兵士とを切り離したかったのだと思われる。李守信自身が以下のように述べている。

在“汉师”方面，我进入包头以后，为了迅速恢复地方秩序，便让驻防包头的第一师师长刘继广充任了伪包头市市长（日本人和徳王都知道我的第一师，是由“毅军”的底子给打的基础……丁其昌担任师长到1939年秋天，在这年九月一日伪“蒙疆联合自治政府”成立时，即把丁调为治安部长¹²²。

（筆者による日本語訳）

漢師については、私が包頭へ侵入してから、地方の安定を守るため、第一師の師長劉繼広を包頭市市長に任命した。（日本人と徳王は私の第一師が「毅軍」出身であることをわかっていた……）……丁其昌は1939年の秋まで師長に就いていたが、この年に「蒙疆聯合自治政府が成立し丁を治安部部長へ任命したのである。

第二師の師長陳景春は、元来、承德市围場県の地主であり、軍人出身ではなかったが、第二師の師長に任命されていた。彼は、崔興武の東北騎兵第17旅に入隊する前は、国民党中央軍の宋哲元¹²³の部下であった。蒙古軍が帰綏へ移動した時、彼は同じ围場県出身の国民党軍熱河特派員姚景川と頻りに往来していた。また抗日部隊ともこっそりと連絡していたため、関東軍や徳王による疑いを招いてしまった。命を守る為には彼は1939年に自ら下野した。李守信は以下のように回想している。

¹²² 『李守信自述』(史料④), p. 243. ここでは李守信自身が蒙古聯合自治政府を蒙疆聯合自治政府と呼んでいる。

¹²³ 中華民國軍人，陸軍上將。

二师师长陈景春是围场县的大地主，率领民团参加崔兴武的“东北军”十七旅以前，曾参加过宋哲元的“国民军”，故和抗战部队派过来的人乱拉关系，特别是和住在后套的国民党军委会热和特派员姚景川来往非常频繁。怕事情暴漏一九三九年脱离了军队¹²⁴。

(筆者による日本語訳)

第二師師長陳景春は围場県の地主であり、民団を率いて崔興武の「東北軍」十七旅に参加する前、宋哲元の「国民軍」に参加したことがある。抗日部隊の人、特に後套に住んでいた国民党軍熱河特派員姚景川と頻りに往来していたことが露呈するのを恐れ、軍隊を離脱した。

王振華が率いる第三師について言うと、1938年に傅作義が帰綏を攻めた時、連隊長の慕新亜が傅作義軍の馬占山に投降してしまった。その責任を取らされて、師長の王振華は駐蒙軍によって免職された。後に、李守信が自分の部下である参謀部の劉星寒を新たな師長に任命したが、劉星寒も、抗日部隊と結託したとして、蒙古聯合自治政府によって疑われて免職されることになった。李守信は以下のように回想している。

王振華担任第三师师长，一九三八年夏天傅作义反攻归绥时，因团长慕新亚投降马占山而被撤，我又调动总司令部的副参谋长刘星寒去接充第三师师长，担任师长不久便已安通抗战部队的嫌疑，被张家口日本“驻蒙军”撤职¹²⁵。

(筆者による日本語訳)

王振華が第三師師長を担当していて、1938年夏に傅作義軍による帰綏攻撃を受けた時、連隊長の慕新亜が傅作義軍の馬占山に投降してしまったことで王振華が免職された。私は司令部副参謀長の劉星寒を師長に任命したが、師長になってまもなく、抗日部隊と結託した疑いで、彼も張家口の駐蒙軍によって疑われて免職された。

こうして、漢人部隊の第一師、第二師、第三師の師長が相次いで師長から免職或いは転任させられたのである。

第二項 改編された漢師の駐屯地と総兵力

¹²⁴ 『李守信自述』(史料④), p. 244。

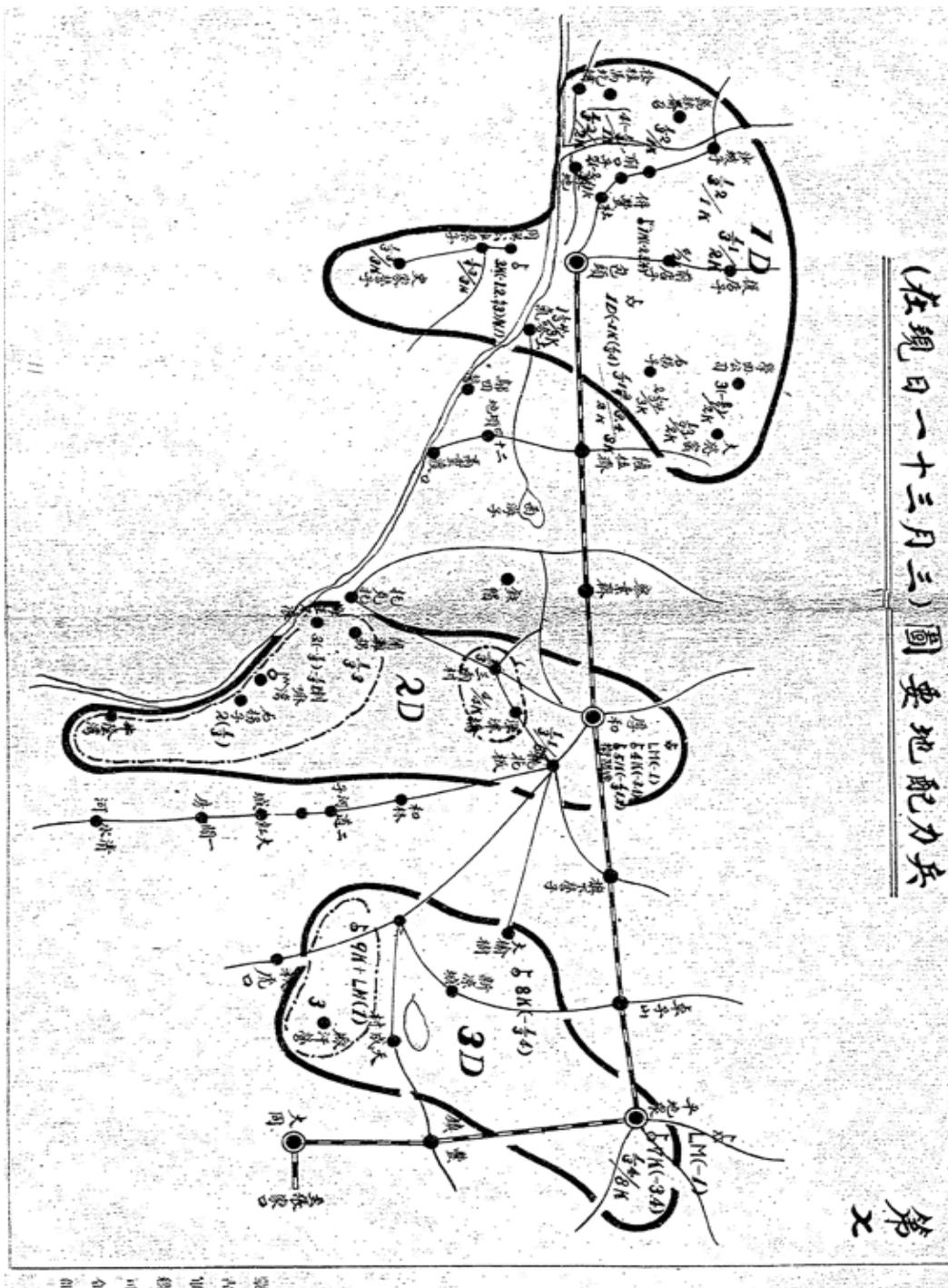
¹²⁵ 『李守信自述』(史料④), p. 244。ここでは李守信自身が蒙古聯合自治政府を蒙疆聯合自治政府と呼んでいる。

1940年頃、第一師は包頭市辺りに駐屯していた。次ページに掲げた地図6は防衛省防衛研究所に所蔵されている1940年3月31日現在における兵力配置要図（史料⑩）である。地図の中で、Dと示されているのは師団（英語のdivision）という意味である。当時の日本の軍隊符号に従ったと思われる。当時のモンゴル軍の漢人部隊三個師団各々の内部構成は、Kは騎兵団、Iは歩兵団、Aは砲兵団、Gは警衛師である。例えば、地図6の左上（北西）部分に「1/3 2/1K」と書かれているのは騎兵第1連隊の第2中隊中にある3つの小隊の中の第1小隊という意味である¹²⁶。したがって地図2の1Dとは漢師の第一師を指す。地図2で2Dと書かれているのが第二師のことである。第二師は厚和（フフホト）辺りに駐屯していた。地図6で3Dと書かれているのが第三師である。第三師は平地線（現ウランチャブ市集寧）に駐屯していた。駐屯地から見える包頭、厚和、平地泉というこのラインは、蒙疆政権領内の東西を結ぶ交通の要衝であった。鉄道もこのラインを走っていた。

蒙古軍全9個師団の総人数は一万人余りであったが、次々ページに掲げる表1「漢人部隊移管計画」（史料⑩）によると、最終的にそのうちの約三分の一を占める第一師、第二師、第三師の「漢人部隊」の将官3名、校官40名、尉官234名、軍士官511名と兵士2091名の総数2874名が改編された。表1の左端にある備考欄から見ると、残りの350名の漢人部隊は目下改編困難であるという理由でこの時には残置されたようである。

¹²⁶ ウェブページ「<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/956386> 国立国会図書館デジタルコレクション 陸軍軍隊符号」参照。北元悠一郎氏（神戸大学）の御教示による。

（左現日一十三月三）圖要地配力兵



地圖 6 第一師、第二師、第三師の兵力配置要圖 防衛省防衛研究所 陸軍一般資料
 満洲-満蒙，蒙古軍軍事顧問部 C13021510600（史料①）

表 1 アジア歴史資料センター 漢人部隊移管計画 C13021510600 (史料⑩)

備考	合 計	師 三 第					師 二 第					師 一 第					總司令部	師団別		第二 漢人部隊移管人員表 (昭和十五年二月十五日現在)			
		計	第九團	第八團	第七團	迫撃砲隊	師部	計	第六團	第五團	第四團	迫撃砲隊	師部	計	第三團	第二團	第一團	迫撃砲隊	師部		衛隊連	階級別	
																						少将	将官
一、本表外總司令部及直轄部隊ニ約三五〇名ノ漢人アルモ之方整理ハ目下ノ處移管困難ニシテ當分ノ間殘置スルモノトス 二、本人員ハ四月末迄ニハ多少ノ移動ハ免レサルモノトス	三	一					一	一				一	一					一			少将	将官	
	六	一	一	一			一	三	一			一	二			一		一			上校	校官	
	九	二			一		二	三		一		二	四	一	一			二			中校	校官	
	二五	七	三	一	一	一	九	二	二	三	一	一	八	五	一			二	一		少校	尉官	
	五一	三	三	五	三		三	二	三	二		四	一五	二	五	四	一	三			上尉	尉官	
	六〇	二二	八	八	四	一	一	一九	七	四	六	一	一	一七	六	六	三	二		二	中尉	尉官	
	六九	二〇	八	五	二	一	四	二六	七	八	七	二	二	二二	七	七	六	一	一	一	少尉	尉官	
	五四	一九	六	六	三	二	二	一九	六	六	五	一	一	一三	三	六	三	一	二	一	准尉	尉官	
	一四二	三八	一一	一五	五	二	五	四九	一三	一一	一五	二	七	五二	一八	一一	九	一	一一	三	上士	軍士官	
	二四九	八四	三一	二八	一四	七	四	七六	二二	一九	二五	六	三	八四	三四	二四	一九	四	三	五	中士	軍士官	
	〇一二	四一	一一	一八	九	二		四九	一一	一四	三			二四	一	一六	七			六	下士	軍士官	
二〇九一	六八七	二五二	二四四	一三四	五〇	七	六六六	二二五	一八七	二〇四	五二	七	六九八	二五七	二二八	一八二	三五	六	四〇	正兵	兵		
	二八七四	九四一	三三五	三三三	一七六	三一	九三三	二九八	二五三	二八七	六九	三〇	九四二	三三四	二九六	二三四	四五	三三	五九	計			

第三項 「漢人部隊」の武器

以下に示す「漢人部隊移管計画」の「移管要領」(史料⑩)によると、「漢人部隊」の装備していた武器については、三師それぞれの駐屯地である包頭、厚和、平地泉で引き継ぎの儀式を行うという規定であった。引継場所では武器を陳列して、日本軍に警備させた。武器の引き継ぎが終わったあとどこへ渡したのかは不明だが、後に拡大された蒙古軍や新たに募兵された新兵などが装備した可能性が高い。

漢人部隊移管計画（史料⑩）

第一 移管要領

其一、一般要領

一、移管部隊ハ昭和十五年四月三十日各師司令部駐屯地ニ於テ政府側ニ移管引継キヲ終ルモノトシ人員、馬匹、兵器（迫撃砲ヲ除ク）被服（防寒帽、同外套、靴ヲ除ク）諸器材（迫撃砲属品、同駄鞍同駄馬ヲ除ク）凡テ現状ノ儘之レヲ引継クモ兵舎ハ依然蒙軍ノ管理ニ属スルモノトシ要スレハ一時移管部隊ニ於テ使用スルコトヲ認ム 但シ迫撃砲隊兵員ニハ小銃ヲ携帯セシム

二、移管引継ハ蒙古軍側責任者及引継委員会、政府側関係者並ニ関係日本軍側立会ノ下ニ移管及宣誓式ヲ実施シテ之ヲ行フモノトス細部ハ別ニ定ム

表 2 移管兵器調査表： C13021510600（史料⑩）

備考	背離刀	小圓匙	同脚	同駐板	八輕迫撃砲々身	同彈薬箱	同保彈帶	同裝彈器	同銃履	同三脚架	昆馬式機關銃	同彈倉帶	同裝彈器	同彈倉	同豫備銃身	同負革	チエツコ式輕機関	九音喇叭	五音喇叭	三八式歩兵銃	七七式歩兵銃	モーゼル一號拳銃	チエツコ式騎銃	同彈薬袋	同銃履	同負革	同銃口蓋	一三式歩兵銃	雌式軍刀	同劍差	同帶革	一三式銃剣	品目	第五					
																																		区別	總司令部	第一師	第二師	第三師	總計
一、本表以外ノ兵器ハ總司令部ニ返納スルモノトス																						二	五二	五二	五二	五二	五二		五四	五四	五四	五四							
				四	四	四	一二	二二	三	三	三													五	七〇七	七〇七	七〇七	七〇七		五三〇	五三〇	五三〇	五三〇						
		二三二		三	三	三	四〇	四〇	九	一〇	一〇	六	六	六	六	六	六						二	五九	八三三	八三三	八三三	七六四		五三二	五三二	五三二	五三二						
		三七		三	三	三	三六	三六	七	六	一二	一二	一	一	一	一	一	五	二	四	二六	三	一八	七七四	七七四	七七四	七二六	三	七四二	七四二	七四二	七四二							
		二三二		三	三	三	三八	三八	一六	一九	二五	二五	七	七	七	七	七	五	二	四	二六	七	一三四	二三五六	八七五	二三五六	二一九二	三	一八五八	一八五八	一八五八	一八五八							



図1 チェッコ式騎銃（ウェブページ <https://ja.wikipedia.org/wiki/ZH-29>）



図2 チェッコ式輕機關銃（ウェブページ <https://ja.wikipedia.org/wiki/ブルーノ>）

ZB26)

上記の表2「移管兵器調査表」(史料⑩)に見える「チェッコ式騎銃」、「チェッコ式軽機関」というのは1920代後半にチェコスロバキアで開発された武器を中華民国が受注契約し、中華民国国軍に装備したものであった¹²⁷。もともと李守信は中華民国の東北騎兵第17旅第34連隊の連隊長であったため、その部隊も中華民国国軍の武器装備を受領していたと思われる。そのために、蒙古軍の中の漢師も中華民国国軍の武器を持っていたことがわかる。移管された時、チェコ製の武器は141挺あった。

漢師に数多く装備されていた2192挺の「一三歩兵銃」は李守信の元の部隊が奉天軍閥や直隸軍閥に所属していた時に装備されたものである可能性がある。「十三年式村田銃」(正式には「明治十三年大日本帝国村田銃」)は明治期の日本軍が採用した最初の国産小銃である。この村田銃は、日清戦争、日露戦争、義和団事件、第一次世界大戦などで日本の歩兵によって使われていた。中国の軍閥や中華民国軍が鹵獲や売却などの形でこれを購入したものと思われる。村田銃は13年式村田銃、16年式村田銃、18年式村田銃、22年式村田銃、22年式村田連発騎銃という順番に発展していくので、「一三式村田銃」はその中でも一番古い銃であった。1930年代の時点で考えると当時の陸軍装備としてはかなり遅れていたことがわかる。それに比べて性能の優良な「三八式歩兵銃」は4挺しか装備されていない。日本陸軍の主要な歩兵銃の流れは、その後、「三八式」、「四四式」、「九九式」と続き、1930年代にはすでに「九九式歩兵銃」が日本陸軍によって使われていたのである。しかし、蒙古軍の漢人部隊には日本製の新式武器は配分されていなかったことがわかる。徳王は日本軍から直接もらった武器を蒙古軍のモンゴル人部隊の方に装備していたという可能性も考えられよう。その他の武器の詳細については今後の課題としたい。

第三節 「漢人部隊」を改編した理由

第一項 蒙疆周辺の軍隊

以下の一覧は『現代史史料』(史料⑩)に見えるものである。松室孝良、片倉衷、松井忠雄の所蔵する内蒙工作の史料の中で1936年頃の蒙疆政権の軍事力と周辺の中国部隊が列挙されている。そのうち蒙疆政権の領内と想定される場所にも以下のような軍隊が入り混ざっていた。

¹²⁷ 中国近代兵器工業編審委員会編1998参照。

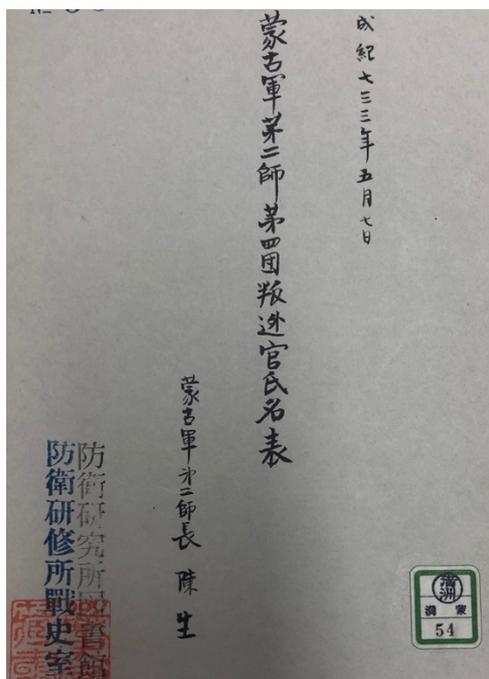


図3 蒙古軍第二師第三團叛逃官兵名表 (史料⑫)

- 一、在綏遠山西軍（総指揮は傅作義）
 - (一) 包頭一百靈廟 第七十師 王靖國 山西騎兵第二師 孫長勝
 - (二) 綏遠一帶 第十三師 傅作義
 - (三) 平地泉 一帶、陶林、紅格爾圖、興和を前線とす¹²⁸

傅作義は綏遠省の主席であって、国民党山西軍第四軍を率いていた。その軍隊も綏遠辺りに駐屯していて、蒙古軍と対立する状態であった。さらに、蒙古軍の中でも漢人部隊の士官が傅作義に投降する傾向があったのである。このように、蒙疆政権の漢人部隊三個師団が駐屯していたのと同じ

隣り合った地域に軍閥や中華民国の政府軍も駐屯しているという状況であった。これらの軍隊と蒙疆政権の漢人部隊との往来が頻繁にあったことは前掲の『李守信自述』（史料④）の中にも記述されている通りである。

第二項 漢人部隊の叛逃

日本側の軍事顧問部が残した史料には、漢人部隊が蒙古軍を裏切った時の蒙古軍第二師第四團の叛逃者に関する記録が残っている。「漢人移管」を実施する前年に当たる成紀733（1939）年5月7日に蒙古軍第二師の師長であった陳生が日本の軍事顧問部に報告した記録（図3）では、蒙古軍第二師第四團の團部少尉副官（趙晋宸）、少尉軍醫（安士英）、少尉軍需（王存仁）などの軍官が187名の兵士と共にフフホト周辺の巴彥縣草欄村で逃亡したことがわかる（前掲の地図6に示した）。これらの逃亡者は少尉3人を含めて全員が漢族出身であり、武器や馬匹とともに逃亡したのである。逃亡した原因と逃げた方向は書かれていない。図3はそれを記録した史料である。日本側や徳王がこれら漢人部隊の逃亡や武器の流出を恐れていた可能性は高いであろう。

¹²⁸ 『現代史史料』（史料⑩）8, p. 593。

第三項 大漢義軍によるシラムレン廟兵変

1936年に蒙古軍第七師（全員モンゴル人）に破滅的な衝撃が起きた。関東軍の謀略部隊であった王英¹²⁹の大漢義軍がシラムレン廟で反乱を起こし、傅作義との戦いで日本と協力しつつ共同作戦を取っていた蒙古軍第七師のモンゴル人兵士と日本の軍事顧問22名とともに殺してしまったのである。この事件も徳王が漢人の部隊を警戒し始めた原因の一つであると思われる。

徳王はこの事件について詳しく記録を残していて¹³⁰、それによると、王英に編成させた「大漢義軍」と蒙古軍とに命じて綏遠省へ侵攻させるよう1936年に徳化特務機関長田中隆吉が主張した。戦略上王英の漢軍を先鋒として「漢族を利用して漢族を打つ、蒙古軍は後方で督戦する」と田中が主張したという。徳王によると当時徳王自身の狙いは綏遠省であり、王英の狙いは河套地域であった。しかし、結果的には傅作義軍と数回の戦闘を交わした結果、大敗を喫してシラムレン廟に両軍共駐屯することになる。以下の回想にあるように、この時徳王は、王英の漢人部隊を蒙古軍と同じ場所に駐屯させたくなかったという。結局恐れていた通り、王英部隊の旅団長であった石玉山と金憲章が傅作義側とすでに内通していて兵変を起こしたということのようである。

这时我不愿意第七师和王英队混合驻扎一处，除派伪军事署长王宗洛乘坐飞机前往该庙，慰问部队并查清情形联络部署外，特电令穆克登宝，将该师驻在西拉木伦庙的所部官兵调到布拉图庙集结，不料指挥王英部队的日本顾问小滨大佐坚决不许可。穆克登宝说，这是奉徳王司令的命令，正在指挥部队开拔之际，第七师野崎顾问竟抽出军刀进行威吓说：“驻守此地的部队，都归小滨大佐统一指挥，必须听从小滨大佐的命令，否则就以军刀相见¹³¹。

（森久男氏による日本語訳）

その頃、私は第七師を王英の部隊と同じ場所に駐屯させたくなかったので、軍事署長王宗洛を飛行機で同廟へ派遣して、部隊の慰問、情勢の観察、部署の配置をさせたほか、特にムグドンボ¹³²に電報を打って、同廟にいる第七師の将兵を移動させ、ボラト廟に集結するよう命令した。意外にも、王英部隊の日本人顧問小浜大佐はどうしても

¹²⁹ 河套の地方軍閥である。自らが率いる部隊を大漢義軍と称し、日本へ投降していた。

¹³⁰ 『徳穆楚克棟魯普自述』（史料④），p. 43。森（編）1994『徳王自伝』，p. 157。

¹³¹ 『徳穆楚克棟魯普自述』（史料④），p. 50。

¹³² 第七師師長。

それを許さなかった。ムグドンボが「これは徳王総司令の命令です」と言って、部隊を指揮して出発しようとしたところ、第七師の野崎顧問は何と刀を抜いて、次のように脅迫した。「ここに駐屯している部隊はすべて小浜大佐の統一指揮下にあり、大佐の命令に従わなければならない。さもなければ、軍刀に物を言わせてやる」¹³³。

王英の部隊に関しては初期の内蒙古工作を担当していた松井忠雄も全く信用していない様子であった。当時徳化機関補佐官であった松井忠雄大尉の手記には以下のように記録されている。（ ）内は引用者による補足である。

これらの部隊（王英の大漢義軍）を機会があれば武装解除し、或いは追放しようとしたのは、以上の（内通の）内情を（松井自身が）知っていたからで、田中隆吉にもしばしば忠告した。隆吉が工作の主軸と考えた謀略部隊は、実は使用期限の切れた黄色薬みtainなもので、何時どんなエネルギーをうけて爆発するか、判らぬ危険極まりないものであった¹³⁴。……中国は猛烈な切り崩しをやり出した。蒋介石や閻錫山と連名で「内蒙軍将兵に告ぐ」とし、「親愛なる中国同胞よ！君等はなぜ綏東を侵略する必要があるのか。君達中国人が中国人を打ち殺す悲惨事をやめて、速やかに正義にかえれ！君等が、このままぐずぐずしておれば中国四億の同胞は、君等を蛇蝎視するに至るだろう。速やかに中央軍隊に来れ！」といい、一銃、一門、一機に賞をかけ、我々の首にも金をかけた。

王英、金甲山部隊に入れた密偵報は、部隊の統制全くなく、幹部は連日会議を開き、反正（寝返り）を論じていると報告した。徳化¹³⁵に注意すると、「疑えば、李守信と雖も同じ」と、放言して相手にしない。切り崩しは、張家口から行われ、張勵生¹³⁶が動いていた。苦肉反間¹³⁷を李守信と我々の間に行った。隆吉はカンカン怒ったが、（李守信が中国側に内通する）事実はなかった。しかし上海電は、デカデカと李守信の反生を宣伝した¹³⁸。

¹³³ 森（編）1994（『徳王自伝』），p. 169。

¹³⁴ 『現代史資料』（史料⑩）8, p. 564。

¹³⁵ 徳化とは蒙疆政權総司令部のことを指している。

¹³⁶ 国民党の河北平津特派員。

¹³⁷ 苦肉反間とは敵の間者を使って敵情を知り、敵の仲を裂く「反間の計」と、自分の身を傷つけることで、相手の信頼を得て密偵行為を行う「苦肉の計」のこと。

¹³⁸ 『現代史資料』（史料⑩）8, p. 571。

事件後のことについて松井は以下のように回想している。

翌十日間仁田通信手が一人だけ生還して来た。その報告によると、小濱大佐は寝台の上で腹に短刀をさされ、副官は人口で斃れ大月一人拉致され、他のものは廟の壁にならんで立たされ、片端から銃殺、本人は隣の血をあび昏倒し、夕方寒さで目がさめ、
ラマ坊主の所で衣類をかりてスニトにたどりついた、というのだった¹³⁹

関東軍の謀略部隊である王英の部隊は綏遠事件¹⁴⁰前に田中隆吉のいう通り、「漢族を利用して漢族を打つ」という目的で設立されたのであるが、中華民国軍と内通していて、実際には当時は反日、反モンゴルのであったということが、シラムレン廟兵変の事例でわかる。本章の第二節第一項ですでに述べたようにこの反日的な情況が李守信の漢人部隊にまで及んでいたのである。漢人部隊の有する意向としては、そもそもモンゴル民族の独立自治や日本の内蒙工作を目指してはいなかったのである。徳王は1936年のシラムレン廟兵変という大事件から漢人部隊を信用しなくなったものと思われる。シラムレン廟兵変について徳王は以下のように回想している。

第七师在这次变乱中死亡数百官兵，蒙受很大损失，我和穆克登宝受到察盟蒙民的责难，他们编出歌谣来咒骂我们。这是我勾结日本帝国主义挑起绥东战役所得的结果¹⁴¹。
(森久男氏による日本語訳)

今回の反乱では第七師将兵の死者は数百名にのぼり、大きな損失を被った。私とムグドンボ（第七師師長）はチャハル盟の蒙古人に非難され、彼らは歌まで作って我々を罵った。これは私が日本帝国主義と結託して綏東の戦いを挑発した結果である¹⁴²。

徳王はシラムレン廟兵変の前からモンゴル人部隊（第七師）と王英の漢人部隊とが共同作戦をとることについて賛成していなかったが、結局田中隆吉の「漢人を利用して漢人を打つ」、そしてモンゴル軍は後方で督戦するだけ、という進言を受け入れた。統帥権は日本側に握られていたので、仕方なく王英の漢人部隊と共同作戦を取ったのである。傅作義

¹³⁹ 『現代史資料』（史料⑩）8, p. 574。

¹⁴⁰ 綏遠事件とは1936年末、徳王、李守信や王英の部隊が関東軍の後援のもとで綏遠省に進出し、同省の傅作義軍に撃退された事件である。

¹⁴¹ 『徳穆楚克棟魯普自述』（史料④）, p. 51。

¹⁴² 森（編）1994（『徳王自伝』）, p. 170。

軍に敗れた後も、王英の漢人部隊とともにシラムレン廟に集結することになった際、部下にすぐシラムレン廟から離れるように強く念を押してまでいたのである。そのため、事件についての徳王の回想をみると、第七師の将兵、すなわちモンゴル兵を全員死なせてしまったことについて、悔しさと怒りに満ちた気持ちになったことがよくわかる。そもそも王英らの漢人部隊を信用していなかった徳王は、シラムレン廟兵変によって、さらに、反漢的な感情になったのではないだろうか。

第四項 漢人部隊に関する徳王の思惑

それでは徳王は、蒙古軍内部の漢人部隊に対してどう考えていたのであろうか。『徳穆楚克棟魯普自述』（史料④）によれば、漢人部隊の改編を最初に主張したのは「日本側」であった。徳王は蒙古聯盟自治政府時期の末期に、日本側が蒙古軍各師をすべてモンゴル化し、漢族によって編成された蒙古軍第一師、第二師、第三師を各県に駐在する警察隊に改編するよう指示したと回想している。

徳王はこれに対しては当初反対していたという。その理由として徳王は以下の三点をあげている。

- ①第一、二、三師の多くは漢族であっても、李守信と密接な関係がある。
- ②彼らは綏東（綏遠省東部）の戦闘および綏遠各県を占領する際にかかなりの功績を立てた。
- ③彼らは徳王にも忠誠を誓っていて、徳王に背いたのは一部のみである。

最終的に徳王は「日本側はどうしても譲らず、いくら議論してもむだだとわかって、仕方なくそのいいなりになった」¹⁴³という。

ところが、その一方で、以下に引用する『李守信自述』によれば、徳王自身も何度も蒙古軍の内部にモンゴル人青年を抜擢するよう要請していた。つまり、当初はモンゴル人を入れることによって蒙古軍を純粋モンゴル人化していき、漢人部隊の持つ潜在的な危険性を徐々に取り除いていきたかったようである。しかし、その後、前述の兵変などもあって結局漢人部隊の改編に賛成せざるえなくなったということのようである。

¹⁴³ 『徳穆楚克棟魯普自述』（史料④），p. 71。森（編）1994（『徳王自伝』），p. 205。

他是用安插文人，培养新人，笼络旧人和排挤汉人的四种手段，企图把我的兵权完全夺走……建议“驻蒙军”军部，总司令部八大处之上，又设了参谋，教育和总务三个部。并强调部长由蒙古人担任¹⁴⁴。

由于他不相信汉人，想成立一支名副其实的蒙古军队，做他打江山的亲军……¹⁴⁵

1938年年底这一阶段可以指挥调动一万八千多人……却也因此而使日本感到不安，并引起德王的嫉妒、都想消我的我的兵权……日本人和德王都知道我的第一师，是由“毅军”的底子给打出来的基础。纪律和战斗力比其他的师要好、较强所以先从我的第一师下手¹⁴⁶

(筆者による日本語訳)

彼（徳王）は腹心の配置、新人の育生、懐柔、漢人の排除という四つの手段を用いて、私（李守信）の権力を奪うつもりであった。……（徳王は）総司令部の上に参謀、教育、総務の三つの部門を設けるよう駐蒙軍に進言した上で、さらに全てモンゴル人に担当させることを強調した。

彼（徳王）は漢人を信用しないため、純粹のモンゴル人部隊を創設して、彼の天下を取るための親衛隊にしたかった……

1938年年末頃の段階で私は一万八千人の兵隊を有し……しかも、（そのことで）日本人が不安になり、徳王の嫉妬を促した。皆私の兵権を除去したい……日本と徳王は私の第一師が「毅軍」出身で、戦闘力も一番強いことがわかっていたので、第一師から手をつけた。

徳王は蒙古軍創設時の李守信の役割を認めていて、李守信自身をも信用していたため、表立った漢人部隊改編には当初反対していたようである。また蒙古軍の実際の統帥権は軍事顧問部や駐蒙軍にあったので、徳王は政府主席であったにもかかわらず、軍のことについては日本側に意見を提案することしかできなかった。しかしながら、その提案の主な内容をみると、やはりあくまでモンゴル人の抜擢と漢人の排除であった。したがって、漢人部隊の改編に徳王自身が強く反対していたとは、とても考えられない。むしろモンゴル人政権としての色彩を強めるという目的で、結果的に日本側の改編提案に賛成していた可能

¹⁴⁴ 『李守信自述』（史料④），p. 281。

¹⁴⁵ 『李守信自述』（史料④），p. 213。

¹⁴⁶ 『李守信自述』（史料④），p. 248。

性の方が高いのではないだろうか。『徳王自述』は徳王自身がいかに罪を犯し、モンゴル人と漢人に被害を与えて“漢奸”となったかということを回想するという状況下で書かれたものであるため、実際に徳王自身が漢人部隊に対してどう思っていたのかはわかりづらいが、『李守信自述』と合わせて読むと、漢人部隊の改編に関して、徳王自身もある程度の役割を果たしていたことがわかるであろう。

小結

蒙疆政権が成立する前段階で、徳王、李守信、日本の三勢力の結託によって蒙古軍政府が成立し、蒙古軍が編成された。李守信の部隊の中にもともと熱河の地方部隊であった漢人部隊三個師団が入っていたため、結果的に蒙古軍の中に中国人部隊が入り混じっていたことになる。これが蒙古軍の初期の段階での大きな特徴であった。

徳王は李守信の立場を考えて最初は漢人部隊改編に対して賛成していないが、そもそも徳王が日本と協力した目的はモンゴル人の独立を目指すものであり、蒙古軍全軍の戦闘力の低下はもちろん望まないとしても、蒙古軍をモンゴル人の軍隊として編成したいという希望があったため、結果として漢人部隊の改編に同意したものと考えられる。つまり、漢人部隊を蒙古軍の正規部隊と見ていないのが事実であった。

一方、日本側が漢人部隊の改編を主導したのは、漢人部隊による反乱や民国側への寝返りを警戒したためである。日本側の軍事顧問部が漢人部隊の蒙古軍を裏切った時の蒙古軍第二師第四団の叛逃者に関して記録していた。その記録を基づいてみると、漢人部隊の中で数多くの叛逃者が出てきたのであった。モンゴル人部隊に比べて、漢人部隊はモンゴル人の政権の維持やモンゴル自治独立に関心がなかったのであった。こうして徳王と日本側の意見が一致した結果、蒙古軍内部を大きく改革し、漢人部隊を全て蒙古軍から排除したのである。

第四章 蒙疆政権下の軍事人材育成機構について

小序

1936年4月から8月の募兵工作によって蒙古軍の漢人を含まないモンゴル人部隊第二軍が編成された。そして蒙古軍の第一軍の漢人部隊を1940年に蒙疆領内の警備部隊として改編した。しかし、徳王は蒙古軍が編成される前からモンゴル人部隊を強化しようと考えていた。蒙政会の時期から（1934年）「幹部学生隊」を編成して、保安隊を訓練していた。

蒙古軍の漢人を含まないモンゴル人部隊が編成された後、徳王は軍事人材育成機構の創設に本格的に着手し、具体的に言うと日本側の蒙古軍軍事顧問部に対して蒙古軍軍官学校の提案をした。その結果、日本の陸軍幼年学校や陸軍士官学校をまねた蒙古軍幼年学校、蒙古軍総軍軍官学校が設立されたのである。本章では徳王によるこれら軍事人材育成機構の形成と実態とを実証する。

第一節 徳王による最初の軍官学校の設立

第一項 徳王が最初のモンゴル軍官学校を設立した経緯

1、軍官学校の前身―「蒙古幹部学生隊」

徳王は日本と協力する前から1931年に士官訓練班を設置し、蒋介石の国民党政府から受領した武器弾薬を装備していた¹⁴⁷。その後も、北京で募集したモンゴル人知識青年たちに西スニト旗で軍事訓練や教育を施していた。ただし、この段階ではまだ軍官学校と呼べるほどの規模はなく「蒙古幹部学生隊」と称していた¹⁴⁸。蒙古幹部学生隊の教官だったフフバートル（韓風林）は、西スニト（蘇尼特）で活動をしていた笹目恒雄が1933年に徳王に紹介した。

フフバートルは日本の陸軍士官学校で学ぶ前の1923年から1929年の間、北京で葡和克什克、瑪哈希瑞などと「蒙文学会」を創設し、無給でその理事を務めていた。「蒙文学会」は「モンゴル語の研究、モンゴル語による学問の普及、モンゴル人を啓蒙し、モンゴル文化を拓げる」ことを目的とする学会であった。彼は日本の陸軍士官学校卒業後にガンジョールジャブの「蒙古独立軍」の副官となって有望な青年軍官と評価されていた。ま

¹⁴⁷ 森（1994）, p. 18 に引用されている徳王の回想を参照。

¹⁴⁸ 森（1994）, p. 20。徳王自身の部隊を烏滂守備隊と読んでいたので、「蒙古幹部学生隊」を「烏滂守備隊幹部訓練班」ともいう。

た、南京で国民政府軍の士官訓練班の教官になった経歴もあった。徳王からも非常に信頼されていて、教官以外にも徳王の日本語通訳などを担当していた¹⁴⁹。

徳王はフフバートルに蒙政会の保安処第一科長をも兼務させて、第二科長に雲繼先（ソ連留学生、「蒙古幹部学生隊」の教官でもあった）、第三科長に朱実夫（黄埔軍官学校出身のモンゴル人、「蒙古幹部学生隊」の教官でもあった）を配置していた。1934年9月に蒋介石の憲兵第三団の兵士によってフフバートルが北京で逮捕され行方不明になった後に殺害されるという事件があった。その殺された理由は日本と結託して国家（中華民国）に背いたからという理由であったが、この事件によって徳王には蒋介石と国民政府の支持を得て軍隊を拡充しようという考えがなくなったといわれる¹⁵⁰。さらに、1936年2月に保安隊の雲繼先、朱実夫が帰化城トゥメト旗（綏遠一帯）出身の兵士を集めて反乱を起こし、綏遠省へ逃げて傅作義に投降した。そして彼らが傅作義の下で国民党寄りの綏遠蒙政会を設立した。徳王の蒙政会はこれによって大きな損害を受け、これ以後徳王は黄埔軍官学校の出身者を信頼しなくなったと言われる¹⁵¹。

徳王はもともと日本や中華民国国民政府の軍官学校を卒業したモンゴル人を使って自分の部隊を訓練していたが、以上に述べたような理由で、日本留学組のみに頼りつつ、自分たちの軍官学校を創設するという試みを実施したことがわかる。

2、最初の軍官学校

1936年の蒙古軍政府の成立後、最も重要な課題は兵馬を整えて軍隊を拡充する軍事工作であった。徳王はこれを自ら主導した。そして、李守信配下の部隊と、満州国熱河省の各盟旗で募集した兵隊を集めて8個師団を編成した。軍隊を編成した後、軍官の養成が必要となってきた。そこで中下級士官を養成するため、スニト右旗にある「東軍営」に最初の軍官学校を設置したのである。徳王は蒙古軍政府首席、蒙古軍第二軍軍長及び軍官学校の校長を自ら兼任し、各部隊、各盟旗からモンゴル人青年を選抜して軍事訓練を行っていた¹⁵²。この軍官学校からは二期分の学生のみが卒業し、蒙古軍政府に配属されることになる¹⁵³。このように徳王は、モンゴル自治独立運動を始めた時から軍隊の創設と軍事訓練を進めようとしていたのである。具体的に言えば、モンゴル民族の独立政権、その政権を維

¹⁴⁹ 朝格満都拉（2018）を参照。

¹⁵⁰ 森（1994）, p. 81。

¹⁵¹ 史料④（『李守信自述』）, p. 282-283。

¹⁵² 森（1994）, p. 139。

¹⁵³ 史料④（第29輯（1987））, p. 83。

持する軍隊、そして軍人や将校を育てる教育機構という三者を一体化した近代的な組織を作ろうとしていた。

徳王はこの最初の軍官学校の卒業生を綏遠城、武川、陶林の占領など重要な作戦に登用していた。例えば、卒業生のドイドニマは武川を占領する時に徳王の組織した各盟旗連合軍¹⁵⁴を率いて戦死するまで戦ったのであった¹⁵⁵。

シリングル盟の総務長を務めていたジャクトスチンは、徳王の最初の「軍官学校」について中国語で以下のように回想している。

徳王一向建军有极度的兴趣。早在自治运动之前就有乌滂守备队，学生队的建立。他也曾向国民政府军事委员会方面提议建军，建立军官学校蒙古分校，而均无结果。这时蒙古军既经建立，他就立即在自己的苏尼特右旗王府以西2公里左右既经建成的营盘，成立了蒙古军官学校，自兼校长，集中教育选自各部队和各旗的青年，是他们成为军中的干部。徳王の此一措施，显然是受到蒋中正与黄埔军校的影响¹⁵⁶。

〈筆者による日本語訳〉

徳王はいつも建军に大変な興味を持っていた。自治運動の早い時期からもう烏滂守備隊、学生隊を設立した。彼はかつて国民政府軍事委員会に黄埔軍官学校蒙古分校の設立を提案したことがあったが、実現しなかった。この時点で蒙古軍は既に編成されていて、彼はすぐに自分の西スニト旗王府西側の2キロ離れた所にバラックを建て、軍官学校を設立して自ら校長を兼務した。各部隊や各旗から青年を選んで集中教育をすることによって、彼らを軍隊の幹部にしようとした。徳王のこの挙動は明らかに蒋中正（蒋介石）と黄埔軍官学校の影響を受けたものである。

この回想にあるように、徳王は自治独立運動を始めた頃から軍隊の創設と教育に力を入れていた。蒙古軍に対して近代的な軍事教育を施すのに中華民国国民政府の黄埔軍官学校を参考にする考えがあったようである。例えば、蒋介石は国民党の党中央執行委員会常務委員会主席でありながら黄埔軍官学校の校長を兼任していた。徳王もそれをまねて、蒙政

¹⁵⁴ 各盟旗連合軍とは、蒙古連盟自治政府の時期に（1937年）徳王が蒙古軍全軍の中から各盟旗の兵隊を代表として引き抜いて臨時編成した部隊である。徳王が自分の権力を強めるために試みたと思われる。

¹⁵⁵ 森（1994）, p. 207.

¹⁵⁶ 史料⑤（札奇斯欽（2005））, p. 205.

会の主席兼蒙古軍軍官学校の校長になろうとした。ただし、現実には蒙古分校を作ることにはなかつたので、ジャクチドスチンの上記の回想は慎重に扱わねばならない。蒙政会の時期に保安隊や学生隊を訓練した際には、日本の陸軍士官学校出身のフフバートルやハタンバートルを重用したほか、満州国の興安軍官学校出身のモンゴル人も使っている。当初は、国民政府や黄埔軍官学校等をも参考にして、自ら最初の軍官学校を設立したのであった。

第二項 最初の軍官学校を設立した理由

幼年学校の校長であったボインメンド（博彦們都）の回想では、「徳王は自分の支配を固めるためにまず軍隊を編成し、軍官を養成することが必要であると、そのため蒙古軍を編成すると同時に軍官学校を設立した。」と述べられていて、軍官学校の設立が徳王と直接関係があったことを強調している¹⁵⁷。

内モンゴル独立運動を目指す徳王はモンゴル人からなる部隊を編成して、その部隊を教育するために優秀な軍官を育てなければならなかつた。当時蒙疆政権の蒙古軍、保安隊、学生隊などに勤めていた軍官たちは興安軍官学校、黄埔軍官学校（広州）、保定陸軍軍官学校（河北省）¹⁵⁸、東北陸軍講武堂（奉天）¹⁵⁹、日本の陸軍士官学校などの出身者であつて、蒙疆政権所属の軍官学校出身者はまだ存在しなかつた。

1932年12月10日に南京で蒋介石と徳王が会った際に、中央軍官学校（黄埔軍官学校）張北分校の設立計画を決め、モンゴル人の軍幹部を養成し、さらに蒙古騎兵を編成するよう蒋介石が徳王に勧めた¹⁶⁰。徳王はもしも軍官学校張北分校が出来れば、結局国民党中央の系列校になって、この学校が他人の監督下におかれる可能性が高いと恐れ、自ら学生隊を作つて自分の幹部を訓練した方が良いと考えたのである¹⁶¹。以上に述べたような理由で徳王は独自の軍官学校を設立するに至る。

徳王は、日本と連携する以前の内モンゴル自治独立運動を始めた「蒙政会」の時期（1934年）から、軍事訓練に自ら着手していた。第一節で触れたように徳王自身の回想でも「蒙古軍政府の成立後、最重要事は兵馬を整えて軍隊を拡充する軍事工作であり」と述べている通り、徳王が自ら主導して、士官を養成するために軍官学校を設置したのであ

¹⁵⁷ 史料④（第29輯、博彦們都）（1987）、p. 83。

¹⁵⁸ 1912～1923年の袁世凱の総統在任中に開設された。日本の陸軍士官学校をモデルとしていた。

¹⁵⁹ 1919年張作霖が奉天派の軍官学校として設立した。日本の支援もあった。

¹⁶⁰ 森（1994）、p. 17。

¹⁶¹ 森（1994）、p. 20。

る。蒙古軍政府の軍隊募集に際して日本の援助が非常に大きな役割を果たしたが、蒙古軍政府が成立すると同時に軍官学校を創設したのは徳王自身の判断によるものであって、「中下級士官を養成するため、とくに我が旗の東軍営に蒙古軍官学校を設置して、私みずから校長を兼任し、各部隊・各盟旗から蒙古青年を選抜して訓練をおこなった」という徳王の回想から判断しても、日本の関与はまだ及んでいなかったのである¹⁶²。

しかし、蒙古軍の軍人を育成するにはモンゴル人からなる校長や教官だけでは不十分であり、さらに高いレベルの軍官学校へ人材を派遣する必要があった。それに伴い、1940年に蒙古軍幼年学校が設立されるまで、蒙古軍総司令部が毎年20人を蒙古軍から選抜して日本の陸軍士官学校と満州国の興安軍官学校へ派遣して、軍事訓練を受けさせていた¹⁶³。

第二節 徳王による軍官学校の拡充

第一項 徳王による軍官学校設置の提案

1936年に蒙古軍政府が成立してから蒙疆政権と日本との関係はさらに発展し、軍事面でも軍官学校を中心にして協力が進んでいく。その結果、最初の軍官学校は一旦閉校となつて、日本の軍事教育を受け入れた幼年学校が新たに設立された。すなわちこの幼年学校は徳王の最初の軍官学校を基に作られたのである。

1937年10月27日の蒙古連盟自治政府成立後、徳王は建国事業に全力をついやし、軍官学校に関しては彼自身の回想録にもあまり書かれていない。しかし、この幼年学校の設置も徳王の主張や日本の軍事教育理念を用いるという以前からの考えと大いに関係しているはずである。日本側にも新しい軍官学校創設の要請をしていた。この点に関して司令官であった李守信の回想録と幼年学校に関わった日本側の関係者の資料とに記録されている。史料②『李守信自述』には以下のように書かれている。

〈筆者による日本語訳〉

彼は新人を育てることに力を尽くした。「烏滂守備隊」は三百、五百人しかいないのに幹部訓練班を設置し、学生たちを黄埔軍校出身の雲継先などに訓練させた。帰綏に来てから“東蒙”の文人が信用できないから日本人に蒙古軍の軍官学校を設立するよう提案した¹⁶⁴。

¹⁶² 森 (1994), p. 139.

¹⁶³ 東瀛 (1986), p. 205.

¹⁶⁴ 史料④『李守信自述』, p. 282.

ここで出てくる“東蒙”とはおそらく朱実夫、雲継先など保安隊の反乱を起こした帰化城トゥメト出身のモンゴル人を指している可能性が高い。なぜならばフフバートルなどの東部ホルチン等出身のモンゴル人は日本の陸軍士官学校や興安軍官学校出身者がほとんどであって、国民党側や漢人軍閥に寝返る心配がないとして徳王から信頼されていたからである。一方、第二章でも言及したように朱実夫、雲継先らが綏遠省の傅作義に投降した時に連れて行ったのもほとんど帰化城トゥメト旗出身の兵士だった。彼ら帰化城トゥメト出身のモンゴル人の大部分はモンゴル語が話せず、民族の自治独立運動への共感も決して強くはなかった。そのため徳王は黄埔軍官学校等で学んだ彼らを疑うようになって、日本側に新たな軍官学校創設の提案をしたのである。

また、李守信の回想によれば、徳王が日本側に提案したのは「帰綏に来てから」のことだといっているので、1937年10月14日に蒙古軍が日本と共同作戦を取って帰綏を占領した後のことだと判断できる。この頃の蒙古軍は皆騎兵であって、戦車や自動車で動く日本軍よりも速かったため、綏遠占領にも大きな役割を果たしたのである。周知のように、綏遠に来て蒙古軍の実力が増加するうちに徳王はさらに権力を固め、内モンゴルの独立をいち早く実現するために「蒙古連盟自治政府」の設立を日本側に主張したのである¹⁶⁵が、それとともにより高いレベルの軍官学校の創設も提案したものと考えられる。

次に、蒙古軍幼年学校の青木主任教官が残した当時の資料をも参照する必要がある。

位置選定上ノ考案

徳王創立ノ軍官学校々舎ヲ若干補造改修ヲ加ヘルノミニテ大部分其ノマヽ使用スルコトヲ得、即チ經費ト建設ノ時間トヲ全ク省略シ得ルモノナリ。

本質ニ於テ徳王ガ軍官学校創立ノ其ノ精神ト其ノ歴史トヲ尊重シ、將來ノ拡実ハ徳王ノ最モ欣喜タル処ナルベシ。

而シテ西蘇尼特ヲシテ軍官養成ノ学府タラシムルニ於テ同人ノ欣奉トスルハ必然ナリ。

又之ヲ純生汎蒙古思想普及ト啓蒙上ヨリシテ或ハ外蒙工作並ニ其ノ完了後ノ將來ヲ思フ時蓋シ適切ナル地点タリ得ベシト信ズ¹⁶⁶。

¹⁶⁵ 史料⑥（『呼和浩特史料』第六集，p. 83）。

¹⁶⁶ 史料⑩（満州-満蒙-106）。

この資料だけでは幼年学校の設立を誰が提案したのかは確実にはわからない。しかし、上述した李守信の回想と合わせて見ると、西スニトに幼年学校を創設することを徳王が喜んで引き受けたのは当然のことであった。さらに重要なのは、蒙古軍幼年学校を設置することが「純正汎蒙古思想」を普及させるという日本の政策の側面から見ても適切であると青木主任教官が主張している点である。純正汎蒙古思想という語がここで用いられている意味は内モンゴルの民族自決運動を利用するという意味だけでなく、外モンゴル、内モンゴルなどのモンゴル人居住地全体を統一させて、統一モンゴル国を復興させるという意味である。その実現の可能性はともかくとして、日本人教官たちは、将来の日本の「外蒙工作」、すなわち反共の内モンゴルが共産主義の外モンゴル（モンゴル人民共和国）を取り込んで合併させるという深謀遠慮までも考えた上で、幼年学校創設が適切であると判断したわけである。こういう「汎蒙古思想」を蒙疆政権に普及させ、さらに外モンゴルまで浸透させれば、ソ連と中国に分断された形の内外モンゴルが統一されることになり、日本の赤化防止、反共政策にも有利なのであった¹⁶⁷。及川（2019）の言う民族自決を支援するという論理が確かにここにも存在していたことがわかる。

その一方で、この蒙古軍幼年学校の青木主任教官が当時残した資料には、徳王についてさらに以下のように書かれている。

現在ニ於テ、尚同人ハ強烈ナル自己所有学校意識ヲ有シ、事々干渉的言動ニ出ヅル事例尠カラズ、此レヲ完全ニ封鎖清算スルニ非ズンバ將來癌的疾患ハ永ク学校ノ発達ヲ禍スルニ到ルコトアルヲ豫言スルモノナリ。

蓋シ学校ノ拓実進展ハ徳王ノ企圖ニ合致シ其ノ精神ハ永遠ニ光輝アラシムルモノナルヲ以テ或時期ニ到レバ、枳然トシテ感謝ノ態度ニ出ヅルハ必至ナルベシ¹⁶⁸。

上記の資料から徳王が幼年学校について強く干渉していたことがわかる。青木教官は徳王のこの強い干渉を止めさせるべきであると判断しているものの、軍官学校の発展が確かに徳王の願望と合致していることは認めており、軍官学校を創設する徳王の願望を認めれば、徳王自身も日本に感謝するであろうと考えている。

¹⁶⁷ 関連する内容は及川 2019 を参照した。

¹⁶⁸ 史料⑩（満州-満蒙-106）。

次に引用する幼年学校の日系教官であった遠藤延平が後年書き残した回想には、軍官学校を幼年学校に改編した経緯が書かれている。蒙古軍幼年学校では生徒を募集する前の1939年に日系の教官を募集している。遠藤の回想は、改編時に青木教官が書いた上記資料とほぼ合致していて、徳王が西スニトに設置した最初の軍官学校に基づいて幼年学校が設立されたことがわかる。

蒙古軍幼年学校は元徳王軍の軍官養成を目的として徳王府の所在地である西スニトに設置されてきた蒙古軍々官学校を軍の改編に伴い昭和十四（1939）年蒙古軍幼年学校と改称し旧施設に増改築を加え昭和十五年六月新規に生徒を募集して開校したものである。

昭和十四年七月二十二日蒙古軍日系教官に採用別紙の通り¹⁶⁹。

日本の陸軍幼年学校は、陸軍将校養成制度の中核に位置付けられる。陸軍将校となった者でも、どれほど能力があろうとも、たとえ陸軍大学卒の陸軍最高学歴を保持していても、新制陸軍幼年学校の出身者でなければ、陸軍中枢機関の幹部にまで到達することはほぼ不可能であったと言われる。まさに「陸軍幼年学校体制」とも言うべき陸軍エリート養成制度が日本で発足していたのである。第一次世界大戦終結後から1945年の軍解体までの時期において、陸士十五期生以降の幹部たちのほぼ全員が、新制陸軍幼年学校の出身者で占められていた。中央官衙の要職で陸軍幼年学校ばかりが優遇されていた¹⁷⁰。こういう日本の陸軍幼年学校の、幼少年期から陸軍エリートを養成しようとする制度を蒙疆政権の蒙古軍幼年学校に導入することによって、徳王はモンゴル人部隊を強化して、エリート軍官を養成しようとしたのである。

第二項 幼年学校設立の理由

第一章で述べたように、徳王は自ら最初の軍官学校を既に設立していたにもかかわらず、日本の軍事教育を受け入れて、より教育レベルの高い軍官学校を創設することを希望していた。そこで、西スニト旗に設置していた徳王の軍官学校の場所に1939年6月1日

¹⁶⁹ 史料①（春日（2004）, p. 367）。

¹⁷⁰ 野邑 2016, pp. 9-16

に「蒙古軍幼年学校」を設立することになる。幼年学校の主任教官であった青木教官の資料にも「幼年学校」になった事情が書かれている。

翻テ茲ニ愛慈興隆セシメザルベカラザル後進蒙古ニ於テ蒙古軍幹部養成ノ根基タル幼年学校 教育ヲ創開セントスルニ方リ、範ヲ皇軍幼年学校ニ採リ、此レニ蒙古民族ノ特性ヲ把握シテ、之レニ即スル方針ヲ樹テ、之レカ隆々健達ヲ遂ゲシムルハ、皇道宣布ノ本髓タルト共ニ、又其ノ捷徑的ナルモノト信ズ¹⁷¹。

青木主任教官はまず日本の陸軍幼年学校をまねて蒙古軍にも幼年学校を創設する必要があると主張していることがはっきりとわかる。こういう理由で、徳王の軍官学校を創設するという日本側への提案は、軍官学校の代わりに蒙古軍所属の幼年学校を先に創設するという結果になったのである。

蒙古軍幼年学校が設立される前の段階で徳王自身がモンゴル人部隊に対して、後述する図4の表にあるような授業科目を実施することは実際に不可能であった。モンゴル人部隊に民族の自覚を促し、より効果的な授業科目を教育しようとするこの計画はモンゴル人部隊の建設に有益であったために徳王もこれを引き受けたのであろう。

第三節 蒙古軍の幼年学校

第一項 幼年学校の生徒

蒙古軍幼年学校の入学資格については「高級小学卒業程度以上ノ学力ヲ有シ満十四才以上十八才迄ノ蒙古人ニシテ未婚、身体強壯ナル者、入学考試並ニ身体検査ヲ行フ。」¹⁷²と定められていた。入学資格があるのはモンゴル人のみであった。入学試験及び身体検査によって入学の可否が決まる。成紀七三七（1942）年に蒙古聯合自治政府総務庁が発行した新聞『政府弘報』の公開した名簿によると、幼年学校の生徒は正式な入学試験を通過して入学していた。合格者総数は79名。そのうち補欠入学者19名が含まれていた。79名はそれぞれ、西スニト、包頭、張北、徳化、厚和（フフホト）の試験場で試験を受けたと考えられる。合格者には、蒙疆政権の支配地域以外にも満州国領内出身のモンゴル人生徒がい

¹⁷¹ 史料①（満洲一満蒙一106）。

¹⁷² 史料①（満洲一満蒙一106）。

た。この名簿を整理してみると、以下のような結果となる（旗の名称は当時の漢字名称で示す）。

満州国領内からの合格者数は9名。

満洲國東科前旗（ホルチン左翼前旗）1名、満洲國東科後旗（ホルチン左翼後旗）2名、満洲國東科中旗（ホルチン左翼中旗）1名、満洲國喀喇沁（ハラチン）右旗2名、満洲國喀喇沁（ハラチン）中旗2名、満洲國邊都（ビント）¹⁷³旗1名。

チャハル盟からの合格者数は27名。

察哈爾盟太僕寺右旗3名、察哈爾盟太僕寺左旗1名、察哈爾盟喇嘛印務處4名、察哈爾盟明安旗4名、察哈爾盟正藍旗1名、察哈爾盟正白旗6名、察哈爾盟廂白旗3名、察哈爾盟廂黃旗2、察哈爾盟上都旗3、

シリンドル盟からの合格者数は1名。

錫林郭勒盟西蘇尼特（スニト右）旗1、

デロワの僧侶（迪魯瓦部¹⁷⁴）6名、

ウラーンチャブ盟からの合格者数は4名。

烏蘭察布西公旗1名、烏蘭察布中公旗1名、烏蘭察布盟明安旗舌力士召旗1名、烏蘭察布盟四子王旗1名、

バインタラ盟の合格者数16名。

巴彥塔拉盟正紅旗1、巴彥塔拉盟正黃旗6名、巴彥塔拉盟廂紅旗2名、巴彥塔拉盟廂藍旗1、巴彥塔拉盟土默特（歸化城トゥメト）旗6名

イフジョー盟からの合格者数は7名。

伊克昭盟準噶爾（ジュンガル）旗3名、伊克昭盟達拉特（ダラト）旗3名、伊克昭盟杭錦（ハンギン）旗1名。

¹⁷³ このビント旗はホルチン左翼前旗のことである。ここでは両者が別の旗だと新聞編集者が勘違いしたものと思われる。

¹⁷⁴ モンゴル人民共和国から内モンゴルへ避難してきていた活仏第五世デロワホトクト・ワチルダラのことをいう。徳王と積極的に関わって、徳王の自治独立運動に助言をする役割を果たしていた。1932年にテロワホトクトは南京国民政府立法委員に任命されていた。

精神教育、日本語、日本事情、武道などの点では日本へと同化させようとする側面も見られるが、一年目の科目の蒙古語、数学、歴史、地理などの学科においては、全てモンゴルと深い関係がある内容が書かれている。蒙古語は勿論だが、歴史の科目でも「蒙古歴史ノ大要知得セシム」、地理の科目では「蒙古並ニ東亜地理ノ大要ヲ會得セシム」、外蒙事情などの教授内容を定めている。以上のような日本やモンゴルに関連する科目が定められる一方、教練、陣中勤務、武道、馬術、体操競技など、軍事と直接関連する科目も定められていた。

教育上の使用言語に関しては、校長であったボインメンドの回想によると、モンゴル語と日本語のどちらをより強調するかについて教官同士が激しく議論した。モンゴル人教官チンバト（満州国から赴任）は日本語重視を訴え、日本人教官の賛同を得た。一方、ボインメンドとハタンバートルはモンゴル語を重視すべきだと主張していた。1942年に赴任したソドノムダルジャイという教官も日本語を重視するよう主張して生徒達と衝突した事件があった¹⁷⁵。使用言語についてモンゴル人の中でも強い親日意識を持つ一部のモンゴル人教官は、日本語を重視するという意見を持っていたのである。チンバトら一部のモンゴル人教官たちは日本語を用いた軍事教育に慣れきっていて、幼年学校で日本語を重視すれば学生たちがその後より活躍できると考えたという理由も考えられる。

ボインメンドの回想によると、他に、ハタンバートルが生徒隊長であって、シジワンスム、ボインデルゲル、バト、エンヘマンライ、バトオチルなど6人の教官がいた。日本人教官は井上など3人がいたという¹⁷⁶。蒙疆政権の日本人関係者の回想を記録した『蒙古軍史稿』（史料①）の中の遠藤と青木の史料から推定すれば、もう2人の日本人教官というのが遠藤と青木であった。

徳王は暇さえあれば、蒙古軍幼年学校を訪れて学生たちを鼓舞していた。彼は母国語とモンゴル文化、そして近代的な軍事知識を身につけて、民族を興隆させようと話していた¹⁷⁷。

¹⁷⁵ 史料④（第29輯、博彦們都（1987）, p. 84-85）。

¹⁷⁶ 史料④（第29輯、博彦們都（1987）, p. 83-84）。

¹⁷⁷ 楊（2015）, p. 184。



写真7 徳王は日本の軍服を着して幼年学校生徒の閱兵式に出る姿



(幼年学校生徒の剣道の基本動作)

写真8 幼年学校生徒の剣道の基本動作

幼年学校生徒教育課程表		第一年度	
精神教育	皇道精神ヲ本源トシ蒙古軍建軍ノ本義ニ基テ汎蒙古思想ノ確立滅共殉國ノ大義ニ徹セシメ日本軍人精神ヲ味到セシム	蒙古史	蒙古史ノ大要ヲ知得セシム
歴史	蒙古史ノ大要ヲ知得セシム	地理	蒙古史ノ地理ノ大要ヲ會得セシム
理科	生理ノ衛生ノ概ヲ會得セシム	算術	算術ノ大要ヲ知得セシム
算術	算術ノ大要ヲ知得セシム	習字	習字ノ大要ヲ知得セシム
習字	習字ノ大要ヲ知得セシム	音楽	音楽ノ大要ヲ知得セシム
音楽	音楽ノ大要ヲ知得セシム	図画	図画ノ大要ヲ知得セシム
図画	図画ノ大要ヲ知得セシム	労働	労働ノ大要ヲ知得セシム
労働	労働ノ大要ヲ知得セシム	射撃	射撃ノ大要ヲ知得セシム
射撃	射撃ノ大要ヲ知得セシム	騎術	騎術ノ大要ヲ知得セシム
騎術	騎術ノ大要ヲ知得セシム	剣道	剣道ノ大要ヲ知得セシム
剣道	剣道ノ大要ヲ知得セシム	柔道	柔道ノ大要ヲ知得セシム
柔道	柔道ノ大要ヲ知得セシム	蹴球	蹴球ノ大要ヲ知得セシム
蹴球	蹴球ノ大要ヲ知得セシム	野球	野球ノ大要ヲ知得セシム
野球	野球ノ大要ヲ知得セシム	その他	その他ノ大要ヲ知得セシム
その他	その他ノ大要ヲ知得セシム	作業	作業ノ大要ヲ知得セシム
作業	作業ノ大要ヲ知得セシム	その他	その他ノ大要ヲ知得セシム

表3 幼年学校第一年度の教育課程表 (史料⑩ アジア歴史資料センター 満洲-満蒙-69)

第三項 日本敗戦後の幼年学校生徒たち

日本敗戦後の西スニト旗の幼年学校は一時的に混乱な状態になっていた。当時はソ連軍とモンゴル人民共和国軍が内モンゴルまで侵入してきて、日本軍と対峙していた。幼年学校の校内でも上級生の一部の生徒たちの中に過激な「革命者」が現れ、日本人教員やモンゴル人教官を殺して、ソ蒙軍と合流しようとしていた。これらの「革命者」は生徒たちからも恨まれていたらしく、生徒たちが密かにモンゴル人教官へ通報してこれらの「革命者」を逮捕したり追放したりしていたようである。その後、幼年学校の生徒たちのほとんどが憧れの国であったモンゴル人民共和国へとトラックで進んでいくことになった。当時幼年学校の生徒だったブレンバヤル・ビレクトの口述によると、50台のトラックで合計1000人ぐらいの生徒がモンゴル人民共和国へ向かったのがあった。幼年学校の生徒以外にも、徳王の武装解除を考えていた蒙古軍の一部も含まれていた¹⁷⁸。

第四節 蒙古軍の総軍軍官学校

第一項 蒙古軍総軍軍官学校の設置

蒙古軍の総軍軍官学校に関しては、史料③に詳しく記載されている。徳王が1936年に設立した最初の軍官学校はただ二期分の生徒しか受け入れていなかったため、幼年学校が設置されてから後も、蒙古軍ではまだ正規の軍官が輩出されていなかった。そこで、1939年以降、蒙古軍司令部から毎年20人のモンゴル人を日本の陸軍士官学校と満州国の興安軍官学校へ派遣して軍事訓練を受けさせていた。徳王と日本側とによる共同の提案によって幼年学校が設立されたが、その一連の計画通り、幼年学校第一期卒業生を迎えた1943年7月にフフホトに蒙古軍の総軍軍官学校が設置された¹⁷⁹。

蒙疆新聞社¹⁸⁰が発行した『蒙疆年鑑』（史料⑥）に以下のように記録されている。

蒙古総軍軍官學校 蒙古軍では従来厚和（フフホトのフフ）に蒙古軍官學校を設立、既成軍官の再教育をはかって来たが、軍の中堅をなす少壯軍官の養成は満洲國興安軍官學校においてなされて来た。これがため蒙古軍独自の軍官養成機関の設立は最喫緊事とされて来たが、成紀七三八（1943）年六月一日を期して多年の宿願たる軍官養成の最高機関たる蒙古総軍軍官學校が開設され、歴史的第一期學生入學式舉行した。同

¹⁷⁸ 佐々木 2015, p. 203, 210.

¹⁷⁹ 史料⑥ 『呼和浩特史料』第7集, p. 205).

¹⁸⁰ 蒙疆新聞社は、1938年5月20日に、蒙疆地域における日本の国策広報等を目的として設立された新聞社である。

軍官学校は蒙古軍幼年学校卒業生を學生隊として收容、三年の修業年限を終了後見習軍官として各隊に配屬され、三箇月を経て陸軍少尉に任官する。日本陸士派遣學生も今後は同校卒業生に限り、また學生隊を併置、既成軍官の再教育も実施するもので、蒙古軍教育訓練の最高殿堂である。

『蒙疆年鑑』の上記の説明は幼年学校青木主任教官の記録や『李守信自述』に言及されている徳王の提案内容とほぼ一致していることがわかる。蒙古軍総軍軍官学校は、幼年学校の一期生が卒業してから彼らを受け入れたのである。それ以前は、徳王の最初の軍官学校が設置されていたにもかかわらず、軍官養成のために毎年満洲国の興安軍官学校や日本の陸軍士官学校へ留学生を送り込んでいた。蒙古軍総軍軍官学校が設置されてからは、幼年学校を経て蒙古軍の総軍軍官学校に入学することとなり、そこを卒業した後さらに日本の士官学校へ派遣される場合もあった。

ジャクチドスチンの回想録でも徳王の軍官学校の設置について以下のように語られている。

〈楊（2015）による日本語訳〉

モンゴル軍幼年学校の卒業生はみな、徹底的な民族主義者になっていた。そのような青年たちがさらに軍官学校で勉強すれば、自然にモンゴル軍内で民族意識の強い将校へと成長していく。以前に興安軍官学校に派遣していた青年たちにもモンゴル人としての民族意識がなかったわけではないが、絶対にモンゴル独立を口にしなくなる。そうした事実を見て、徳王と他の指導者たちは独自の軍官学校を創建したのである¹⁸¹。

第二項 総軍軍官学校の構成

初代の校長について楊（2015）では満洲国の興安軍官学校出身のノムンダライであったと解説されているが、史料⑥（『呼和浩特史料』第七集、p. 205）では日本の陸軍士官学校を卒業した倉都楞（ツァンデューレン、漢名包海明）であったと記述されている。史料④（『李守信自述』, pp. 245）と金海（2009）, pp. 176 では総軍軍官学校の校長に関して記述が一致している。この両者によると、初代の校長は満洲国興安軍官学校出身のノムンダラ

¹⁸¹ 楊（2015）, p. 192。

イ（脳門達頼、）次は烏雲飛（徳王の幹部学生隊出身）、3代目がツァンデューレン（倉都楞、漢名包海明）であった。

徳王は総軍軍官学校を設置してから、この軍官学校を把握するために、蒙古軍第六師師長烏雲飛をノムンダライに次いで2代目の総軍軍官学校校長に任命し、ノムンダライを第六師の師長に任命した。烏雲飛は、徳王が蒙政会時代に作った幹部学生隊で訓練を受けた腹心であった¹⁸²。

日本人顧問は日本の陸軍士官学校を卒業した柳下良二中尉、幹事長はウリジーオッサル（烏勒吉敖斯爾）、生徒隊長は日本の陸軍士官学校出身の少校包風書、学生隊長は日本の陸軍士官学校出身の上尉トゥプシン（特布新）、生徒隊連長は日本の陸軍士官学校出身のガワンプイル（葛瓦畢勒）であった¹⁸³。総軍軍官学校の教官は日本の陸軍士官学校或いは興安軍官学校を優秀な成績で卒業した少尉の軍官が担当すると定められていた¹⁸⁴。

総軍軍官学校の在学学生たちは生徒隊、学生隊、教導連という三種のグループに分割されていた。生徒隊は蒙古軍幼年学校卒業生からなる。学生隊は蒙古軍各部隊の元小隊長や普通の中学校の卒業生からなり、少尉の候補とも呼ばれていた。彼らは初級指揮官の軍事理論と技術を半年学んだ後、蒙古軍各部隊の少尉、小隊長の任務についた。教導連は各部隊の元班長たちを訓練するもので、学校の警備やロジスティクス（後方支援）の仕事を担当する。教導連の在学期間は不明である。学生隊と教導連の待遇は蒙古軍の他の部隊と同等であった¹⁸⁵。

第三項 生徒隊への教育、待遇及び授業科目

ここで重点的に取り上げるのは生徒隊である。生徒隊とは徳王の幼年学校を卒業して総軍軍官学校に入学した人たちで、待遇や授業、訓練内容の面で学生隊や教導連と大きな違いがあった。生徒隊も軍官の候補と呼ばれていた。生徒隊の学生たちは総軍軍官学校を卒業した後、蒙古軍の各部隊で2年間兵役を務める義務が定められ、その後はそのまま各部隊に残るか、日本の陸軍士官学校の入学試験を受けることが許可された。日本の陸軍士官学校を卒業できた生徒たちは少尉となる。

¹⁸² 史料④（『李守信自述』），p. 245。

¹⁸³ 史料⑥（『呼和浩特史料』第7集，p. 205）。

¹⁸⁴ 史料⑥（『呼和浩特史料』第7集，p. 206）。

¹⁸⁵ 史料⑥（『呼和浩特史料』第7集，p. 206）。

生徒隊の在學生には毎月学校から蒙疆幣 25 円の手当が提供された。軍服、履物、寝具、日常生活用品及び食費も供給された。生徒隊の學生が冬休みや夏休みに実家に戻る際の往復旅費や病気になる際の治療費も無料であった。

生徒隊の学習期間は 3 年とされた。1 年目は予備課程の 1 年で、終了後に少士（伍長）の階級を与えられる。その後の 2 年間の終了後、中士（軍曹）の階級を与えられる。

生徒隊の授業には学科と術科との 2 種の内容が含まれていた。午前中は学科、午後は術科を実施した。学科も文化系科目と軍事系科目とに分かれていた。文化系科目としては、「高等数学」「物理」「化学」「地理」「歴史」「日本語」「モンゴル語」などの授業科目が設定されていた。軍事系科目には「戦術」「射撃学」「築城学」「兵器学」「地形学」「軍事経済史」「歩兵操典」「砲兵操典」「剣術」「陸軍礼儀規則」「生徒の心得」などの科目内容が含まれていた。術科では通常の軍事訓練を行うほかに「急行軍」「夜行軍」「砂盤演習」「現地演習」「射撃」「キャンプ演習」「剣術」「銃剣」「馬術」「軍事関連のスポーツ試合」などを行っていた。総軍軍官学校は完全に日本の陸軍士官学校を模範として運営されたのであった¹⁸⁶。

第四項 総軍軍官学校の卒業生

1、混乱の中の総軍軍官学校

敗戦後すなわち 1945 年 8 月 15 日以後、日本軍は蒙疆から次々に撤退することになる。総軍軍官学校の所在地である帰綏（フフホト）は各勢力によって囲まれた状態になった。ソ連・モンゴル人民共和国連合軍も帰綏に近い張家口やシリントール盟まで進軍してきて、まもなくフフホトまで来ようという状態であった。蒋介石は国民党軍に迅速に帰綏を占領するよう命令していた。共産党の八路軍と抗日遊撃隊も大青山あたりで活動し、即時に帰綏を解放する準備をしていた¹⁸⁷。

一方、蒙疆政権はこのような複雑な状況に直面して、上層部、軍隊、軍官学校がそれぞれ異なる行動をとっていた。徳王は代表を派遣してソ連・モンゴル連合軍に連絡を取ろうとしたが、ソ連・モンゴル連合軍の飛行機が張家口に飛来してビラをまき、「徳王は日本帝国主義の走狗で役人達は日本帝国主義の手先である」と罵り、「闘争に立ちあがろう」と民衆に呼びかけていた。そのため、徳王はまず一時的に北京へ赴き、別の方法で引き続

¹⁸⁶ 史料⑥『呼和浩特史料』第 7 集，p. 207。

¹⁸⁷ 史料⑥『呼和浩特史料』第 7 集，p. 210。

きモンゴル自治独立運動を試みようとしていた¹⁸⁸。北京へ行く前に徳王は蒙古軍を八路軍と戦わせる計画を立てていた。参謀長の宝貴廷が蒙古軍を率いて八路軍と激しい戦闘を行っていて、蒙古軍と八路軍の双方に大きな犠牲が出た¹⁸⁹。

結局、日本敗戦後の帰綏には共産党の八路軍と国民党軍とがほとんど同時に侵攻してきた。当時総軍軍官学校の校長であったツァンデューレン（倉都楞）が学校と学生達を保護していたが、ほとんど無政府状態に近かった。総軍軍官学校は八路軍と戦うという徳王の命令を受けていて、軍官学校の歩兵隊が八路軍に向かって大砲を撃ったりしてはいたが、まだ直接の対戦はしていなかった。国民党軍も同じ時期に帰綏に入り込み、軍官学校の学生達と頻繁に衝突していて、9月下旬にはそれがさらにエスカレートした。軍官学校の学生たちは国民党軍を十数名撃ち殺し、生徒のサインバヤルが重傷を負って学校へ戻ってきた。それ以降も学生たちと国民党軍との衝突が相次いで起きていた。校長のツァンデューレンはソ連・モンゴル連合軍から学生たちを保護するために、長春の法政大学の大学生2人をやとって学生達にロシア語の授業を受けさせたという。ソ連・モンゴル連合軍の歓心を引くという目的であったと考えられる¹⁹⁰。

このような状況の中でツァンデューレンは帰綏を占領する作戦の準備をしていた八路軍騎兵旅の旅団長李森と交渉しに行った。李森が部下のビリグバートルというモンゴル人に命じてツァンデューレンと交渉させた結果、軍官学校の生徒と教員は、10月26日に帰綏を囲む国民党軍を突破して八路軍に合流するという協議をした。結局、1946年2月に軍官学校の学生たちは共産党配下の内蒙古軍政学院の学生となったのである¹⁹¹。総軍軍官学校の学生たちは徳王の命令によって共産党と戦おうとしていたが、実際には国民党軍との間で本当の戦争状態となってしまう、軍事力の面で国民党に劣ると思われていた。学生たちを保護するために、ツァンデューレンが、同じモンゴル人が多く所属していた八路軍に合流する方法を選んだものかと思われる。

2、共産党側への参加後の軍官学校の生徒たち

中国共産党の側に参加した後、軍官学校の元教員や元学生達は、共産党による解放戦争や、国民党軍との戦闘において、たちまち大きな役割を果たした。

¹⁸⁸ 森（1994）, p. 311-312.

¹⁸⁹ 森（1994）, p. 306. 史料②（『呼和浩特史料』第7集）, p. 210.

¹⁹⁰ 史料⑥（『呼和浩特史料』第7集）, p. 211.

¹⁹¹ 史料⑥（『呼和浩特史料』第7集）, p. 211.

総軍軍官学校の幹事長ウルジーオッセル（烏勒吉敖斯爾）は中国人民解放軍錫察（シリ
ンゴル、チャハル）軍区騎兵師師長に任命され、部隊を率いて国民党軍と3年間戦って、
シリントン盟、チャハル地方を解放するのに大きな貢献をした。ウルジーオッセルは1950
年に内蒙古交通局長に就任した¹⁹²。

総軍軍官学校の生徒隊連隊長ガワンピル（葛瓦畢勒）も八路軍の錫察軍区騎兵師参謀長
ウルジーオッセル師長と協力して部隊を巧みに指揮し、国民党軍を何度も敗退させて数多
くの功績をあげた。彼は1950年にシリントン盟副盟長に任命された。第一期生バートル
サン（巴特爾倉）は内蒙古軍区副参謀長、同じく一期生のゴビ（戈壁）は内蒙古人民銀行
行長に任命された。シリントン盟、ウランチャブ盟などの盟旗の書記を勤めた総軍軍官
学校の卒業生も数多くいた¹⁹³。

総軍軍官学校の教員、生徒たちの中には中国人民解放軍の解放戦争で犠牲になった人も
たくさんいた。騎兵師師団長のトゥメンウルジーと一期生の騎兵師連隊長ウネンバトは
1946年に張北地方の小山の上で国民党軍との戦闘によって犠牲になった。そのため内モン
ゴルが「解放」された後、シリントン盟にあるこの山を「ウネン山」と称した¹⁹⁴。

以上述べたように、総軍軍官学校の教員や生徒たちは共産党側に参加した後すぐに人民
解放軍に加えられ、軍の騎兵師の重要な部分を担って、共産党による内モンゴル「解放」
や国民党軍との戦闘に欠かせない役割を果たした。

¹⁹² 史料⑥『呼和浩特史料』第7集, p. 212。

¹⁹³ 史料⑥『呼和浩特史料』第7集, p. 212。

¹⁹⁴ 史料⑥『呼和浩特史料』第7集, p. 213。

小結

徳王は、内モンゴル自治独立運動の始まりとなった蒙政会成立（1934年）前の1932年頃から日本の敗戦（1945年8月15日）までの間、蒙疆政権によるモンゴル人の軍事強化に積極的に関わっていた。日本の陸軍士官学校や満州国の興安軍官学校など、日本の近代の軍事教育を背景とする軍官学校を卒業したモンゴル人を重視して日本の支援を獲得し、さらに日本の陸軍幼年学校、陸軍士官学校をまねて蒙疆政権の幼年学校、軍官学校を創設したのである。徳王は、蒙古軍政府成立（1936年）前においても「幹部学生隊」において日本の陸軍士官学校の卒業生であるフフバートルを隊長として訓練をおこなっていた。蒙古軍政府成立以後は自ら最初の軍官学校を創設したほか、さらにレベルの高い日本風の軍官学校の創設を提案したのである。日本側と交渉した結果できたのが日本の陸軍幼年学校と陸軍士官学校を完全にまねた蒙古軍幼年学校と蒙古軍総軍軍官学校であった。

本研究で触れることができなかった徳王の親衛隊においても、日本の陸軍士官学校を卒業したハダンバートル（暴徳彰）を1941年に蒙古軍から転任させて徳王の護衛隊長とした。そして蒙古軍第七師、第八師から精強なモンゴル人兵士を集めて護衛隊を組織し、東条英機内閣下の日本政府が送った小銃五百挺で護衛隊の武装を整えた¹⁹⁵。徳王は日本の陸軍士官学校を卒業したモンゴル人を重視し、身の回りにおいていたが、これらの行動はあまり知られていなかった。

中国における近年の研究においては、蒙疆政権を日本によって占領された単なる傀儡政権とか単なる植民地としてみる傾向が強い。しかし、日本側の政策とはまた別に、徳王自身が主導して積極的に日本式の軍事教育を受け入れていたという側面を無視してはいけない。徳王はあくまで民族自決を求めて日本の支援を得ようとしたのである。本章で述べたようなモンゴルの自治独立運動のために軍官学校を創設するという徳王の強い願望と提案がその背景に存在していて、日本人教官たちもその構想が日本の内モンゴルに対する政策と合致していると判断していた。その結果として蒙古軍幼年学校、蒙古軍総軍軍官学校が創設されたのであった。そうやって創設された内モンゴルの軍隊は、その後の蒙疆政権の歴史やその後の中国とモンゴル民族の歴史に大きな影響を与えたのである。

¹⁹⁵ 森（1994）, p. 267.

終章 結論と今後の課題

第一節 結論

蒙疆政権に関する本研究の内容と結論を章別にまとめると以下ようになる。

まず、第一章では蒙疆政権設立前の歴史的情勢について検討した。満洲国の建国と東部内モンゴルの情勢を述べ、内モンゴル東部全域における漢人農民に反対する反開墾闘争が徳王に与えた影響がいかにより自治独立運動に繋がったのか、そして、日本と協力する前に徳王の自治独立運動を検討した。また、関東軍初期の内蒙工作が徳王の支配する西部内モンゴルを中心として「蒙古国」建設を最初の提案であったことを検討した。

第二章では、まず最初に、蒙疆政権による1936年の募兵工作が、どのような時代背景のもとで行われたかを検討した。満洲国の建国後、ソ連は東支鉄道を満洲国に売却し、満洲国における勢力を失った。しかしソ連はモンゴル人民共和国領内に軍隊を集結して、日本・満洲国と軍事的に対立している状態であった。このようなソ連・外モンゴルと日本・満洲国との対立状態のゆえに、関東軍は西部内モンゴルの軍事政権のためにモンゴル人の軍隊を募集して、内モンゴルの軍事力を強化するという政策をとった。募兵工作を主導した関東軍側の板垣征四郎参謀長は当時の国際情勢の中で秘密裏に命令を出したのである。しかし、関東軍のこの政策だけでは蒙古軍の第二軍を編成できるような大きな成果を成し遂げることは不可能であった。

第二章の結論としては、以下のようなことを明らかにした。当時の募兵工作は多くの困難に直面していた。関東軍が大量の人員費や時間を使っても徴兵するのに効果はなかった。それに対して煙草谷はモンゴル人のナショナリズムに訴えかけるという特別な手段を考えて、モンゴル人の兵士を集めることができた。また徳王が宝貴廷、烏雲飛、包悦卿などの人物に命じて煙草谷の下で協力させたことで、煙草谷とモンゴル人一般民衆との間に交流ができたことが考えられる。新たに募兵された兵士の中に、李守信の昔の部下や彼の下に身を寄せてきた人々が多くいたこともわかった。

次に募兵地承德から集結地徳化までの間は420kmもの長い距離があり、徒歩だと1ヶ月もかかる長い行軍になった。大量の物質補給が必要となるため、その大部分の資金は煙草谷自身が元満洲国軍第五軍管区司令官であった張海鵬將軍との個人的関係を使って解決した。熱河省長であった張海鵬は、熱河省の各県において県の商会から部隊に物資を無償給付するよう布告して、兵隊の徳化までの行軍途中での補給問題が解決した。

募兵工作で煙草谷平太郎が一番重要な役割を果たしたのは当然であるが、以上に述べたような全ての要素が揃った結果として蒙古軍の第二軍が成立することになる。

一方、日本の内蒙工作と、徳王が自ら主導したモンゴル民族自治運動との影響力の下で編成された蒙疆政権の軍事組織、蒙古軍は、その内部構造や変遷の過程から見ると、李守信個人の果たした役割が非常に大きかったということがいえる。まず、蒙古軍第一軍として編成された李守信の察東警備軍は蒙古軍の中で一番人数が多く、戦闘力も他と比べれば著しく強いものであった。また、蒙古軍政府が成立した際に募兵工作によって集められた兵士は、李守信の部隊を目指して身を寄せてきたモンゴル人が圧倒的に多かった。当時熱河省のモンゴル人の若い人々は徳王を知る人が比較的少なく、募兵の際のモンゴル民族復興というスローガンがあっても、李守信の影響力が徳王以上のものであったことは否定できない。

募兵工作によって新たに編成された蒙古軍第四～九師が、実際に李守信の昔の部下や李守信の有する部隊統率能力を信用して集まってきたモンゴル人から成っていた上に、徳王の直轄部隊として李守信が編成した警衛師（蒙古軍第九師）を含めて、李守信や李守信に味方するモンゴル人たちこそが蒙疆政権の軍事組織を支えてきたのである。

続いて第三章の内容と結論は以下の通りである。蒙古軍はモンゴル民族の自治を目指すために設立された軍事組織であるが、当時の中国国内や世界大戦、ならびに国際関係の情勢の中では、内モンゴルの蒙疆地域に設立された地方部隊の一つであり、日本の傀儡政権が有した軍隊の一つでもあったといえる。

李守信の支配する蒙古軍は元来、熱河の小軍閥としての地方部隊である毅軍の一部であり、その後幾多の改編を経たが、その地方部隊としての性質はそのまま蒙古軍に維持されてきた。すなわち、その戦力や戦場の規模も終始内モンゴルや蒙疆の勢力圏に限られたし、さらには、一部がその後満州国の軍事力を補うために、満州国に移動させられたことは、軍隊を管理する最終的な軍事的・政治的権限をモンゴル人側が有していなかったことを物語る。

特に毅軍の場合は、日本が占領する前から、すでに内モンゴル東部や熱河省一帯において、各軍閥混戦の時期に各勢力の間を揺れ動いており、安定的な軍事組織としての性格を備えていなかった。また、日本が開魯を爆撃することが李守信と関東軍との接触の契機となり、両者は最初是对戦していたが、対戦中に東北騎兵十七旅の最高司令崔興武の下野などの原因によって東北騎兵十七旅が日本と対戦する戦略を失い、結局、李守信が部下を率

いて日本側に降伏するに至った。そして、最終的に満州国の正規軍ではなく「治安警備軍」となる。

また、日本の内モンゴル占領から敗戦までのプロセスを見れば、蒙疆政権及び蒙古軍は常に日本側と重大な関わりがあって、間違いなく当時の日本の一傀儡政権であったといえる。特に1938年に駐蒙軍を設置する前までは、関東軍が蒙疆政権や蒙古軍の建設について、表裏両面の指導をしていた。また駐蒙軍設置以後も、蒙古軍は確実に日本軍の支配下に入っており、軍内部の改革や人事異動及び作戦行動の全てが日本側の指導の下で行われなければならなかった。

ただ、蒙古軍が日本の関東軍所属の軍人によって指導を受けていたことは事実であるが、蒙古軍を単純に日本の傀儡軍であったと決めつけてしまうと、蒙古軍が持つ他の側面に対して無関心をもたらす危険性があると思われる。即ち、蒙古軍の存在を日本の内蒙工作によって成立した蒙疆政権時期のみに限定することによって、日本による占領期の前後にも歴史上の舞台に存在し、重要な役割を果たしたことを忘れてはならないのである。特に戦後における存在意義を忘れてはならない。

本研究の第三章で取り上げたように、蒙古軍が建設される前から、すでに存在していた李守信の部隊の存在と、その後の蒙疆政権以降の「蒙古軍」と称される軍事組織とのつながり等々を考えれば、筆者のこの視点を証明することが可能であろう。

日本からの支援を受けたかどうかは別として、当時、中国、モンゴル人民共和国、ソ連、日本、満州国という各勢力の絡み合った中で、内モンゴルの上層部が、各勢力との関係を計りつつも距離を保ち、また日本の支援を有効に利用した上で、短期間とはいえ、戦乱の時期において自存を図ることができたことは、日中両国の近代史、またモンゴル民族の歴史上に消すことのできない事実を残したといえる。中でも、蒙古軍の設立に大きく貢献した李守信とその部下たちが、毅軍から東北騎兵十七旅へ、そして日本支配下の興安警備軍、察東警備軍、そして蒙古軍の第一軍となったプロセスや、徳王系統の蒙政会保安隊が新たに募兵された多数の新兵を加えて蒙古軍の第二軍へと編成されていったプロセスには、理想的な蒙疆政権の軍事組織にはなれず、内部の政治的バランスを取るための争いなどによって勢力が衰弱したとはいえ、大きな歴史的意義があったといえる。

蒙疆政権の建軍の経歴からいうと、まず李守信と徳王が連携したことによって、旧李守信軍を中心とする蒙古軍の第一軍が成立する。そして、これとほぼ同じ時期に行われた大規模な募兵工作によって第二軍の大部分が形成された。

蒙疆政権の管轄地は内モンゴルのウラーンチャブ盟、シリンドル盟、イフジョー盟、チャハル部、綏遠を中心とする地域であり、蒙疆政権はもともとこの地方で蒙政会の保安隊や徳王の直轄部隊などの数少ない部隊を有してはいたものの、蒙古軍の主要な部隊である第一軍と第二軍は全て蒙疆以外の地域に由来するということが本研究によって明らかになった。

この二系統の部隊の歴史的背景はそれぞれ異なっていて、蒙疆政権の配下に入ってから全く異なる道筋を歩いていく。本研究の第三章で触れたように第一軍は、蒙疆政権の交通ルートや治安を維持する「治安警備軍」として再編されるが、第二軍は新たに募兵されたモンゴル人兵士であったため、装備の強化が行なわれた上に、幹部を育成する軍官学校まで設置され、さらなる軍事上の発展の道を進む。そもそも徳王が日本と協力した目的はモンゴル人の独立を目指すものであり、蒙古軍をモンゴル人の軍隊として編成したいという希望があったため、結果として漢人部隊の改編に同意したものと考えられる。一方、日本側が漢人部隊の改編を主導したのは、漢人部隊による反乱や民国側への寝返りを警戒したためである。こうして徳王と日本側の意見が一致した結果、蒙古軍内部を大きく改革し、漢人部隊を全て蒙古軍から排除したのである。

第四章では徳王が、モンゴル自治独立運動の始まりとなった蒙政会成立（1934年）前の1932年頃から日本の敗戦（1945年8月15日）までの間、蒙疆政権によるモンゴル人の軍事強化に積極的に関わっていたことについて検討した。日本の陸軍士官学校や満州国の興安軍官学校など、日本の近代的軍事教育を背景とする軍官学校を卒業したモンゴル人を重視して日本と協力し、さらに日本の軍官学校をまねて蒙疆政権の軍官学校を創設したのである。徳王が日本側と交渉した結果できたのが、日本の陸軍幼年学校と陸軍士官学校を完全にまねた蒙古軍幼年学校と蒙古軍総軍軍官学校であった。

徳王は蒙古軍政府成立（1936年）前の時期にも「幹部学生隊」において日本の陸軍士官学校の卒業生であるフフバートルを隊長として訓練をおこなっていた。蒙古軍政府成立、蒙古軍第二軍のモンゴル人兵隊の編成以後は徳王が自ら最初の軍官学校を創設したほか、さらにレベルの高い日本風の軍官学校の創設を提案したのである。蒙古軍幼年学校と総軍軍官学校を卒業した生徒たちは、結局この蒙古軍の将官として務めることになった。蒙古軍幼年学校と蒙古軍総軍軍官学校の生徒たちは日本式の軍事教育を受けながらもモンゴルの歴史、文化、言語も教えられていた。幼少年から青年までの軍事教育から蒙古軍の軍官養成においても蒙疆政権の枠内で実現できたのである。終戦直前において蒙古軍幼年学校

の生徒たちははモンゴル人民共和国へ亡命して、蒙古軍総軍軍官学校の生徒たちも当時国共内戦の状態に巻き込まれ、結局、中国共産党側に投降したのであった。

第二節 今後の課題

蒙古軍の第一軍と第二軍に関する今後の課題としては、第二軍を中心とする煙草谷平太郎の募兵工作以降もいくつかの小規模な募兵工作が見られるので、引き継いでこれらの募兵工作の検討を行なっていきたい。治安警備軍として編成された第一軍に関しても、蒙疆政権の中でいかなる役割を果たしたのかを明らかにしていきたい。

本研究の第四章では主に、蒙疆政権による幹部学生隊、幼年学校及び総軍軍官学校の創設と徳王との関連を明らかにすることを試みた。一方、最近、『脱南者が語るモンゴルの戦中戦後』というモンゴル人民共和国へ亡命した元幼年学校の生徒ブレンバヤル・ビレクトの回想録（ブレンバヤル・ビレクト 2015）が出版され、脱南者によるさらなる回想録や記録が出現する可能性が出てきた。ブレンバヤル・ビレクトの出身地であるシリングル盟はフフホトよりもモンゴル国に近いので、この地出身のモンゴル人学生たちが「憧れの国」であるモンゴル人民共和国へ亡命したのかもしれない。フフホトの総軍軍官学校の大多数の生徒たちとは全く異なる道を歩んだこれらの人々については、今後の研究課題としておきたい。

また徳王の主導によって幼年学校、軍官学校以外にも蒙疆学院、女子学校、小学校、中学校などの学校が創設された。日本人教師や日本の教育理念が導入されたこのような学校が蒙疆政権時代に数多く創設されている。蒙疆政権が単なる日本の傀儡であった、或いは植民地であったという説は現代中国で圧倒的な支持を得ているが、近代における内モンゴル人が自ら日本から学ぼうとしたこれらの行動をも研究していく必要がある。

今後はこの募兵工作によって集まった兵士たちについてもより詳しく研究し、蒙古軍全体の歴史を明らかにしていきたい。また、現役の軍人ではないのに募兵工作に関わった煙草谷平太郎などの個人史についても研究を続けたい。モンゴル人の兵士によって蒙疆政権を増強しようとした徳王の思想についても今後の研究としたい。

主要史料一覧

史料① 春日行雄（かすがゆきお）編纂（2004）『蒙古軍史稿』の中に収録された煙草谷平太郎自身による手書きの回想録「関東軍内蒙工作」。この『蒙古軍史稿』全体がゼロックスコピーによる複写本であり、「関東軍内蒙工作」の部分は下記史料②の後半部分を煙草谷自身が改めて書き直した上で編纂者春日に提出したものと思われる。

史料② 防衛省防衛研究所所蔵史料 文庫-依託-325「熱河作戦以後の満軍指導と蒙古工作（綏東事件）一元満軍指揮官 煙草谷平太郎」。この史料は煙草谷平太郎が自分自身の経歴を記録した回想史料である。

史料③ 香川県立図書館所蔵の煙草谷平太郎自身による手書き自叙伝『一生浪人の一生』1—7巻¹⁹⁶。この内の内蒙古に関する部分は、史料①、史料②で煙草谷平太郎が記述した部分とほぼ同じ内容であるが、その前後の部分には、ここからしか知り得ない情報が多く含まれている。

史料④ 『内蒙古文史資料』シリーズの『徳穆楚克棟魯普自述』（第3輯、第6輯、第13輯）、『李守信自述』（第20輯）、『内蒙古文史資料』（第29輯）博彦們都（ボインメント）の回想録が含まれている。）、『偽蒙古軍史料』（第38輯）等総数50輯。内蒙古人民出版社1979年。

史料⑤ ジャククト・スチン著1985『我所知道的徳王和當時的内蒙古』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。シリングル盟政務院に務めていた札奇斯欽（ジャククト・スチン）の回想録。

史料⑥ 中共呼和浩特市党史資料徴集事務室編集『呼和浩特史料』第六集1985年、第七集1986年（出版社名の記載なし）。

史料⑦ 蒙疆新聞社が昭和十九1944年に発行した『蒙疆年鑑』。

史料⑧ 松井忠雄1966『内蒙三国志』原書房。関東軍の熱河作戦に参加したドロンド徳化の元特務機関補佐官による回想。

史料⑨ 板垣征四郎刊行会編1972『秘録 板垣征四郎』芙蓉書房。

史料⑩ 小林龍夫・島田俊彦編1964『現代史史料』7、島田俊彦・稲葉正夫編1964『現代史史料』8、角田順編1964『現代史史料』10。みすず書房。

¹⁹⁶ 長志珠絵先生（神戸大学）の御教示によってこの史料の存在を知った。謝意を表したい。

史料⑩ 「アジア歴史資料センター」の史料。ウェブページにて閲覧可能な日本の防衛省防衛史料館所蔵史料：昭和戦前期（A B C E F G H I M N Z）門（すでにデータベース化されてインターネット上で公開されている）。「満州-満蒙-69」、「満州-満蒙-106」、「漢人部隊移管計画」C13021510600。日本陸軍第七師団が1934年に作成した記録である『熱河常報』の17号「朝陽県ニ於ケル蒙旗ノ県治ニ服セサル件」、37号「朝陽県下ニ於ケル蒙古保安隊存続ニ関スル満蒙両当局ノ意見ニ就テ」等。防衛省防衛研究所所蔵。

史料⑪ 日本の防衛省防衛研究所所蔵史料（ウェブ上での公開がなされていない史料）陸軍一般資料 「満洲-満蒙 54 蒙古軍軍事顧問部」、『熱河常報』の36号「熱河宋哲元軍配置概見図」。

参考文献

日本語研究文献

岩谷将 2007 「訓政制度設計をめぐる蒋介石・湖漢民対立」『アジア研究』

Vol. 53, No. 2,

麻田雅文 2012 『中東鉄道経営史—ロシアと「満洲」1896-1935』名古屋大学出版社。

伊藤隆・季武嘉也 (2005) 『近現代日本人物史料情報辞典』2 吉川弘文館

内田知行・柴田義雅 2007 『日本の蒙疆占領 1937-1945』研文出版

内田尚孝 2013 「察哈爾をめぐる日中関係—土肥原泰徳純協定成立過程」『同志社大学学術リポジトリ』2号, pp. 91-117

エルドンバヤル 2011 「蒙古青年結盟党 (1938-1941) から蒙古青年革命党 (1944-1945) へ—日本支配期から戦後にかけての内モンゴルにおける民族主義政党—」(神戸大学博士論文)

江夏由樹・中身立夫・西村成雄・山本有造 2005 『近代中国東北地域史研究の新視角』山川出版社。

及川琢英 2019 『帝国日本の大陸政策と満洲国軍』吉川弘文館

岡村秀太郎 内蒙古アパカ共編 1990 『特務機関』国書刊行会

加藤陽子 2007 『満州事変から日中戦争へ』岩波新書

加藤陽子 2015 『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮文庫

河木邦夫 2010 「駐蒙軍の在留邦人の後送に関する一考察—根本中将の指揮の観点から」『防衛大学校紀要 社会科学分冊』101, pp. 41-58, 2010年09[防衛大学校]

河木邦夫 2010 「駐蒙軍の作戦に見る自衛隊への教訓—在留邦人の後送の観点から」『陸戦研究』58(685), 29-49, 2010-10 陸戦学会

ガンバガナ 2016 『日本の対内モンゴル政策の研究』青山社

黒川創 1996 『満洲・内蒙古/樺太』新宿書房

佐々木健悦編訳・補説、ブレンバヤル・ビレクト口述 2015 『脱南者が語るモンゴルの戦中戦後 1930～1950』社会評論社

佐々木健悦 2013 『徳王の見果てぬ夢—南北モンゴル統一独立運動』社会評論社

鈴木仁麗 (2012) 『満洲国と内モンゴル—満蒙政策から興安省統治へ』明石書店

中見立夫 1976 「ハイサンとオタイ」『東洋学報』57-1・2, pp. 125-170

野邑理栄子 (2016) 『陸軍幼年学校体制の研究』 吉川弘文館

福井雄三 2009 『板垣征四郎と石原莞爾』 P H P 研究所

白那日蘇 2020 「蒙疆政権における漢人部隊移管問題」 『日本とモンゴル』 第54巻 139号・140号合併号、pp. 156-171

フフバートル 2019 「蒙疆政権時代の新聞 Mongyul-un sonin sedgül に発表されたモンゴル語新語」 『学苑』 NO. 948, pp. 34-50

ブレンサイン, ボルジギン 2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』 風間書房

ボルジギン・フスレ 『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策 1945～1949』 風響者

本庄比佐子・内山雅生・久保亨編 2003 『興亜院と戦時中国調査』 岩波書店

松井忠雄 1966 『内蒙三国志』 原書房

宮脇淳子 2002 『モンゴルの歴史』 刀水書房

ミンガト・ボラグ 2019 『日本特務』 関西学院大学出版会

森久男 1992 「蒙古軍政府の研究」 愛知大学国際問題研究所紀要 (97), p79-116,

森久男 (編) 1994 『徳王自伝』 岩波書店

森久男 2000 『徳王の研究』 創土社

森久男 2009 『日本陸軍と内蒙工作』 講談社

楊海英 2018 『最後の馬賊』 講談社

楊海英 2015 『日本陸軍とモンゴル』 中公新書

楊海英 2014 『チベットに舞う日本刀』 文藝春秋

楊海英 2018 『モンゴル人の中国革命』 筑摩書房

中国語研究文献

曹永年主编 2007 『内蒙古通史』 1 内蒙古大学出版社

刘绪功 郑良台 主编 2009 『多伦县军事志』 内蒙古大学出版社

政协多伦县文史委员会 任月海 编译 2006 『多伦文史资料』 内蒙古大学出版社

朱璧/主编 2018 伪蒙疆政权时期的『巴彦塔拉盟』 广西师范大学出版社

朱璧/主编 2018 『日伪统治时期的归绥』 广西师范大学出版社

金海 2005 『日本占領時期内蒙古歴史研究』 内蒙古人民出版社

朝格滿都拉 2018 「韓風林專略」 Studies in Inner Asian history and culture 3 pp. 1-16。

菅光輝・伍健輝 1999 『中國檔案精粹—內蒙古卷』 香港：世界出版社。

中國近代兵器工業編審委員會編 1998 『中國近代兵器工業』 國防工業出版社

[参照ウェブページ]

・国立国会図書館 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956386> 陸軍軍隊符号

・『东坛军事文摘』 公式サイト <http://www.omnitalk.com/miliarch/archpage.pl> 「民初毅军」

・銃の写真のサイト <https://ja.wikipedia.org/wiki/ZH-29>

https://ja.wikipedia.org/wiki/ブルーノ_ZB26

執筆者の業績一覧

投稿掲載論文

1. 白那日蘇 (ハク ナルス) 「中华民国时期喀喇沁中旗比丁册研究 (中華民国時代のハラチン中旗における比丁冊の研究)」『内蒙古師範大学学报』(哲学社会科学蒙文)。第 40 卷 (査読有) pp. 6-8 頁。2011 年第 4 期。
2. 胡日查 (内蒙古師範大学教授)、白那日蘇 (ハク ナルス)、杭愛 「明清蒙古史研究総述」『蒙古学研究年鑑』(内蒙古社会科学院刊行) 第 7 卷 (査読有) pp. 51-62。2011 年 11 月 15 日。
3. 白那日蘇 (ハク ナルス) 「蒙疆政権における漢人部隊移管問題」『日本とモンゴル』第 54 卷 139 号・140 号合併号 pp. 156-171。2020 年 5 月。(査読有)。博士論文の第三章にあたる内容。

投稿中の論文

1. 白那日蘇 (ハク ナルス) 「蒙疆政権下の軍事人材育成機構について」。博士論文の第四章にあたる内容。
2. 白那日蘇 (ハク ナルス) 「蒙古軍政府成立 (1936 年 5 月) 前後における蒙政会と関東軍による募兵工作」。博士論文の第二章にあたる内容。

研究口頭発表

1. 白那日蘇 「蒙疆政権における漢人部隊移管に関して」日本モンゴル学会秋季大会 (2019 年 11 月 23 日於公立小松大学) での口頭発表。(査読付口頭発表)。
2. 白那日蘇 「蒙古軍政府成立 (1936 年 5 月) 前後における蒙政会と関東軍による募兵工作」内陸アジア史学会研究大会査読付口頭発表。(2020 年 10 月 31 日、於早稲田大学、zoom によるオンライン開催)
3. 白那日蘇 「蒙疆政権下の軍事人材育成機構について」日本モンゴル学会秋季大会での査読付口頭発表。(2021 年 10 月 13 日、於神戸大学、zoom によるオンライン開催)

受領した研究費、奨学金

日本学術振興会特別研究員奨励費 DC2 (2021 年 4 月-2023 年 4 月)

日本学術振興会研究科研費 (2021 年 4 月-2023 年 4 月)

謝辞

本博士論文執筆において数多くの方々のお世話になりました。

まず、研究生1年間と博士3年間の間お世話になった指導教員の萩原先生に心より感謝を申し上げます。神戸大学に入学する前の2017年から、野尻湖クリルタイなどの学会の案内を教えていただいていた。そして、2018年4月に国際文化学研究科の研究生としての指導を引き受けてくださった。この研究生1年間で、満州語、キリル文字や博士課程へ進学するのに必要な専門知識を学ぶチャンスができた。2019年4月に博士課程へ入学してからは、専門科目、論文指導演習の授業などでとても丁寧に教えていただいた。先生の授業に出席してから初めて本当の歴史の授業とはどのようなものなのかが分かったのである。先生のモンゴル史だけではなく幅広い歴史の知識は、私の一生に忘れられない影響を与えた。歴史学者を目指す私にとっては模範だと感じている。論文指導に当っては日本語の問題、論文の書き方、史料の利用方法に至るまで丁寧に教えてくださった。学習以外に、生活面でもたくさん援助していただいた。先生は私にとっては一生忘れない恩師である。

特別演習担当の谷川真一先生の授業で中国の近現代史関連の専門知識を習得させていただいた。いつも面白いディスカッションが行われていた。そして、論文審査にも参加させていただいた。学位論文指導演習担当の貞好康志先生には、コロキウムでの発表でいつも私たちを激励していただいた、そして私の博士論文審査にも参加していただき、ご指導をくださった。日本学コースの長志珠絵先生は博士3年間のコロキウム発表でいつもご指導やコメントしていただき、本博士論文を完成するのに必要な一次資料を教えていただいた。コロキウムⅢで司会を担当された伊藤友美先生にもコメントや激励をいただいた。また、ロシア語や演習の授業へ参加させていただいたシュラトフ先生、王柯先生を含め以上の先生たちに深く感謝したい。

また、多忙の中で、本論文を審査してくださり、学会発表の際にも貴重なアドバイスやコメントをしてくださった静岡大学の楊海英先生にお礼を申し上げます。

同じゼミの先輩であるアラムス先輩にも、内モンゴル自治区での資料調査の時、大変お世話になった、調査方法を教えていただき、档案馆まで連れて行っていただいた。チョルモンゲレル先輩、シリン先輩、エルドンバヤル先輩にもSNSやEmailでいつもわからないことを尋ねていた。アローハン先輩にも2018年4月の神戸大学にきた最初の時期にお世話になった。

アルチャ先輩、包苓春先輩、ハスゴワ先輩、永良さんにも入学時期から卒業するまで、論文執筆に関していろいろ教えていただき、生活の面でも面倒を見ていただいた。奨励費や科研費申請書の書き方を教えていただいていた矢野さん、団さんにも感謝したい。

修士課程の指導教員であった内蒙古師範大学の胡日查先生、愛知大学大学院修士課程の指導教員であった高明潔先生、大学の担任であった斎英（ブレンソド）先生、那順套格套，白斯古愣等同級生の皆、積極援助していただいた布仁青格乐，扎拉嘎夫、其力木格等名古屋にいる友人たちにも心より感謝の意を表したい。

最後に、博士課程進学から修了まで全力で援助して、理解してくれた父親と姉にも感謝しています。